第1部　大宰府の器と編年

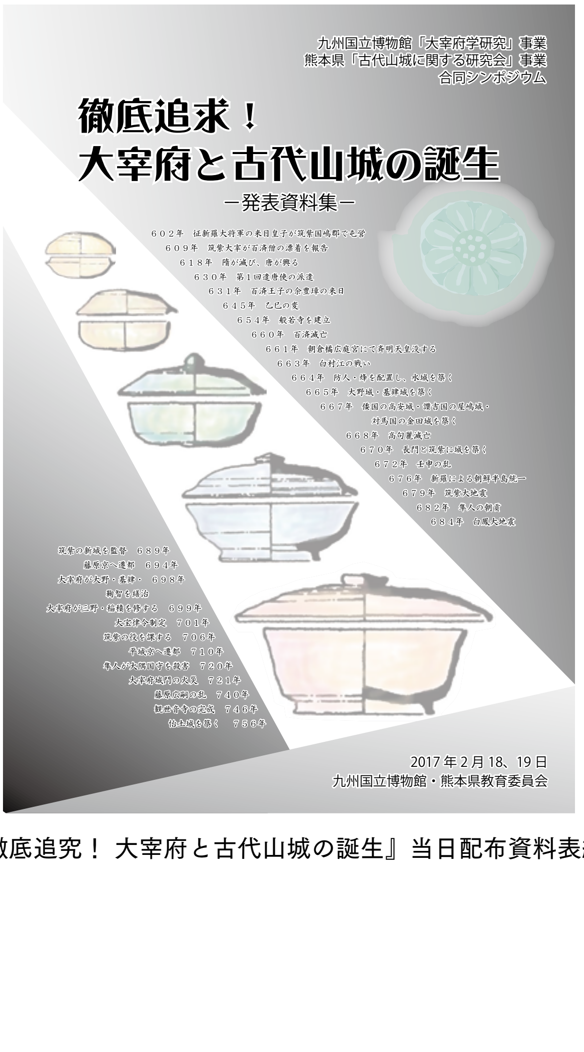
大宰府官衙建設期の土器群

第１部　大宰府の器と編年

第１章　西海道の土器編年研究　長　直信　13
第２章　西海道北部の土器生産　石木　秀啓　41
第３章　西海道南部の土器生産　松﨑　大嗣　61

第１部では､歴史研究の基盤の一つである土器編年を対象に､７～８世紀における西海道の土器（須恵器・土師器・成川式土器）に関する研究動向を整理する。とくに焦点を当てるのは、大宰府と古代山城の建設期にあたる７世紀（663年前後）の様相で、基準資料や方法論の妥当性を再検討し、最新の編年案を提示する。

なお、第１章～第３章の掲載論考は、いずれも平成29年（2017）２月18・19日に九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同で開催したシンポジウム『徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生』の当日配布資料を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。



『徹底追究！ 大宰府と古代山城の誕生』当日配布資料表紙

第1章

西海道の土器編年研究

長　直信

はじめに

考古学の年代　考古学の年代には相対年代・交差年代・暦年代の三者がある（武末2002）。

相対年代　一つの地域において、ある考古資料が別の考古資料よりも古いか新しいかという相対的な位置づけである。それらはその地域で得られた一括遺物や、新旧の関係がわかる事例を中心に、層位学的検討と型式学的検討を加えて決定し（図1－1、1－2）、これらの手続きでえられた一連の大系がいわゆる考古学的な編年である。本報告の対象となる7世紀の土器の編年を例にすれば図1－3のようにも表現できる。

交差年代　それぞれの地域で樹立された相対年代を結びつけ、横の連結をとることで決定する。異なった地域の考古資料の編年との併行関係を確定していく作業である。そのためには、「A地域のⅠ期の型式の遺物がB地域のⅡ期の一括遺物に含まれ、B地域のⅡ期の型式の遺物もA地域のⅠ期の一括遺物の遺物にある」（図1－5）という関係成立が肝要である。A・B両地域の考古資料を、異なった地域の編年の中で交差した状態で確定することから交差年代決定法の名がある。

暦年代　絶対年代・実年代ともよばれ年紀が示されたり年紀を推定できる資料を含む一括資料を用いて相対編年の各分期に付与されるものである。

これらを導く手続きはそれぞれ別個の作業であるが、相対編年の設定を第一に行う必要がある。以下では上記の定義に基づき報告を進める。

なぜ7世紀の土器編年が重要か　対象とする7世紀の土器編年は前後の時代と比較して編年観・年代観の2点について研究者によって少なくないずれがある。このずれがなぜ問題かというと、西暦601年から700年までの7世紀は日本史では概ね古墳時代後期・終末期とされる時代から奈良時代直前の時期に相当し、定型化した原理やシステムが未確立な古墳時代的な様相の中に律令的な様相（たとえば大化改新における諸政策、近江令・飛鳥浄御原令などの法整備やこれに伴う官僚制への移行など）が「段階的」に浸透していく時期であり、列島における律令国家の成立がどの時点でどのように行われたかに直結する日本史上でも極めて重要な時期にあたる。

7世紀の考古資料は、律令国家体制確立に向けさまざまな支配機構が列島各地で顕在化する。古墳時代後期から終末期古墳研究、地方官衙研究、集落研究のなかでの土器編年の意義はすこぶる高く、すべての前提といっても過言ではない位置にあり、土器の年代観しだいで7世紀から8世紀初頭の遺跡の評価が大きく変わるのである。代表的な考古資料をあげれば前方後円墳や群集墳の終焉と大化薄葬令(646年）の実態、評衙の出現と大化改新の関係、郡家・国府の認識、西海道では筑紫大宰・大宰府との関係や朝鮮式山城・神籠石の評価などあまた存在し、年代観の変化が遺跡の評価を変え、これが集積されることで列島の国家形成史全体を書き換えかねないほどの問題を内包する。

本報告の目的　西海道における7世紀の土器編年研究の現状報告が報告者に課せられた題目である。類似したテーマで2009年に発表した内容（長2009）と重複する部分もあるが、①宮都の置かれた飛鳥・近江・難波地域と西海道3国を対象に（図11－2・3）7世紀に使用された土器様相の内容を提示し、②両地域の編年手法の差異や土器組成の差異の有無や地域性を確認する。最後に③西海道における暦年代推定資料の現状と今後の編年論に関する若干の問題提起を行いたい。

１．７世紀土器編年研究の現状

７世紀の須恵器編年研究史については長2012aでまとめているので割愛するが、2000年を前後する時期に７世紀という社会を土器からいかに読み解くかという問題を背景に、編年観・年代観の２点について全国的な議論がなされている。これには前述した律令体制の整備と古墳時代的社会がどこまで残存するか、換言すれば推古朝・孝徳朝・天智朝・天武持統朝に代表されるそれぞれの施策の実効性の度合いに関する評価と密接であり、結果として従来の編年観に対して各土器形式が予想以上に漸移的に変遷すること、具体的には坏Ｈ・坏Ｇ・坏Ｂ（図1-3）の共伴関係を一部許容し、飛鳥編年の年代下方修正に伴い土器の年代観についても下降する可能性が高いとの結論をもって終息したかのように見えるが、西海道をはじめ地方においてはどこまでその年代の下降させるかについての定説はなく、依然としてさまざまな編年観・年代観をもとに歴史像が構築されている。

７世紀の器種構成　対象とする７世紀に使用された土器類を確認しておく（本報告の土器形式名については奈良文化財研究所分類を元に、便宜的にではあるが図３−１・３−２に示したものを使用する）。図３−１は飛鳥を中心とする宮都周辺の様相を、図３−２は筑前を中心とした西海道北部地域の様相を図示してみた。図３−１のＡに示す石神遺跡より出土した巨大な鉢や蓋（飛鳥Ⅰ）の存在は特異であり、図６−２の254に示す難波長柄豊埼宮期の台坏鉢と蓋も含めて周辺地域にはみられない宮都における饗宴等にかかわる特注品と考えられるが、須恵器については概ね類似したものを受容・消費していることを確認しておく[1)]。土器編年の構築にあたっては、これらの各土器形式が、どのような組成（セット関係）を構成しながら、いつ出現・盛行し、消滅するのかを地域ごとに明らかにしていく作業が必要となる（表４参照）。なお、宮都周辺の土師器供膳具形態は、暗文を多用した特徴的な調整をともなっており、後述する地方における畿内からの搬入品として識別が容易であり、交差年代の手がかりとなる。

モノサシとして土器編年　報告者はこれまで土器編年を精度の高い歴史像を構築するためには不可欠なモノサシと考え、須恵器を中心とした編年的検討を進めてきた。具体的には土器における暦年代比定方法の問題点を整理するなかで、様相比較から交差年代への移行を目指した旧国単位での相対編年（地域編年）構築とその地域性の抽出（長2012a・2013a）と、地域編年に基づいた集落論や官衙論、土器からみた地域間交流の様相について検討を行ってきた（長2012b・2013a・2013b・2014）。こうしたモノサシとしての土器編年は、複数の時期にまたがる遺跡の一時期における遺跡景観を復元したり、その変遷を検討するうえで必須のものであり考古学における一般的なあり方といえる。

土器様式変化の意義　近年、小田裕樹氏は律令体制成立期における礼式・服装面などの視覚的な部分での唐風化にともなって、儀式の場での食事に関わる礼式の整備も進められ、伝統的な食事様式から東アジア世界に共通する食事様式（図2-7）の採用が図られたとの考えから、７世紀の土器様相の変化の歴史的意義について具体的に整理した。この時代の前半の土器群を「飛鳥時代前半期土器様式」に、後半の土器群を「律令的土器様式」とに大別し（図2-6）、東アジアにおける土器様相の影響と倭国における独自色を整理（図2-7）、食器における階層性についても踏み込んだ提案を行った（小田2016b）。図２−６や図４−１に示すように「律令的土器様式」が確立する飛鳥Ⅲ（天智・天武朝初頭）以後、集落や官衙遺跡などの遺跡の性格差に、大型供膳具を上位器種とする食器による階層性が反映された可能性を提示したのである。７世紀は図１−３に示されるように100年足らずの期間に主体となる須恵器が坏Ｈ→坏Ｇ→坏Ｂへとダイナミックに変遷する日本史上でも類をみない時代である。先にみたモノサシとしての土器編年の設定作業を通して、このような土器変化を生みだした歴史的特質を明らかにしようとした視点といえる。

氏の一連の見解については賛同する点が多々あり、当該期の土器研究上、今後欠かせない視点となると考えるが、土器編年を編んでいく上でも重要な問題を提起しているように思える。すなわち、これまでも尾野善裕氏（尾野2001）を始めとする古代の土器研究会において提起されてきた「遺跡の性格差に

よる土器の使い分け（作り分け）」の議論に関わると考える。小田氏は宮都とその周辺集落の比較を行うなかで、食器法量の複雑性や台付食器の多さは「上位要素」として位置付けられると想定したが、地方の土器において従来「時期差」ととらえられていた土器群の「一部」が、同時期の「階層差」として還元される可能性をもつからである。これには７世紀後葉から８世紀に特有の「律令的土器様式」が地域社会においてどの程度受容されているかという問題や、旧形式の残存を混入物とみるか否かという基準となる資料の一括性に関するよりシビアな資料論的な再検討へも波及する問題であり、当該期の土器編年理解がさらに豊かに（同時に複雑に）なる可能性を有する。これについては西海道の土器様相を俯瞰した上で後述する。

編年の目的　ところで編年は「何のために」構築するかでその精度は変わる。現実的に可能であるかはわからないが、目的によっては10年単位に細分する「細分派」の編年もあれば（図1-6）、あえて大きな枠組みの設定にとどめる「大別派」の編年などさまざまである（森川2015）。編年の細分は客観的な手続きの上であれば否定されるものではないが、旧国単位の編年を試行する場合、数点の土器に対して細分化した土器編年を照合させることは困難であり、編年対象エリアの規模や内容にもよるものの、基本的には適度な区分が求められると考える。その場合、可能な限り当時製作・使用された須恵器の全器種の総合的な変化を検討すること、そのためには各土器の「形式」が型式学的にどのように消長するかを重視する必要がある。すなわち、遺跡から出土する土器一形式のみでは時期の詳細を確定できることは稀で、土器様相全体のなかでどの程度の存続幅がみこめるか、その出現・盛行・終焉のプロセスを把握することが重要と考える（図2-4）。

２．宮都周辺の土器編年研究の現状

近年の宮都周辺の編年研究　発掘調査の蓄積や報告資料の増加から、①飛鳥Ⅰ・Ⅳの資料が増加した点（森川2015、小田2014）、②飛鳥Ⅲの基準資料が公開された点（西口・玉田2001、小田2012aなど）、③尾張産須恵器の認識が進み既存報告資料（飛鳥Ⅱの基準資料であった水落遺跡等）にあらたな評価が加えられた他（尾野他2016）、④難波地域において前期難波宮期前後の土器様相が明確になり飛鳥Ⅰ後半からⅡにおける宮都の土器組成が明らかになった点（佐藤2000、市川2016）、⑤列島最大規模の須恵器窯陶邑窯跡群における編年の再構築が行われた点（佐藤2003）、⑥畿内地域に特徴的な暗文土師器（いわゆる畿内産土師器）の編年的な研究が本格的に開始された点（森2016）（図15-6・7）などがあげられる。また、これまで問題にされてきた坏Ｈの存続幅は、飛鳥Ⅰ～Ⅱの約70年間（600年～660年代後半）にわたり宮都周辺でも「消費」され続けているという事実についても変更はない。同時に飛鳥Ⅲを境に宮都では出土しなくなる点は重要である（表4①）。ここでは主として小田裕樹2014、佐藤隆2000・2003の整理によりながら７世紀において宮都がおかれた飛鳥地域・難波地域・近江地域の土器様相を確認する。

（１）飛鳥編年（表1・図3-1・図4-2）

飛鳥Ⅰ（想定年代：600年代～640年代）　金属器を志向した土師器である土師器坏Ｃの出現が画期。土師器坏Ｃは出現当初より法量分化が見られる。須恵器坏Ｇも存在するが坏Ｈが主体である。蓋の形態が傘形に直線的な形態をとっており、坏身の形態も深手である（坏Ｇ１・坏Ｇ蓋１と便宜的に分類　図3-1参照）。飛鳥Ⅰは型式学的に３つの段階に細分されているが、新相を示す飛鳥池遺跡灰緑粘砂層、甘樫丘東麓遺跡SK184（図5-1）では新たな器種である土師器皿Ａが少量ながら出現しており、列島における皿型食器の出現期ととらえることができる。新相の段階は前後の土器様相からみて640年代に中心があると考えられる。なお、図5-1左下のSK184出土土器の外形トレース図に示されるように、極めて規格性のとれた供膳具類を受容しており、一般的な集落遺跡との質・量的な差異を明瞭に伝える資料である。

飛鳥Ⅱ（想定年代：640年代～660年代）　土師器坏Ｃの法量縮小化、ヘラミガキの粗略化、ラセン暗文を

主とする暗文が発達。坏Ａが出現するがごく少量のようである。須恵器坏Ｇと坏Ｈの比率が同程度となり、坏Ｇに小型化、蓋の肩が張り、器高が高くなるなど型式変化がみられる（便宜的に坏Ｇ２・坏Ｇ蓋２と分類）。供膳具類の小型化が顕著となる。

飛鳥Ⅲ（想定年代：660年代後半～670年代） 土師器坏Ａ、須恵器坏Ｂが成立し、一定量存在するようになる。須恵器坏Ｇと坏Ｂは併存するが坏Ｈは消滅している。土師器坏Ｃのみにみられた法量分化が須恵器・土師器に波及する（図５－２）。

飛鳥Ⅳ（想定年代：680年代を中心とした670年代は～680年代後半） 土器の器種数が著しく増大し、須恵器坏Ｂの蓋にかえりをもつ坏Ｂ蓋１、この時期に出現するかえりをもたない坏Ｂ蓋２とが共存し、須恵器坏Ｇは坏Ａ、坏Ｂと比較してごく少量出土する。

飛鳥Ⅴ（想定年代：690年代前後～710年） 前段階の型式的発展があるものの大きな様式変化はみられない。須恵器坏Ｂ蓋１が消滅し、坏Ｂ蓋２で占められる。

（２）難波編年（図６－１～６－３・表２）

近年の難波編年研究 図６－１～３は佐藤隆氏が示す難波編年の基準資料である。概要は表２に譲るが、難波Ⅲ中段階～新段階が652年に宮殿完成記事がみられる難波長柄豊碕宮段階（前期難波宮）に相当し図６－２・３に示す土器の内容は王宮における土器様相の一端を示す。坏Ｂの祖形となるプレ坏Ｂともよべそうな長い高台をもった坏が特徴的である。列島における７世紀中葉の最新の土器様相を示すものとして重要である。

（３）山ノ神遺跡　窯跡資料の様相（図８－３）

天智元（667）年の大津宮遷都に関連する須恵器窯といわれる。大津宮本体の実態解明にはまだ時間を要するようだが、本窯出土須恵器の供給地の主体が大津宮（667～672年）であったことは大方の賛同が得られている。図８－３は４基の窯跡より形成された灰原の上層資料出土資料を図示した。坏Ｇ・坏Ｂ・坏Ａを主体に少量ながら坏Ｈも認められる。その他、長頸壺・多様な形態の平底の鉢や皿・盤、金属器を模倣したと考えられる大型の坏、高盤とよべる大型の高坏など饗宴にともなうような大型食器が目につく。同時に後述する陶邑の様相と同様、生産地では古墳時代的な器種が少量ながらも生産されている点は注目される。ちなみに筑前牛頸窯跡群中にある宮ノ本４号窯と本資料の様相は非常に類似しており、中島恒次郎氏は同一様相として年代推定のための資料の一つとして例示している（中島2000）。

（４）陶邑窯跡群の様相（図７－１～３、図８－１～２）

佐藤隆氏は、陶邑窯跡群出土資料を再検討した結果、時期判定上重要な指標とされてきた坏Ｈの法量が７世紀以後、時期が下るにつれて徐々に縮小していくといった事象は陶邑周辺地域では指標足り得ないことを提示した（佐藤2003）。氏の検討結果では、坏Ｈは時期が下っても縮小しないものがあり、縮小する系譜と大形のままの系譜の存在を想定している。そして、これら坏Ｈは、坏Ｂが安定して出土する７世紀後葉（飛鳥Ⅲ併行期）まで残存していることを陶邑の数々の窯跡資料で提示した。つまり、この段階まで伝統的な古墳時代的丸底土器である坏Ｈを需要する人々と、金属器を志向した律令的な食器である平底高台付食器である坏Ｂを需要する人々とが併存していたこととなる[2)]。このような性格の異なる２系統の土器群を生産することで、幅広い需要層の要請をまかなっていたという点で全国最大規模の陶邑窯跡群に新しい性格付けが可能である。この検討は図２－５の生産地と消費地のイメージそのものであり、地方窯のあり方においても十分留意すべきであろう。

宮都周辺の土器資料・土器編年上の注意点 これらの地域は暦年代推定資料が豊富という土器編年上最大のメリットをもつことは間違いないが、編年指標とした場合、以下の点に注意が必要である。①宮都周辺は物資が集積する場であり複数産地から須恵器・土師器が搬入されるため、産地分類を意識した編年上の位置付けが必要となる（尾野他2016）。これと関連して、宮都は「基本的には」列島における土器モードの先進地であり、地方の土器編年を行う上で参考になるのは間違いないが、甘樫丘東麓遺跡SK184や大官大寺SK121出土資料にみるように、宮都とその周辺という特殊な性格の遺跡から出土する

遺物によって組まれたものであるため[3]、地域編年においては宮都地域との単純な様相比較による年代比定がどの程度有効であるのかの見極めが必要である（尾野2001・小森2005など）。②型式学的な検討をふまえつつ箱を積み重ねるように一括遺物をタテに配列する「一括遺物」配列型編年であることから（図2-1）、当時使用されていた土器の実態をどの程度反映したものであるかの判断が難しい[4]。基準資料の全容提示とその他の資料の正式報告を重ねながら、一括性の高い基準資料をもちいた、存否や頻度のセリエーションの検討（図2-2）を踏まえた「期」の設定が求められる[5]。

３．北部九州周辺の土器様相

長2009や2012aなどで示してきた内容であり紙幅の都合上各地の様相は形式消長図と各編年図に譲り、対象地における須恵器の地域色について若干の補足を行っておく。

（１）各地の様相

筑前南部（図9-1・表4②）、豊前（図9-2・表4③）、豊後（図10-1・表4④）

（２）筑前Ⅱ-２期～Ⅲ-１期併行期における須恵器の特色

筑前Ⅱ-２期～Ⅲ-１期様相下において、八女窯跡群の塚ノ谷４号窯出土資料を代表に（長・中島2013）九州各地で小型高坏の地域性が顕著となる（図11-1）。当該期は豊前の伊藤田窯跡群でも坏類以外の器種において特徴的な形態の須恵器が出現する（長2013a）。当該期の交差年代を行う上での基礎作業として各地域の特徴的な形式・属性の抽出は重要である[6]。

（３）各地域における小田編年Ⅴ期様相の状況

図12-１～７は従来問題となっていた小田富士雄氏の須恵器編年（小田1996など）におけるⅤ型式坏（以下、坏Ｇ）の単純期に関連する一括性の高い資料を提示した。坏Ｇの単独出土遺構は図示した土坑墓資料や墳墓資料が基本であり、集落遺跡は図２-３にて例示するように、単独出土にみえても共伴遺物の在りかたからみれば坏Ｂ出現時期である筑前Ⅲ-１、-２期（図12-4・6）、豊後Ⅲ期（図14-8）などの様相に位置付けられる事例が多い。安間拓巳氏が広島県内の資料状況から明らかにし（安間2002）、大林達夫氏も強調するように（大林2015）、坏Ｇは食器というよりもそれ以外の目的をもつ祭祀的な遺物で、数量の少なさからみても遺跡の性格によって選択的に生産・使用された可能性を改めて検討すべきではなかろうか。こうした観点からみると筑前南部Ⅱ-２期や豊前Ⅴ期の様相については遺物の全体組成を見直す中で改めて検討の余地がありそうである。

４．地域間の交差年代について

つぎに、宮都周辺との交差年代を検討するにあたり畿内産土師器、畿内出土九州島産遺物の検討を行う。資料は増加しているが近接した時期相互での遺物の搬入・搬出関係を見出せる資料はなく、変形交差年代となっている（図1-4）[7]。

（１）畿内産土師器の様相（図13～15-5）

近年の調査研究状況より筑前・筑後・豊前・豊後の中での分布差や一定の遺跡への偏りなどが明らかになっている（神保2016・井上2015・長2016など）。

筑前・筑後　①筑前では共伴する遺物の様相は筑前Ⅲ-２期を中心に飛鳥Ⅳの坏Ａの搬入が確認される。形態的にやや古相を示す大宰府条坊跡第98次SX005（図14-1）は飛鳥Ⅲの後半からⅣ頃と評価されている。飛鳥Ⅲ～Ⅳの過渡的な様相とすれば筑前南部Ⅲ-１期の年代の一点が670年代後半頃（７世紀第４四半期初頭前後）になる可能性がある。その他の資料からみれば飛鳥Ⅳの畿内産土師器が筑前南部Ⅲ-２期の様相下で搬入されている。天武７年（678年）の筑紫地震後に形成された掘立柱建物に切られる上岩田遺跡Ｇ区25号住居（廃棄土坑か）（図13-1）は、筑前南部Ⅲ-２期の様相を示し飛鳥Ⅲ＜Ⅳの坏Ａが

共伴する。これを地震後の片づけにともなう土坑とした場合678年直前の土器様相を示す可能性が高く、筑前南部Ⅲ−２期の上限が７世紀第４四半期初頭前後に相当する可能性が高い。

なお、８世紀代に入っても博多遺跡群・大宰府条坊跡・大宰府政庁周辺官衙跡で平城期の搬入品が確認されており、紀年銘記載木簡との共伴事例も増えることから、筑前南部の様相（山本編年Ⅲ期（山本1992））の年代的位置付けは概ね定まっていると考えられる。

豊後　下郡遺跡群第120次SX0075（図14−６）は８世紀代の遺物が混入しており資料等級に問題があるがその他の資料は豊後中部Ⅲ期の様相を示し、飛鳥Ⅲ×Ⅳの坏Ａの搬入が確認される。同じく同次数のSX1095（図14−７）からは口径指数からみて飛鳥Ⅲ頃に比定できる坏ＣⅢが出土している。豊後では坏Ｈを含む土器群が飛鳥Ⅲに併行する可能性がある。なお、臼杵市野村台遺跡田ヶ迫地区の包含層（図15−２）より飛鳥Ⅲごろの土師器高坏Ｃが出土している。遺構に伴わないため資料等級は低いが包含層中の７世紀代の遺物は図示した須恵器坏Ｈ・坏Ｇ主体の様相である。

日向・壱岐　日向では日向国府跡（寺崎遺跡）より飛鳥Ⅲ〜Ⅳの坏Ａが（図15−５）、壱岐カジヤバ古墳から飛鳥Ⅱとされる坏Ｃが出土している（図15−４）。それぞれ共伴資料の特定が難しく地域編年上での位置付けが課題である。

（２）近畿地方出土の九州系遺物

前期難波宮整地層から北部九州系須恵器甕が出土している（寺井2008）。甕の体部側面に同心円文の当て具が用いられた後､底部に平行文の当て具を使用したもので 福岡市鋤崎古墳群Ａ群１号墳･９号墳（７世紀前葉〜中葉)、羽戸古墳群Ｎ群８号墳（６世紀末）等で出土例がある。甕であるため時期決定に幅を持たせざるをえない点が惜しいが、これまで知られていなかった九州から近畿地方へ搬入された遺物の存在が認識されるようになってきたことは極めて重要であり、難波地域での出土遺物の動向が注視される。

大阪府富田林市新堂廃寺SD01からは７世紀末から８世紀前半の須恵器・土師器とともに牛頸産獣脚硯が出土している（白井2004）。この獣脚硯と同工品（同工品Ａ）と考えられる製品が福岡県春日市御供田遺跡４号住居（図12−４）において須恵器坏Ｇ単純様相の筑前南部Ⅱ−２期様相下において出土した。硯という遺物の性格上、消費地における長期の使用による結果ともとれるが、獣脚硯Ａの成立過程から７世紀中葉を遡らせることは難しいとのことである。共伴した強く屈曲する「く」字口縁の土師器甕の編年的位置付けの検討が必要であるものの、先にみた階層性の議論と集落遺跡という性格から、筑前Ⅱ−２期的様相が７世紀後葉から末まで残存しているとみることもできる。

（３）西海道北部における交差年代の検討

以前に行った筑後地域からの搬入品の分析等を踏まえると北部九州内での各様相はほぼ同一に変遷している可能が高い（長2009）。問題となる近畿地方との併行関係については以下の暦年代資料も参考に図10−２のように整理した。なお、７世紀中葉以前については不明な点が多く様相比較（同一様相比較＝同一年代）となっている点が課題である。

５．西海道における土器の暦年代比定

飛鳥地域を代表とする宮都周辺では、①飛鳥寺下層の資料に代表される文献記載遺跡の出土資料や年代の分かる寺院の創建瓦を生産した瓦陶兼業窯資料からの須恵器の年代推定を行なう方法、②被葬者が推定できる古墳の出土遺物から年代を割出す方法などが採用され、暦年代資料の少ない地域では、①近畿の編年資料や暦年代推定資料を対象に同一型式＝同一時期として時期認定を行う方法（高橋･小林1990)、②近畿と同一の土器様相に同一時期を付与する方法（中島1997)、③杯Ｇや杯Ｂ、平瓶などの新しい器種の出現を全て畿内にもとめ、畿内での出現期をそれぞれの遺物の上限年代とすることで地方編年での土器の上限を決める方法（大林1999)、④編年対象地域内で暦年代推定資料を抽出し、そこから年

代を付与する方法（山村1995）などが取られている。これらの年代論については中島（2000）において、厳密な資料批判が行われているが、以下にあげる資料は筑前地域の暦年代を考える上で一定の意味を有するものと思われる[8)]。

文献記載遺跡出土資料（図16）　①水城西門 ②大土居水城 ③大野城跡百間石垣 ④古宮古墳 ⑤筑紫大地震関連遺跡（筑後国府跡・上岩田遺跡（図13－1））

紀年銘記載資料（図16）　⑥牛頸窯跡群　ハセムシ窯跡群12地点出土「和銅六年」（713年）銘甕

文献記載遺跡出土遺物の利用上の注意点として「限りなく直前･同時･かなり前の遺物」の解釈が必要であるが、文献記載年代と同時であると証明できる事例は非常に少ないなか、図16①・④はこれに準じる資料と考えられる。結論としては７世紀後半から８世紀初頭の資料に偏るものの、７世紀中葉に関する図16①・③の資料は一点のみではあるが年代定点資料として共有しておくべき資料と考える。

６．土器編年の現状―西海道における天智朝の土器はなにか

暦年代について　西海道独自の暦年代推定資料を元に検討してみたが、現状の結論としては宮都周辺の暦年代と土器様相は西海道北部（主に大宰府周辺）では大きな齟齬はないようである。近年の西海道北部の大宰府・博多・鴻臚館などの国家施設やこれに準じる遺跡において、飛鳥Ⅳの土師器坏Ａや平城Ⅱ～Ⅲ期の皿Ａなどの出土事例が増加しており、７世紀第４四半期～８世紀第２四半期ごろの年代比定においては、参考となる資料が揃いつつある。ここまでの手続きを基に、曖昧な部分も残るが宮都周辺地域の年代観と土器組成、本報告で再検討した併行関係及び先行研究成果の整理を試みると図17－１のようになる。

西海道における７世紀の遺跡を理解する上で重要な天智朝の土器とは筑前南部Ⅱ－２期からⅢ－１期への移行期にまたがる様相が考えられる。具体的な遺物組成については図９・10・17－１及び表４を参照頂きたい。

遺跡性格差と土器編年　ここまで見てきたように、畿内産土師器が出土するような公的な施設（博多遺跡群・大宰府周辺・上岩田遺跡）の土器様相と飛鳥地域の土器様相（飛鳥Ⅲ・Ⅳ）とには年代的な齟齬は見られないのに対して、問題とした集落遺跡[9)]である御供田遺跡４号住居（図12－４）では、筑前Ⅱ－２期的な様相（坏Ｈ・坏Ｇの共伴期で坏Ｂ出現以前）の一部が７世紀後葉まで下降する可能性がある。ただしこれまでの坏Ｈ残存論争のように「一律に」地域編年全体の様相を下降させてしまうのではなく、宮都周辺の様相で確認したように遺跡の性格によっては、これまで考えている以上に旧形式の残存は長期に及び、西海道の中心たる大宰府周辺では消滅したかにみえる坏Ｇや坏Ｈが図２－５に示すように周縁部の集落では継続して使用されていた可能性は検証すべき点ではなかろうか。そうすると宮都よりも形式の残存を多くみつもる山村編年（山村1995・1999）も飛鳥地域とほぼ同時期に筑前の土器様相も変わると考える中島編年（中島1997）もある意味ではそれぞれ正しく、また、飛鳥の土器様相の反映は地方では遅れるという空間差≒時間差という図式も（大林1999）空間差というほど単純ではなく「空間差＋遺跡の性格差（ランク差）」が作用している可能性がある。生産地においては、まだこれらの実態を上手く説明できる資料は認識できていないが、消費地の実態からすれば、新相の須恵器生産期に古相の製品を生産する窯（図２－５における須恵器窯Ｃ）も存在していると考える。

今のところ、問題提起にとどめるが、上記の理解を進めた場合、大宰府周辺の編年とは別に周縁地域用の消費地編年構築が求められる。こうした資料状況は古墳時代前期における比恵・那珂遺跡群のような先進的な土器形式を受容する中心的な遺跡と、旧形式の残存著しい縁辺部の遺跡との関係性を想起させる。近年の古式土師器編年研究では、いまや福岡平野全体の資料から一律の編年を構築し一律に土器の時期を比定していくのは難しく、那珂・比恵遺跡や博多遺跡群などの博多湾沿岸の遺跡で組まれた編年が周辺地域ではそのまま対応できない状況である（このような遺跡性格差と遺物様相の差異について

は中世においても同様である)。どの地域のどのような性格の遺跡から出土した土器であるかを十分に見定めた上で、それぞれに構築するという丁寧な手続きが必要になっている。上述した「遺跡の性格差による土器の使い分け」の議論は、宮都の様相に近似する大宰府の土器様相が周縁部より先に明らかにされていたという背景もあり、西海道ではあまり活発ではなかったが、以上の点を踏まえると7世紀の土器編年研究においてもこうした視点が要請されているように感じる。

おわりに

本報告は現状と課題の整理にとどまり何かを明らかにしたたわけではなく、また本来個別に論じるべき部分も多く散漫な内容となっている。また、遺跡の性格差がおよぼす相対編年構築時における問題提起を行ったが、十分な検証資料の提示までにはいたっておらず今後の課題も多い。こうした状況を鑑みると、やはり現在の須恵器編年は「たちどころに年代のわかる「魔法の杖」」(佐藤2003)ではないのであろう。いま取りうる態度としては、自身が立論する考古資料への解釈に小さくない幅があることを認識し、増加した資料群との対峙を怖れず地道に地域編年を確立し、これを更新しつつ、土器の地域色や図15−8・9に一例を示す搬入品を抽出しながら交差年代の検討を進めるべきである。本報告にて縷々述べてきたように、これからの土器編年研究においては、複数の形式の資料を対象に形式・型式分類を行い一括資料を基に組列を検討した上での、量的変化の検討に加えて抽出資料の遺跡の性格に配慮した様相把握が肝要である。

本報告をまとめるにあたり井上信正、今塩屋毅行、小田裕樹、木村龍生、久住猛雄、下原幸裕、竹中哲朗、坪根伸也、津曲大祐、山口祐平の諸氏に御教示を賜った。また、九州歴史資料館には遺物の実見・実測をおこなうにあたり便宜を図っていただきました。あわせて感謝申し上げます。

註

1)宮都ではこれに黒色土器・白鳳緑釉・北斉隋唐陶器・新羅土器・百済土器・ガラス容器・銅食器が加わる。

2)図8−4に示す山田邦和氏の編年も年代観がやや異なるが坏H・坏G・坏Bに重複を認める案をとる(山田2011)。

3)飛鳥Ⅰは土師器坏Cの出現を画期としているように両編年とも土師器含めた時期区分を行っており、地方の須恵器編年との併行関係を行う際には編年区分の基準がそもそも異なっている点に注意が必要である。

4)報告者の「期」の考え方を示しておく。土器編年の時期区分については「○○式」「△△期」「○○段階」などさまざまな呼称がある。これらの編年時期呼称は当時の土器様相を最もよく示すと推測した「一括資料単体」を基準資料とし、これをそのまま「○期」と設定する「一括遺物」配列型編年が多い(図2−1)。が、「かりに、過去に同時に用いられた状態をよく残す一括土器群があっても、ある一形式についてみた場合、一型式しか含まれていないとは限らず、その時期の主体をなす型式に新古の型式が加わることがありえる」(岩永1989p51)のであり、「歴史的に意味のある一時期」(横山1985)を土器編年における「期」としてとらえた場合、その設定は「一括資料」を用いて、想定される時間的前後関係に基づく資料の配列を行いながら、複数の形式の出現・消滅を確認する手続きをもって行うと考える(図2−2)。これは中島恒次郎氏が述べる手法と同様のものである(中島2005他)。よって交差年代を検討するにあたっては、「期」の設定手続きを揃えた上での比較が望ましいと考える。なお、近年三好玄氏は近畿ではめずらしくこれまでの須恵器編年における方法的な問題点を端的に指摘し、須恵器編年を再考されている(三好2016)。氏の示す方法論的な課題は報告者の問題意識と重なる点もおおく、今後この種の検討が進むことが望まれる。

5)奈良文化財研究所第二研究室では現在基準資料の再整理と報告が進められており(尾野他2016他)、将来的には現在の編年を再構成した体系的な編年が提示されると思われる。

6)どの地域でも出土する一般器種である坏Hの法量変化の地域性について触れておく。豊前においては坏A(本報告坏H)の法量の変化は、12㎝前後から10㎝前後へと縮小化へ向かう点は間違いないが、法量の変遷自体は各期をこえて緩慢であり、技法についても坏身・坏蓋の底部・天井部調整が回転ヘラケズリから底部ナデ調整へと変化する時期は、豊前北部の天観寺窯跡群と豊前南部の伊藤田窯跡群とで異なる(図17−2Ⅲ−2期参照)。これらが消費地においてどのような有効範囲をもちえるのかは未検討だが、現状では坏Hの口縁部が1点出土したのみでは最大Ⅲ−3期〜Ⅴ−2期までの都合70年間の幅を見る必要がある。坏Hの法量については図6−4や図17−3にも示すように近畿地方の消費地によっても様々であり単純な法量のみによる年代決定が困難であることを示す。

7）したがって、以下に示した年代はあくまで搬出先の様相の上限年代（○○年を遡らない）となる点をお断りしておく。

8）西海道では国内唯一の高句麗土器をはじめ、新羅土器を中心に朝鮮半島からの搬入資料も多く出土している。資料は増加しているが古墳資料が主体で、遺物の共伴関係の整理に限界がある点、集落遺跡では良好な一括資料に恵まれない点、新羅土器の編年と暦年代の統一見解が提示されていない点などからみて暦年代資料からは割愛したが、新羅土器の研究動向は朝鮮半島との交差年代資料としても宮都周辺以外からの暦年代の比定資料として重要である。なお、百済土器は、堤ヶ浦12号墳（福岡市）出土資料について長2009にて寺井誠氏による検討（寺井2009）を紹介した。層位関係や須恵器様相からみて、筑前南部Ⅱ－２期の様相下において７世紀第２四半期～中頃（百済滅亡直前？）の百済土器の壺が出土しており、筑前Ⅱ－２期の年代を考える上で参考となる。

9）集落といってもそのあり方は多様である。牛頸窯跡群周辺の集落には工人集落も含まれており、一般には出土しないような須恵器が出土したり須恵器の比率が非常に高いアンバランスな土器組成をもっている。７世紀における集落遺跡の性格類型についても今後活発に議論すべき点であろう。

引用文献

安間拓巳 2002「広島県における古代の土器の様相－７世紀を中心として－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』
市川創 2016「難波地域とその周辺の土器様相」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所
井上信正 2014「特論　大宰府条坊研究の現状」『大宰府条坊跡44－推定客館跡の調査概要報告書－』太宰府市教育委員会
井上信正 2015「成立期大宰府関連遺跡調査の現状」『第175回九州古文化研究会』発表資料
岩永省三 1989「土器から見た弥生時代の社会の動態」『生産と流通の考古学』　横山浩一先生退官記念事業会編
大林達夫 1999「周防国府成立の土器の年代観・序章」『瓦衣千年』
大林達夫 2015「防府平野の土器資料が提起した問題、そのメモ２」『山口考古』第35号　山口考古学会
小田富士雄 1996「九州地方の６世紀後半の須恵器・九州地方の７世紀初頭の須恵器」『日本土器辞典』雄山閣
小田裕樹 2012a「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢』Ⅳ奈良文化財研究所学報第92冊
小田裕樹 2012b「２．都城の土器と東アジア世界」『花開く都城文化』飛鳥資料館
小田裕樹 2014「４　土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ－歌姫西須恵器窯の調査－』奈良文化財研究所
小田裕樹 2016a「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質』考古学研究会関西例会
小田裕樹 2016b「古代宮都とその周辺の土器－「律令的土器様式」の再検討－」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所
小田富士雄 1996「九州地方の７世紀初頭の須恵器」『日本土器辞典』雄山閣
尾野善裕 2001「飛鳥時代須恵器編年の問題点」『古代土器研究』３　古代の土器研究会
尾野善裕・森川実・大澤正吾2016「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要2016』奈良文化財研究所
久住猛雄 2001「出土須恵器の編年とE－２・３号墳の築造・追葬の年代について」『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
佐藤隆 2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一
佐藤隆 2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年－陶邑窯跡編年の再構築に向けて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号
佐藤隆 2015a「難波地域から出土する土器の特徴とその暦年代」『季刊　明日香風』134古都飛鳥保存財団
佐藤隆 2015b「さまざまな形、大きさが表す古代国家」『大阪遺跡』創元社
白井克也 2004「筑紫出土の獣脚硯」『九州考古学』第79号
白石太一郎 2012「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館　館報16』
神野恵・森川実 2010「１．土器類」『図説　平城京辞典』柊風社
須崎雪博 1998「北大津遺跡・横尾山古墳群・山ノ神遺跡」『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編』古代の土器研究会
神保公久 2016「７世紀の土師器－筑後－」『第178回九州古文化研究会』発表資料
高倉洋彰 2011『箸の考古学』同成社
高橋徹・小林昭彦 1990「九州須恵器研究の課題－岩戸山古墳出土須恵器の再検討－」『古代文化』Vol.42
武末純一 1991『土器からみた日韓交渉』学生社
武末純一 2002「弥生時代の年代」『考古学と暦年代』ミネルヴァ書房
長直信 2009「九州島における７世紀の須恵器－九州北部周辺の土器様相とその並行関係－」『第12回九州前方後円墳研究会　終末期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
長直信 2010「豊後国における７・８世紀の土器様相－旧大分郡・海部郡を中心に－」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一先生　還暦記念献呈文集・研究集

長直信 2012a「豊前地域の土器様相と須恵器生産」『古文化談叢』第67集　九州古文化研究会
長直信 2012b「豊後地域」『第61回　埋蔵文化財研究集会　集落から見た７世紀』埋蔵文化財研究会
長直信 2013a「須恵器からみた地域間交流－豊前･豊後地域を対象に－」『第16回九州前方後円墳研究会　古墳時代の地域間交流１』九州前方後円墳研究会
長直信 2013b「豊後国における官衙関連遺跡の基礎的研究－旧大分郡・海部郡を中心に」『福岡大学考古学論集２』福岡大学考古学研究室
長直信 2014「九州における長舎建物の出現と展開－７世紀代を中心に－」『第17回　古代官衙・集落研究会報告書　長舎と官衙の建物配置』奈良文化財研究所研究報告　第14冊
長直信 2016「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所
長直信・中島圭 2013「福岡県内出土の八女系須恵器について」『第16回九州前方後円墳研究会　古墳時代の地域間交流１』九州前方後円墳研究会
筒井崇史 2016「南山城地域における官衙と集落の土器様相について」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器２－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所
寺井誠 2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第83号
寺井誠 2009「古代難波における２つの瓶を巡って」『大阪歴史博物館研究紀要』第７号
中島恒次郎 1997「七世紀の食器－九州消費地－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東７世紀の土器－』古代の土器研究会
中島恒次郎 2000「大宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会
中島恒次郎 2005「聖武朝の土器－九州（大宰府と周辺）－」『聖武朝の土器様式』古代の土器研究会
中島恒次郎 2015「土器から考える遺跡の性格－大宰府・国府・郡家・集落－」『第19回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１－宮都・官衙と土器－』奈良文化財研究所
中西武尚 2011編『平成23年度　特別展　大分の君　飛鳥と豊後をつないだ人』大分市歴史資料館
西口壽生・玉田芳英 2001「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究書紀要2001』
林部均 1998「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の検討」『橿原考古学研究所論集』第13集　吉川弘文館
菱田哲郎 2011「②後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学１』同成社
舟山良一 2008「（２）編年案」『牛頸窯跡群　総括報告書Ⅰ』大野城市教育委員会
三好玄 2016「古墳時代須恵器編年にかんする方法論的検討 － 田辺編年の今日的理解から－」『古代文化』第68巻第１号
森暢郎 2016「暗文土師器の編年の規範」『纒向学研究センター研究紀要纒向学研究』第４号桜井市纒向学研究センター
森川実 2015「飛鳥の土器と「飛鳥編年」『季刊　明日香風』134　古都飛鳥保存財団
山村信榮 1995「八世紀初頭の諸問題－筑紫における須恵器の年代観－」『大宰府陶磁器研究』
山村信榮 1999「筑紫における７世紀土器編年と実年代の諸問題」『飛鳥･白鳳の瓦と土器』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
山本信夫 1992「まとめ」『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡篇－』太宰府市の文化財　第10集
山田邦和 2011「須恵器の編年　①西日本」『古墳時代の考古学１』同成社
横山浩一 1985「型式論」『岩波講座　日本考古学』１　岩波書店

期 / 形式・型式名

※竪穴住居・土坑は、それぞれ「SH」・「SK」に改め標記している

性格	画期	所在	文献番号	資料名	資料等級	須恵器（供膳具） 蓋 蓋A Ⅰ1	蓋A Ⅰ2	蓋B Ⅱ1	蓋B Ⅰ1	蓋B Ⅰ2	蓋B Ⅱ2	蓋C Ⅰ1	蓋C Ⅱ1	坏 坏A Ⅰ1	坏A Ⅰ2	坏B Ⅰ2	坏B Ⅰ3	坏B Ⅱ1	坏C Ⅰ1	坏C Ⅰ2	椀 金属器模倣椀A	椀A Ⅰ1	椀A Ⅰ2	椀A Ⅰ3	椀A Ⅱ1	椀A Ⅲ1	椀A Ⅲ2	台付椀 AⅠ	台付椀 AⅡ	台付椀 BⅠ
集落	Ⅲ-2	●	7	新池坂本遺跡　SH8	①b´	○								●																
		●	6	長野A遺跡Ⅷ区　SH1	②a	○								●																
		□	23	安田・深田遺跡　SK12	②b	○								○																
		●	9	畠山遺跡C地点　SC2	①b´	○								○																
	Ⅲ-3	●	4	葛原B遺跡　SH4	①b´	○								○																
		●	4	葛原B遺跡　SH12	①b´	○	○								○															
		●	6	長野A遺跡Ⅲ区　SH2	①b´		○									○														
	Ⅳ	●	3	狸山A遺跡　SH1	①b´		●								○	●					○									
		●	3	狸山A遺跡　SH3	②b		○								○	○														
		●	3	狸山A遺跡　SH2	①b´		●								●	○					○									
		□	25	越路鍛冶屋原第2地点SH1	②b		○								○															
	Ⅴ	●	6	長野A遺跡Ⅲ区　SH8	②b		●		○						○			○												
		■	18・19	豊前国府惣社地区　SH4013	②b		○	○	●	○					○		○	●	○											
		△	39	犬丸川流域第4遺跡　SH01	②b		○								○															
		□	26	水原有吉　SH6	①b				○																					
	Ⅵ	○	12	近衛ヶ丘遺跡群　SK1	①b´					●	○														○	○				
		□	40	日奈古・寺尾　1号不整形土坑	①b´							?														○	○			
	Ⅶ-1	□	23	安武・深田遺跡　SK11	②a							○								●						○				
		□	23	安武・深田遺跡　SD11	②b							○															○			
		□	40	日奈古・寺尾　SH9	①b´							○															○			
	Ⅶ-2	▲	30	永久遺跡　SH3	①b´							○								●										
		●	10	片野遺跡　SK3	①b´							●															●			

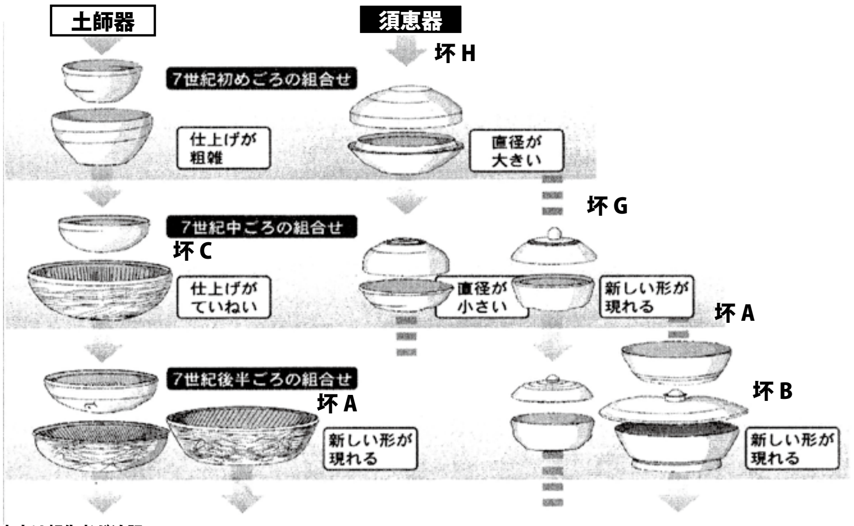
（長　2012a　表1より一部抜粋）

図 1-1　形式出現頻度検討例（豊前地域の集落遺跡）

→　編年図として具象化

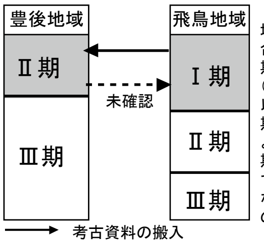
（長　2012a　表3より一部抜粋）

図 1-2　形式出現頻度モデル例（豊前地域の集落遺跡・須恵器窯・墳墓資料からみた様相を総合化）



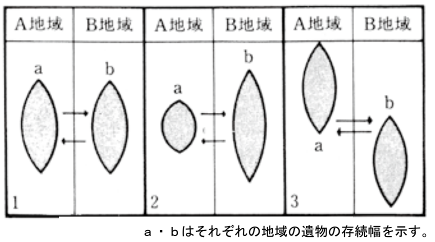
※太ゴシック文字は報告者が追記

図 1-3　難波地域における飛鳥時代の土器の変化　（佐藤　2015b　p197 より）



飛鳥地域のⅠ期中の遺物が豊後地域Ⅱ期の遺構より確認できた場合、豊後地域のⅡ期は飛鳥地域Ⅰ期の年代に一部接点をもつところ（具体的には上限年代であるⅠ期以降）までしかいえない。豊後Ⅱ期の資料が飛鳥地域Ⅰ期の遺構中より確認された場合のみ、豊後Ⅱ期と飛鳥Ⅰ期とが「一時期併行していた」ことが証明できる。
なお、この場合でも下図（図 1-5）のような場合が考えられる。

図 1-4　変形交差年代の例



a・bはそれぞれの地域の遺物の存続幅を示す。

遺物同士の存続幅が一定ではない場合（2）や、搬入物が出現時期の搬入か終焉時期での搬入か（3）などの時間差による「幅」が生じる場合もあり、二地域間の併行関係の認定には複数事例の積み重ねが必要である。

図 1-5　二地域間の併行関係モデル（武末 1992 より）

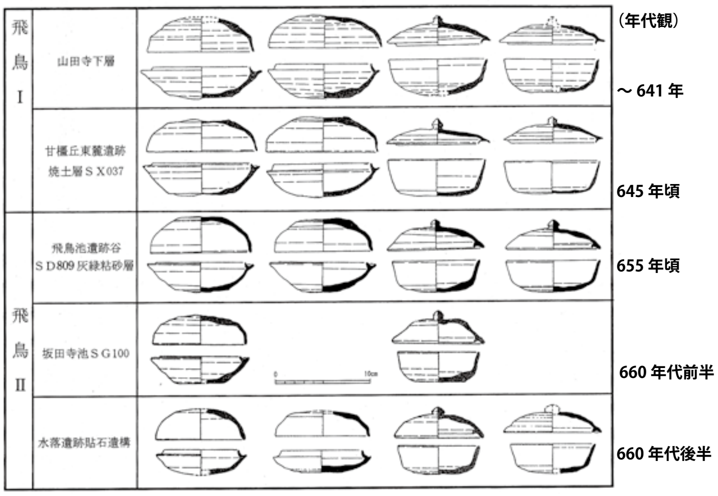


図 1-6　飛鳥編年の細分案　※太ゴシック文字は報告者が追記
（白石 2012　図 7 より）

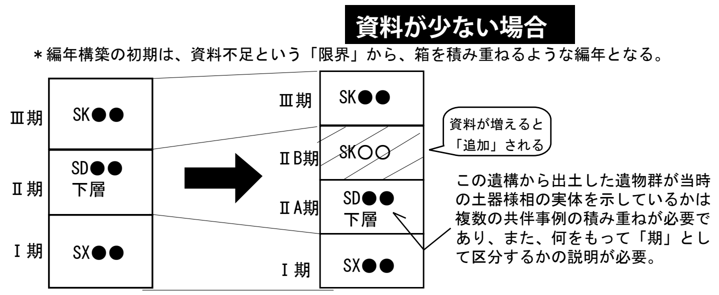
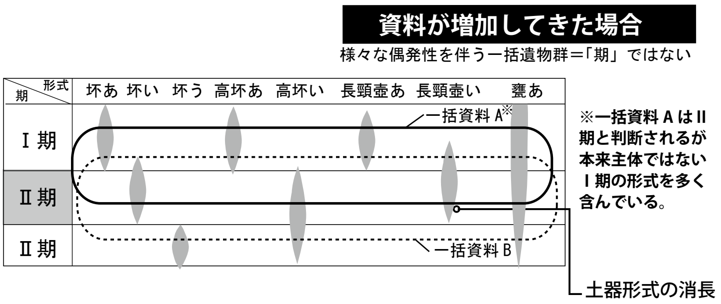
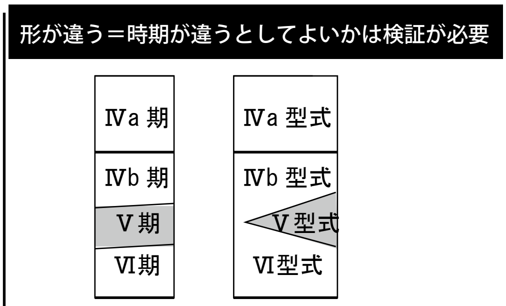


図 2-1　一括遺物配列型編年の問題点（長　2012a　第２図より）



「期」の設定は「一括資料」を用いて想定される時間的前後関係に基づく資料の配列を行いながら複数の形式（本報告では概ね「器種」に相当）の出現・消滅を確認する手続きをもって行う。

図 2-2 頻度のセリエーションの検討の必要性



北部九州では小田編年のⅤ「期」（小田 1996 など）の存在の有無について長らく評価が分かれていた。小田編年のⅣ・Ⅴ期をそれぞれ坏の型式と読み替えた場合、近年の資料状況からは右図のような関係として理解される。

図はⅤ「期」の存在を否定しているものではなく、Ⅴ「期」はⅣ型式（坏 H）の残存、Ⅵ型式（坏 B）の出現期の様相として左図のようにⅤ型式坏（坏 G）の出現という画期をもって存在している。

図 2-3 「期」と「型式」

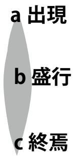


図 2-4　土器形式の消長

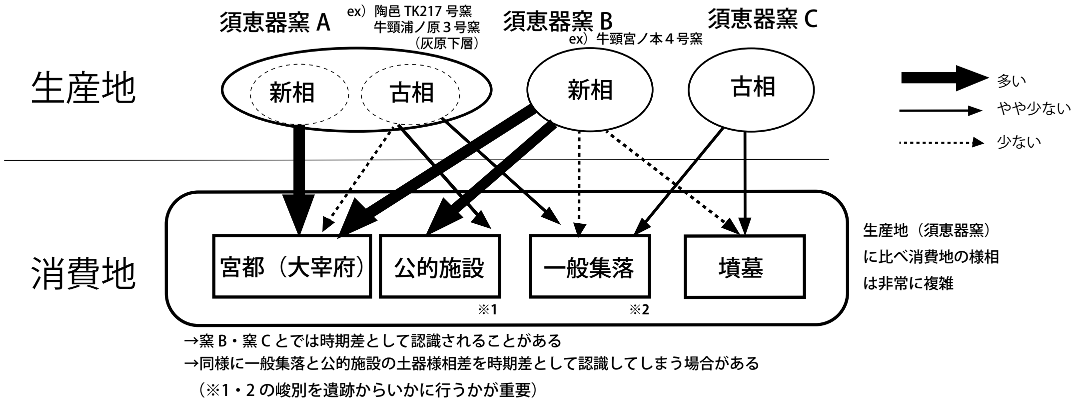


図 2-5　７世紀後葉頃における須恵器生産と消費のイメージ

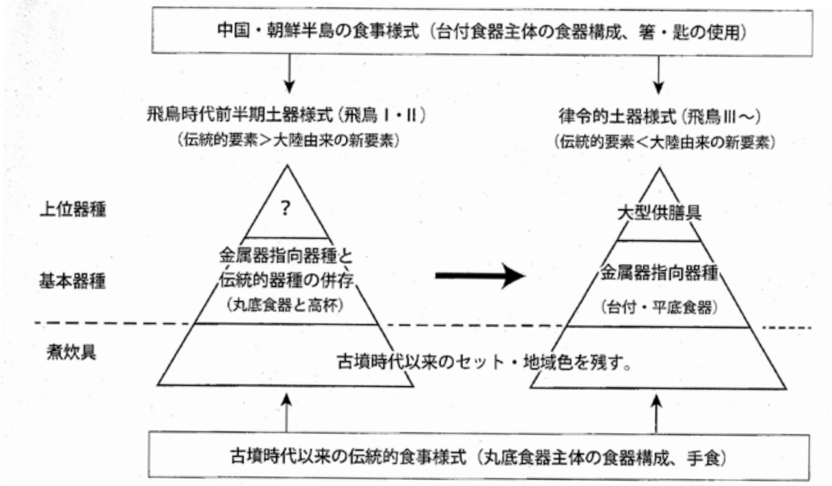


図 2-6 「飛鳥時代前半期土器様式」から「律令的土器様式」へ

（小田裕樹 2016b　図 33 より）

図 2-7　置食器・箸・匙のある宴席
（敦煌莫高窟 473 窟）　（高倉 2011 より）

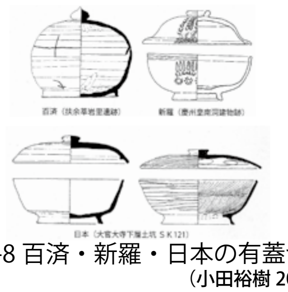


図 2-8 百済・新羅・日本の有蓋台付椀
（小田裕樹 2016b より）

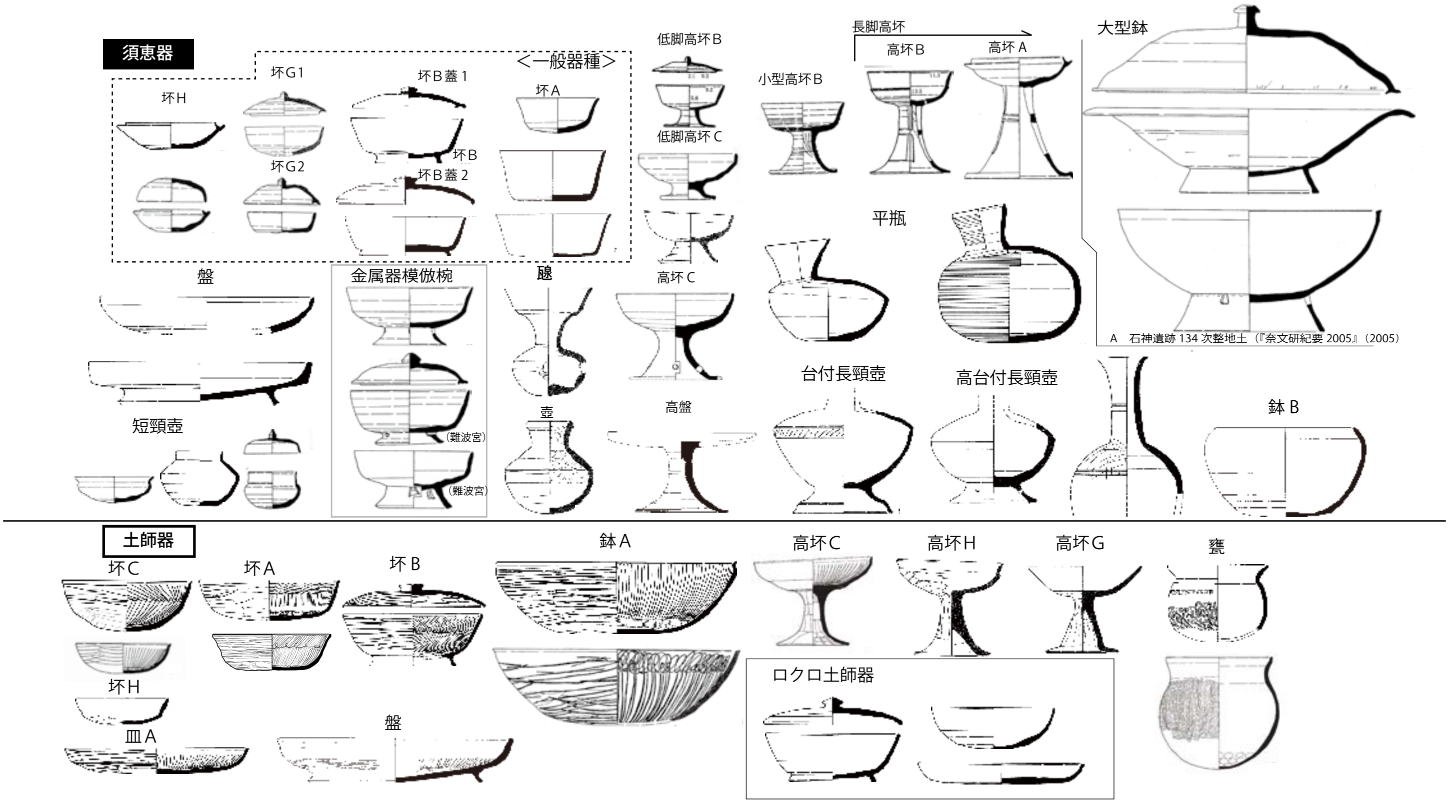


図 3-1 宮都周辺の土器形式（1/10）　※（難波宮）以外はすべて飛鳥周辺出土資料

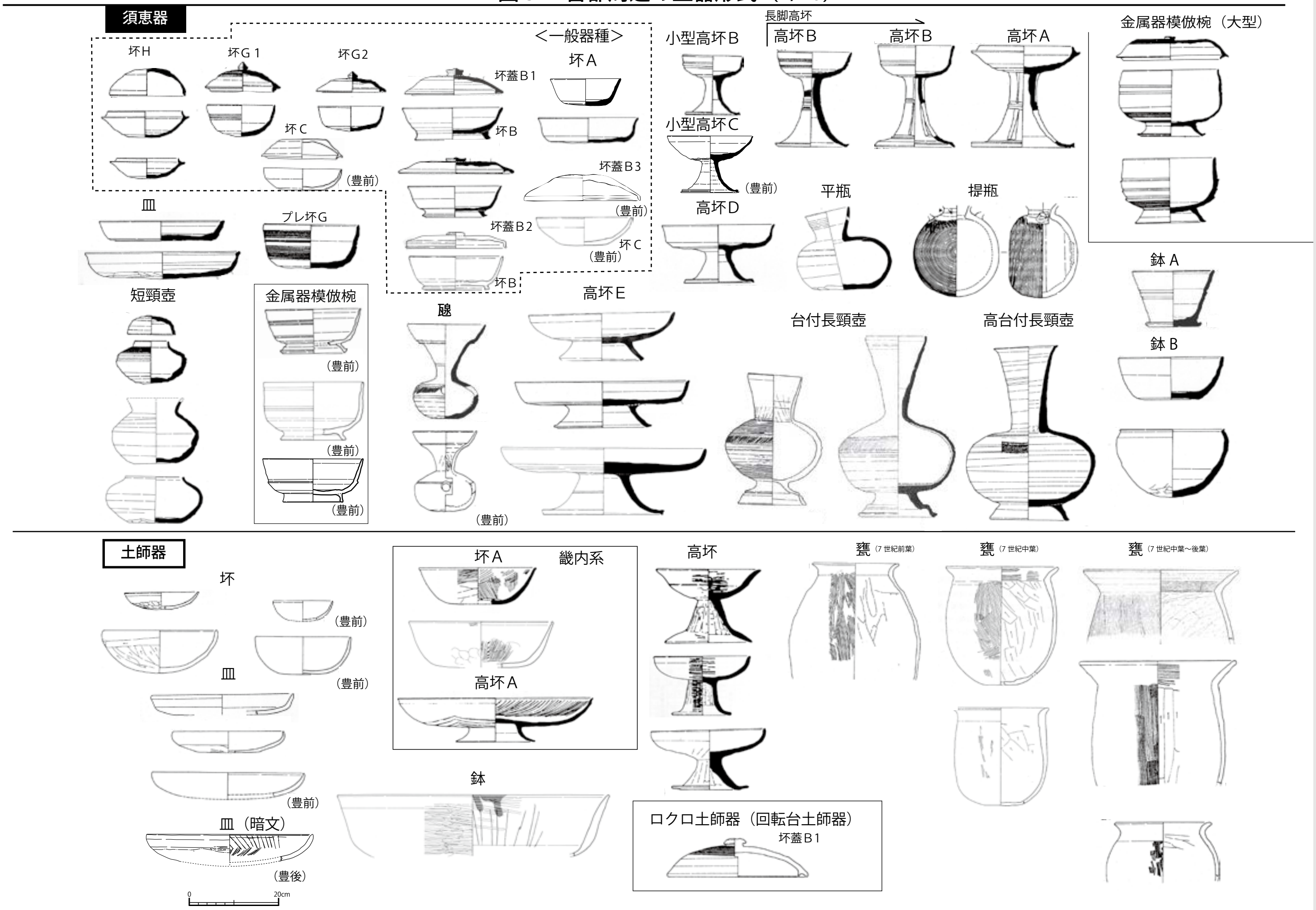
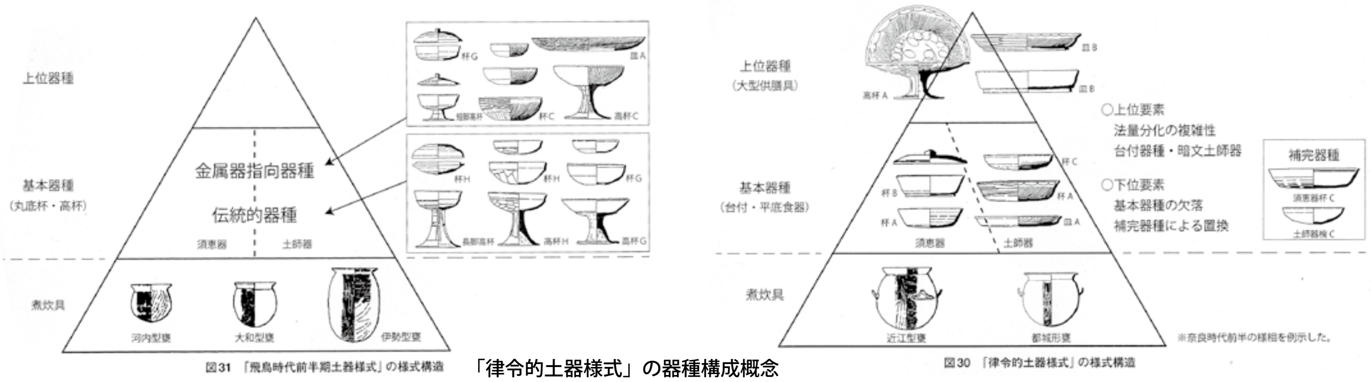


図 3-2 西海道北部の土器形式（1/10）

（中島 1997　図1～5を参考に作成）
※（豊前）（豊後）以外はすべて筑前南部周辺出土資料



「律令的土器様式」＝食膳具（基本器種＋付加的器種＋補完器種）＋煮炊具類＋・・・

基本器種：宮都・周辺遺跡共に出土する杯・皿・椀形態の器種。
付加的器種：基本器種と共に出土する。単独で出土することは少ない。
このうち宮都に特徴的な大型皿・高杯を「上位器種」とする。
補完器種：基本器種の欠落を補完する。基本器種の形態的模倣や粗製品が多い。

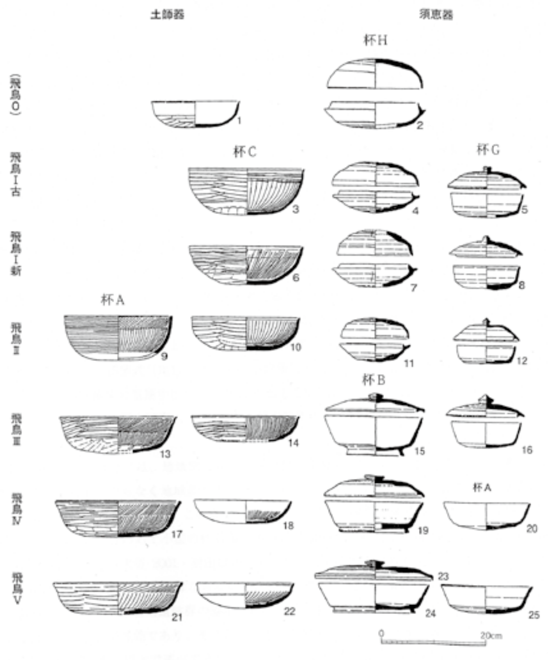
図 4-1　７世紀の土器の様式構造とその階層性（小田裕樹 2016b　図 29・30・31 より）

時期区分	出土遺跡・遺構	文献	備考
飛鳥Ⅰ以前	飛鳥寺下層	年報1999-Ⅱ	飛鳥寺造営開始588年以前
	山田道第3次　黒褐色土層	年報1999-Ⅱ	
飛鳥Ⅰ※ 【600 年代 ～ 640 年代】	古宮遺跡　SD050・SD124	報告Ⅰ	**土師器坏 C 出現**
	川原寺下層　SD02・SD367	概報10、年報1997-Ⅱ	**須恵器坏 G1 出現**
	山田寺下層　SD619・整地層	概報20、山田寺跡	山田寺造営開始641年以前
	石神遺跡　SD4260	紀要2008	
	甘樫丘東麓遺跡　焼土層SX037	概報25	
	飛鳥池遺跡　灰緑色粘砂層	概報22	**土師器皿 A 出現（少量）**
	甘樫丘東麓遺跡　SK184	紀要2010	
飛鳥Ⅱ 【640 年代 ～ 660 年代】	坂田寺　SG100	概報3	**土師器坏 A 出現（極少量）** **須恵器坏 G2 出現**
	水落遺跡基壇周辺	概報4・12、報告Ⅳ	斉明朝漏刻660年
飛鳥Ⅲ 【660 年代後半 ～ 670 年代】	大官大寺下層　SK121・SE116	概報6、紀要2001・2002	天智朝（近江大津宮）
	藤原宮西方官衙　SK1366	報告Ⅱ	**須恵器・土師器坏 B 出現** **土師器坏 A 量増加**
	藤原京左京六条三坊　SE2355	概報9・小田2012	
	石神遺跡SE800	概報15、年報1997-Ⅰ	
飛鳥Ⅳ 【680 年代を中心に ～ 670 年代後半】	雷丘東方遺跡　SD110	報告Ⅱ	**須恵器坏 B 蓋 2 出現**
	藤原宮下層運河　SD1901A	概報8・紀要2009・紀要2012	天武末年木簡、694年以前
	藤原宮西方官衙南地区SE8061	概報24	
	藤原宮西方官衙南地区SK8471	概報26	
飛鳥Ⅴ 【694 年 ～ 710 年】	藤原宮内裏東大溝　SD105	報告Ⅲ	藤原宮期(694～710)
	藤原宮西方官衙　SE1105	報告Ⅱ	**須恵器坏 B 蓋 2 主体化**
	藤原宮東面内濠　SD2300	概報9・紀要2012	

※坂田寺SG100出土資料より古い様相をもつ資料については、飛鳥Ⅰの中に含めた。

概報:『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』　年報:『奈良文化財研究所年報』
報告:『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』　紀要:『奈良文化財研究所紀要』

表１　７世紀の土器の大別と略年代（小田裕樹 2014 より）
※太ゴシック文字は報告者が追記



1：山田道整地土下層（黒褐色土）、2：飛鳥寺下層、3～5：小墾田宮推定地 SD050、6～8：山田寺下層 SD619 整地土、9～12：坂田寺 SG100、13～16：大官大寺下層 SK121、17・18・20：藤原宮 SD1900A、19：雷丘東方遺跡 SD110、21：藤原宮 SD105、22・23：藤原宮 SE1105、24：藤原宮 SD2300、25：平城宮 SD1900

図 4-2　飛鳥編年（菱田哲郎案）（菱田 2011　図 1 より）

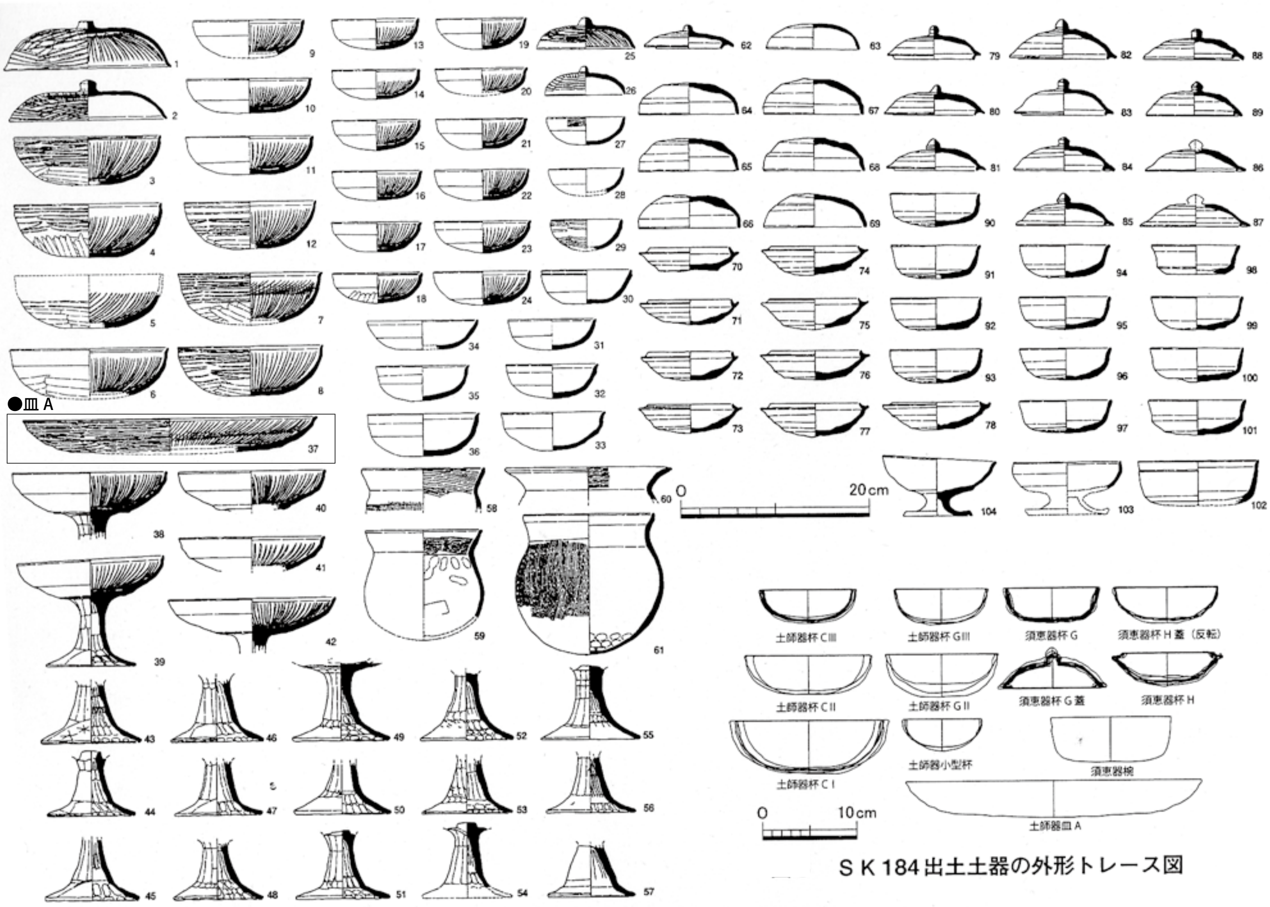


図 5-1　甘樫丘東麓 SK184 出土土器（飛鳥Ⅰ後半～Ⅱ）（1/8）（小田 2016b より）

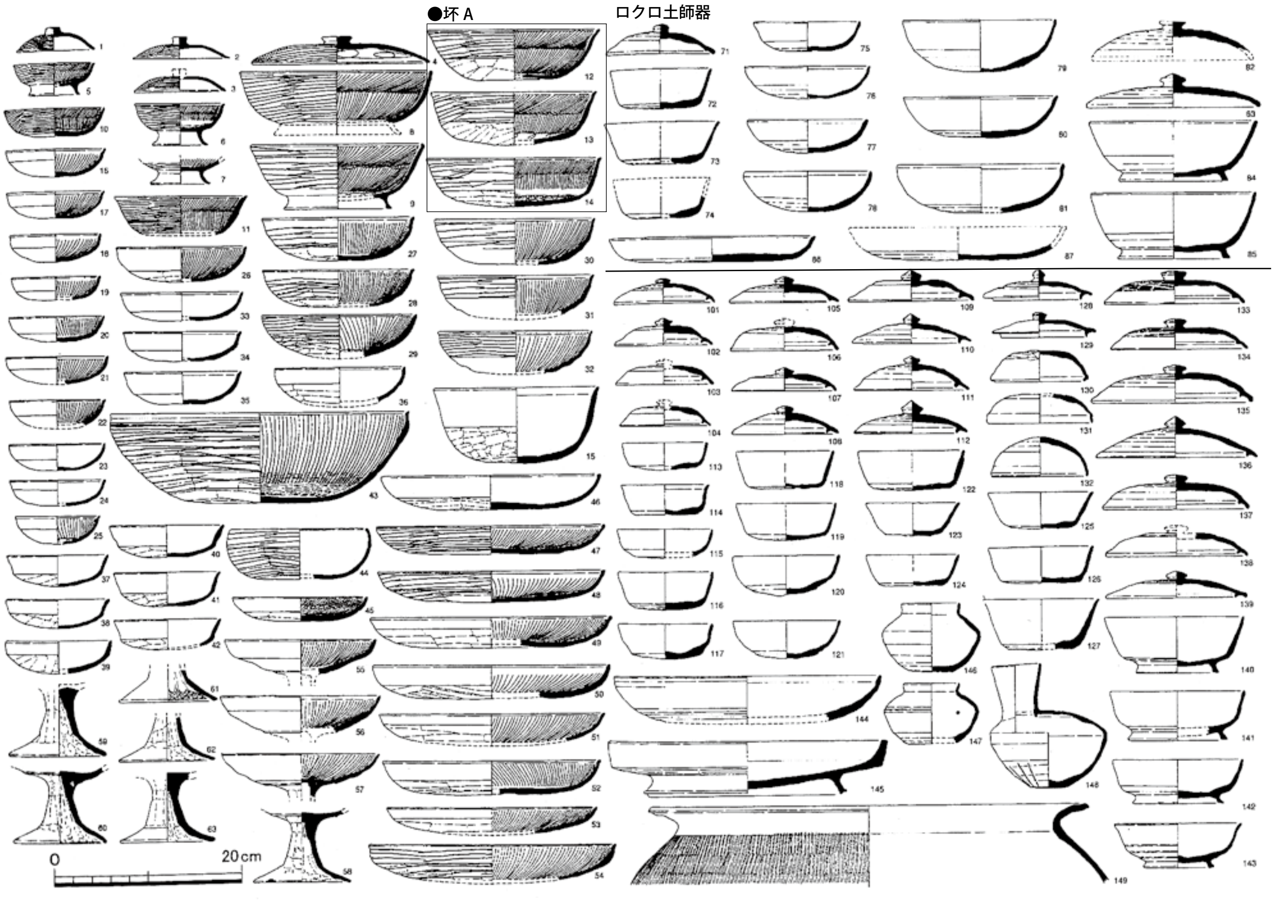


図 5-2　大官大寺 SK121 出土土器（飛鳥Ⅲ）（1/8）（小田 2016 b より）

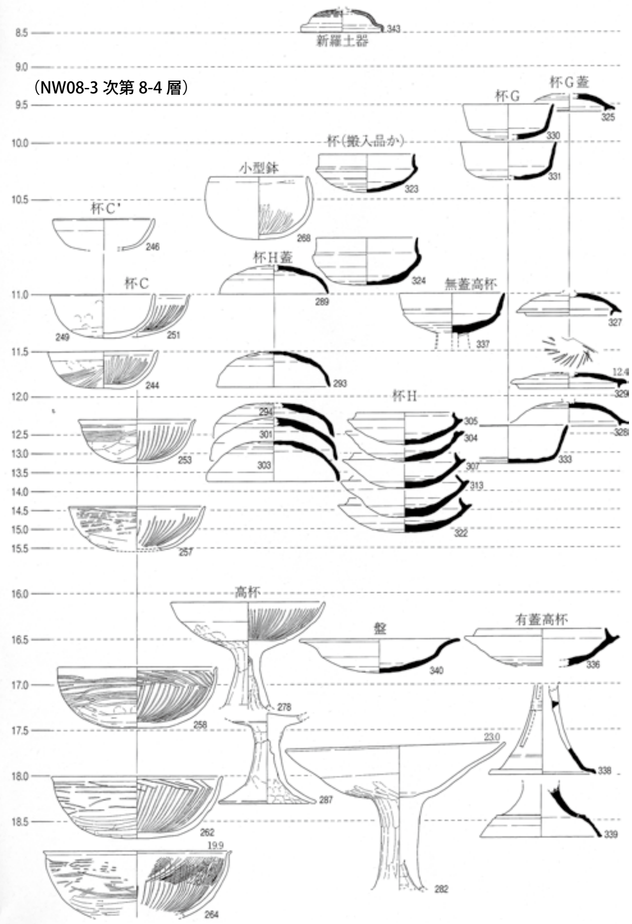


図 6-1　難波Ⅲ古段階（≒飛鳥Ⅰ後半）の土器（1/8）

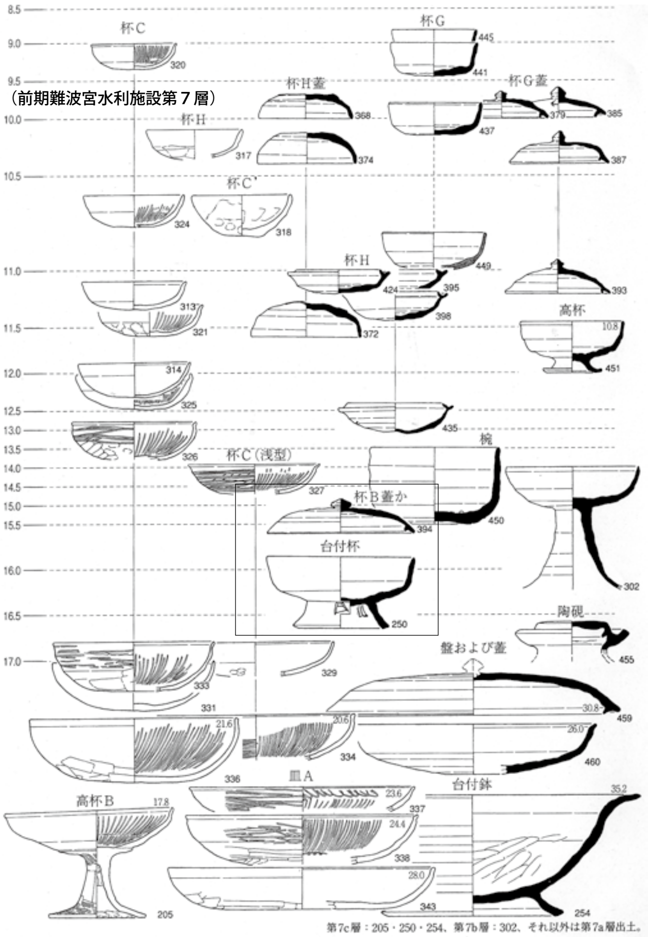


図 6-2　難波Ⅲ中段階（≒飛鳥Ⅰ～Ⅱ）の土器（1/8）

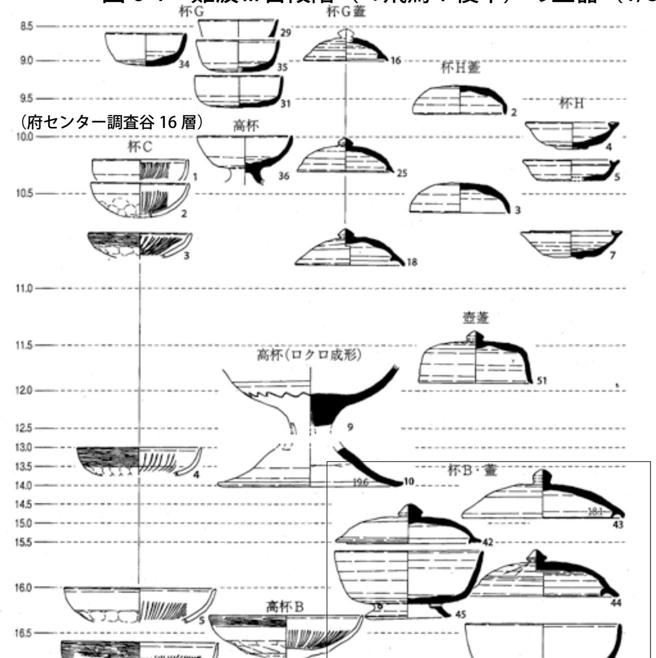


図 6-3　難波Ⅲ新段階（≒飛鳥Ⅱ）の土器（1/8）

（※図 7-1 ～ 3　市川 2016 より）

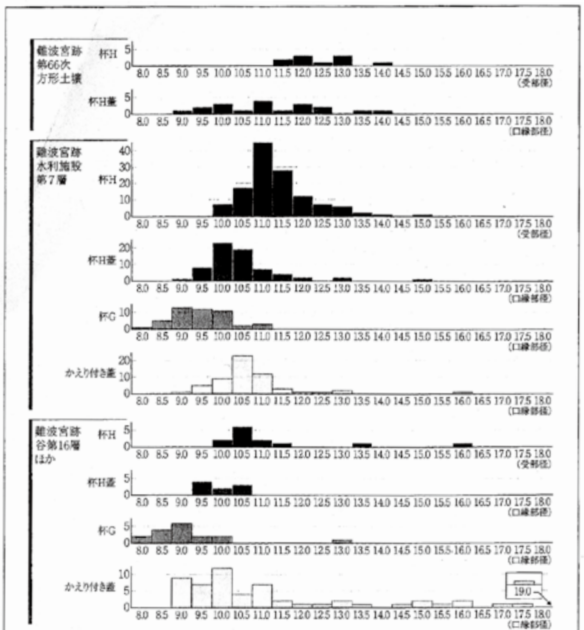


図 6-4　７世紀中葉における須恵器食器類の法量比較

（佐藤隆 2015 より）

時期区分		他の都城編年ないし標識資料との対応	暦年代	土師器の特徴	須恵器の特徴
難波Ⅲ	【概要】			■暗文やヘラミガキを施された精製の食器類やハケ調整の器壁の薄い甕が現れて主体に。 ■食器類のほとんどは杯C。	■杯Hは法量が縮小。身の底部、蓋の天井部はヘラ切り後不調整のものがほとんどを占める。 ■杯Gが出現し、次第に杯Hを凌駕する。 ■杯Bが出現する。
	古段階	山田寺下層	7世紀前半（620年代～640年代）	・定型化した精製の杯Cが主体となり、その径高指数は30代の後半にほぼ収まる。 ・煮炊具もハケ調整のものが現れる。	・杯Hは受部径11～12cm代のものが中心。底部・天井部はヘラ切り後不調整のものが主体。 ・杯Gが現れるが、まだ少数。
	中段階	飛鳥池谷資料～坂田寺跡ＳＧ100	7世紀中頃（650年代が中心）	・食器類はヘラミガキ・暗文のものがほとんど。 ・杯Cの径高指数は30代の前半。 ・器種に皿が加わる。 ・煮炊具はハケ調整のものが主体となる。	・杯HとGの比率は前者が少し多い。 ・杯G蓋には口縁部径がひとまわり大きなものがあり、法量分化が認められる。 ・脚台の高い杯Bがみられる。
	新段階	水落遺跡貼石遺構	660年代が中心	・杯Cは器高が低くなる。 ・定型化する前の形態をもつ杯A、および杯B・同蓋がある。 ・甕はハケメのものがほとんどで、他には南河内地域の製品が少量含まれる。	・杯Gが大半を占め杯Hはわずか。いずれも法量がもっとも縮小している。 ・ひとまわり大きな杯G蓋がここでも存在。 ・典型的な低脚の杯Bが確実に存在する。 ・杯Aがみられる。
難波Ⅳ	【概要】			■定型化した杯Aが現れる。 ■杯Cの径高指数が減少する。	■杯Hがほとんど見られなくなり、初めは杯G、次いで杯A・Bが主体となる。 ■杯B蓋は「かえり」のないものが増えていく。
	古段階	飛鳥Ⅳ	7世紀第4四半期	・杯Cは径高指数が30を下回るものが多い。 ・定型化した杯Aが現れるが、まだ杯Cが主体。	・杯Gの他に定型化した杯A・Bが確認できる。杯Hはわずかに残る程度。 ・杯B蓋は「かえり」をもつものがほとんど。
	新段階	飛鳥Ⅴ（平城Ⅰ）～平城Ⅱ	8世紀第1四半期	・杯Cに替わり杯Aが主体となる。 ・杯Aの暗文は放射2段のものと1段のものとがある。 ・杯Bには連弧状暗文が認められるものがある。	・杯A・Bが主体で、杯Gは減少する。 ・杯B蓋は「かえり」のないものがほとんど。

表2　難波地域の土器編年の概要　（市川 2016 表2より一部抽出）

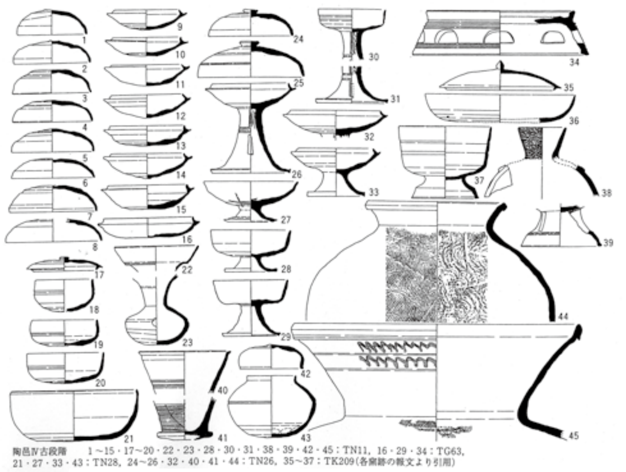


図 7-1　陶邑Ⅳ古段階（1/12）

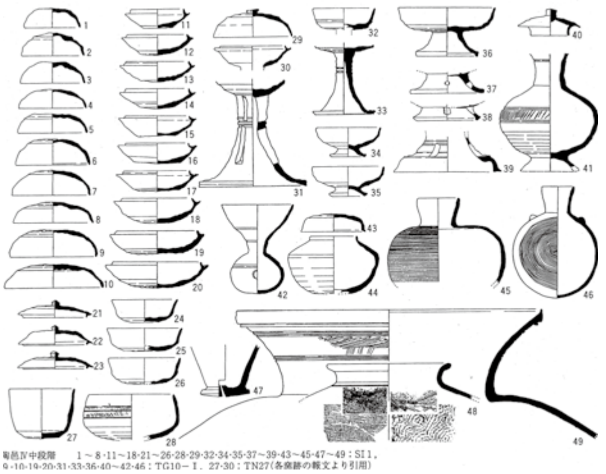


図 7-2　陶邑Ⅳ中段階（1/12）

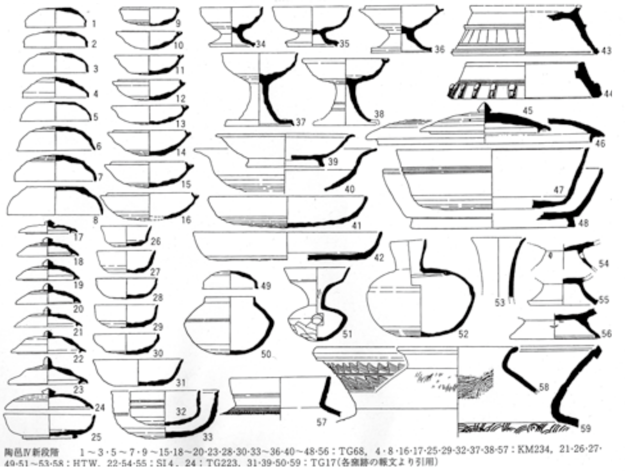


図 7-3　陶邑Ⅳ新段階（1/12）

（図 7-1 ～ 3 佐藤 2003 より）

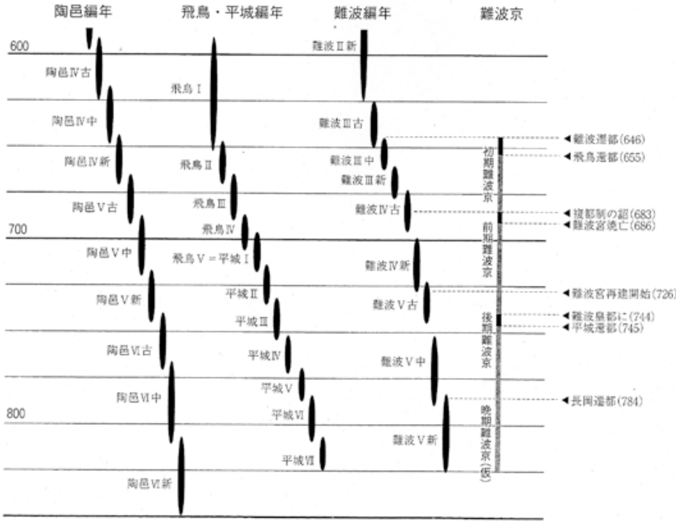


図 7-4　各編年の対応関係　（市川 2016 より）

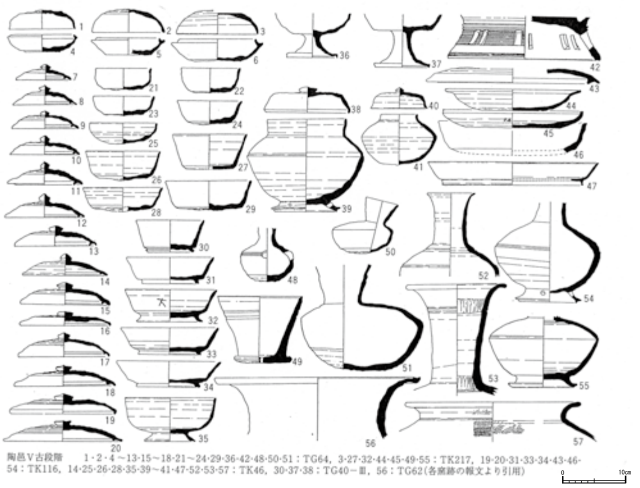


図 8-1　陶邑Ⅴ古段階（1/12）

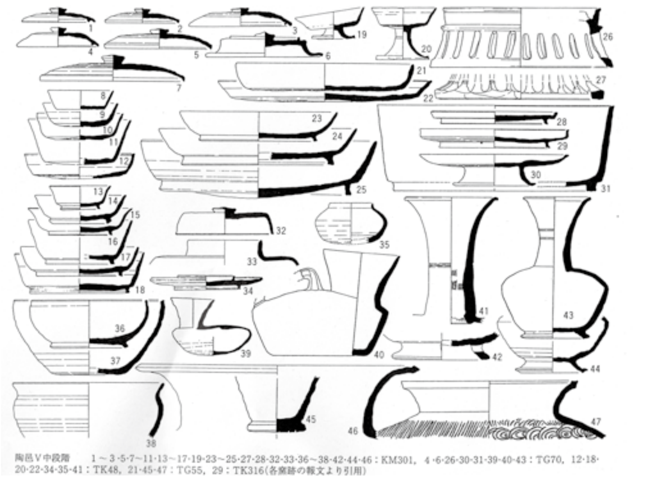


図 8-2　陶邑Ⅴ中段階（1/12）（図 8-1 ～ 2　佐藤 2003 より）

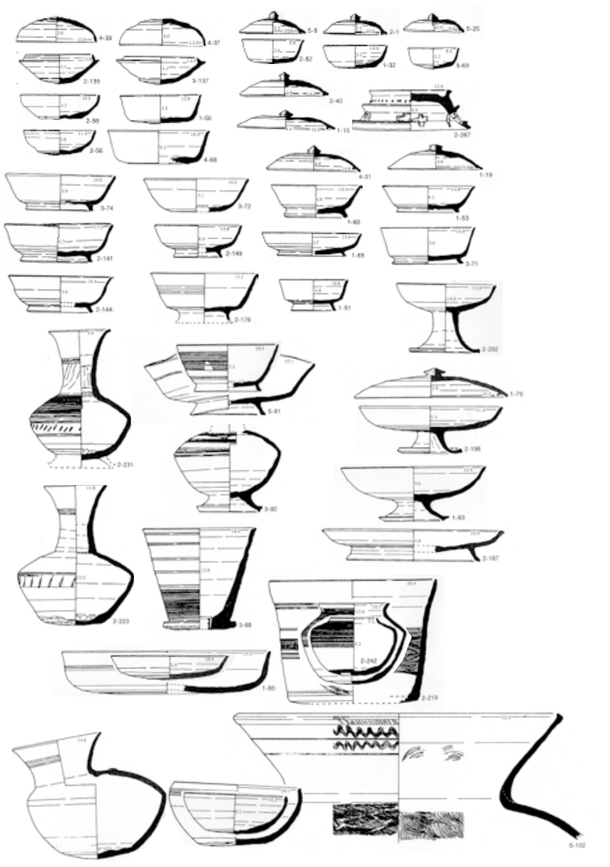


図 8-3　山ノ神遺跡灰原上層（近江朝期＝飛鳥Ⅲ）（1/12）
（須崎 1998 より作成）

山田邦和案				森浩一案		田辺昭三案（1966年案）		田辺昭三案（1981年案）			中村浩案（2001年案）		
先Ⅰ期													
Ⅰ期	前期	古段階	栂232号窯式（大庭寺窯式）					Ⅰ期	高蔵73型式	古段階（一須賀2段階）	Ⅰ型式	1段階	前期
		新段階	高蔵寺73号窯式	Ⅰ期	前半	Ⅰ期	TK73型式			新段階			後期
	中期	古段階	高蔵寺216号窯式		中期		TK216型式		高蔵216型式			2段階	
		新段階	高蔵寺208号窯式						高蔵208型式	古段階（大野池46段階）			
							TK208型式			新段階		3段階	
	後期	古段階	高蔵寺23号窯式		後半		TK23型式		高蔵23型式			4段階	
		新段階	高蔵寺47号窯式				TK47型式		高蔵47型式			5段階	
Ⅱ期	前期	古段階	陶器山15号窯式	Ⅱ期		Ⅱ期	MT15型式	Ⅱ期	陶器山15型式		Ⅱ型式	1段階	
		新段階	高蔵寺10号窯式				TK10型式		高蔵10型式	古段階		2段階	
	後期	古段階	陶器山85号窯式	Ⅲ期	前半		（未確認型式）			新段階		3段階	
		中段階	高蔵寺43号窯式		中葉		TK43型式		高蔵43型式			4段階	
		新段階	高蔵寺209号窯式				TK209型式		高蔵209型式			5段階	
Ⅲ期	初期		高蔵寺217号窯式古段階		後半	Ⅲ期	（未確認型式）	Ⅲ期	高蔵217型式			6段階	
	前期	古段階	高蔵寺217号窯式新段階	Ⅳ期	前半		TK217型式				Ⅲ型式	1段階	
		新段階	高蔵寺46号窯式				（未確認型式）		高蔵46型式			2段階	
	後期	古段階	高蔵寺48号窯式古段階		後半		（未確認型式）		高蔵48型式			3段階	
		新段階	高蔵寺48号窯式新段階										

表３　陶邑窯跡群の須恵器編年対応表　（山田 2011　表３より）

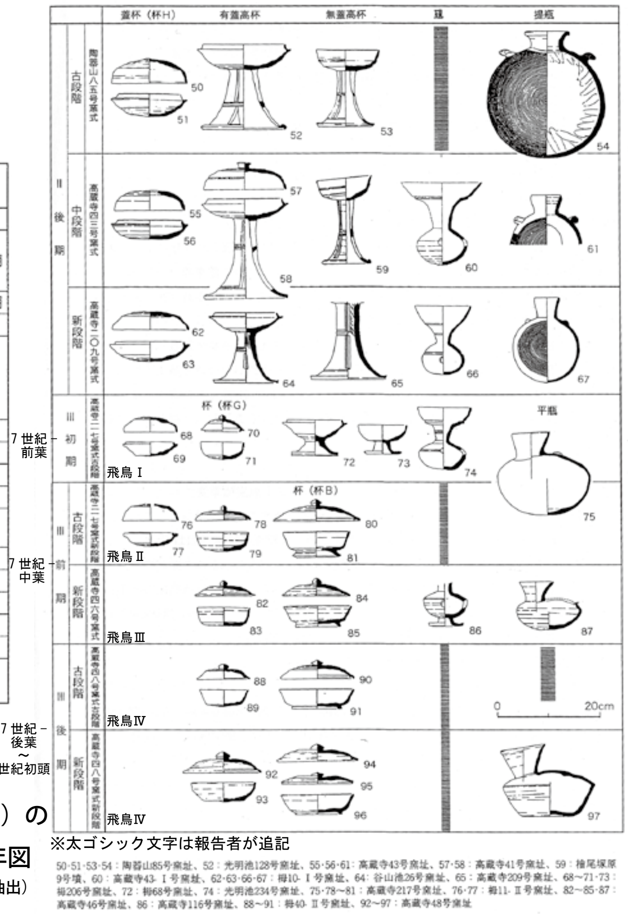


図 8-4　大阪府南部窯址群（陶邑窯）の
古墳時代須恵器編年図
（山田 2011　図２より一部抽出）

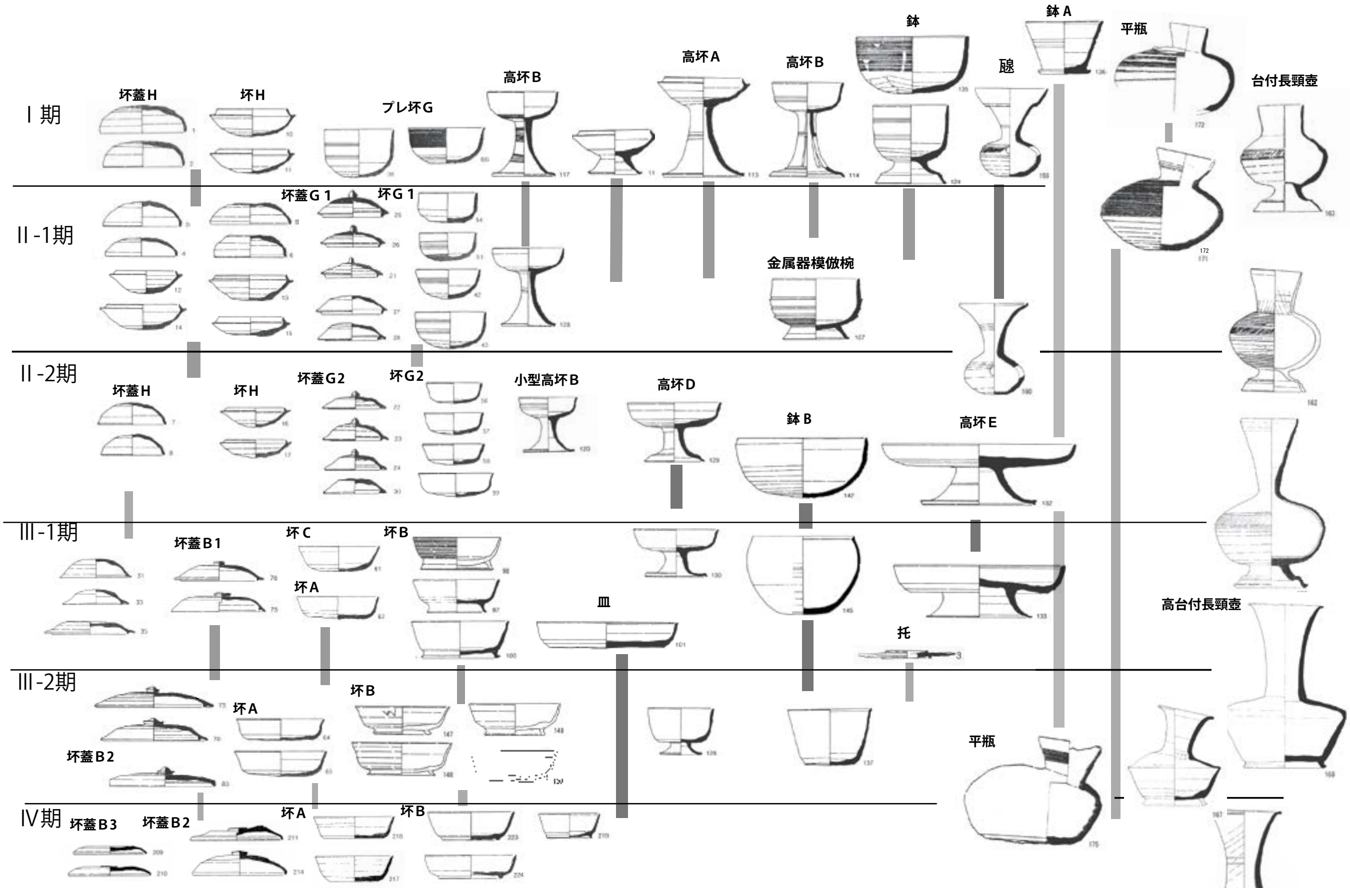


図 9-1　筑前南部　須恵器編年図（1/12）

（中島 1997 に基づき作成した長 2009 第 17 図を一部改変の上、本稿の図３-２の形式名をゴシック体で追記）

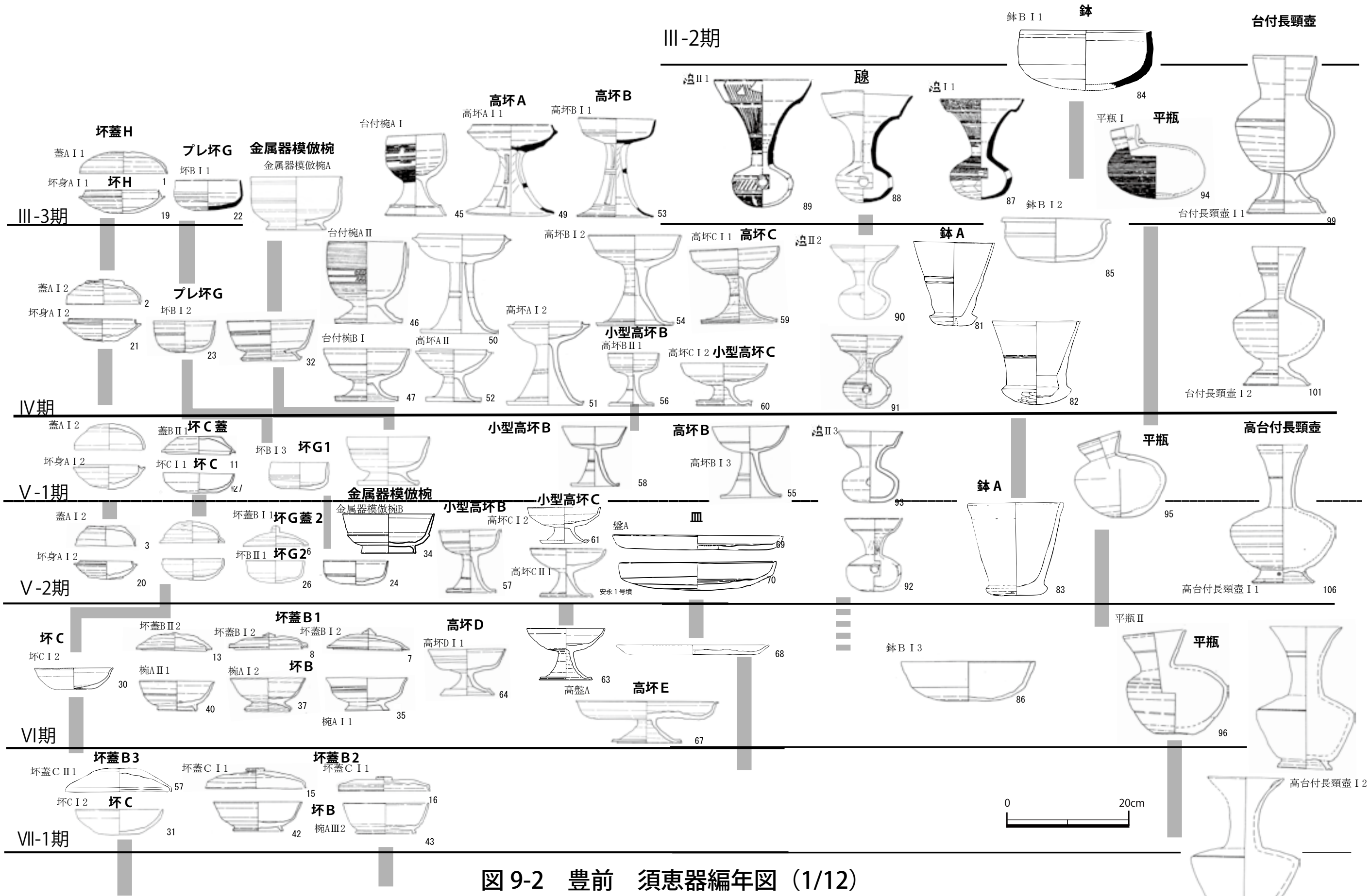


図 9-2　豊前　須恵器編年図（1/12）

（長 2012 a 第 13・14 図を引用の上、本稿の図３-２の形式名をゴシック体で追記）

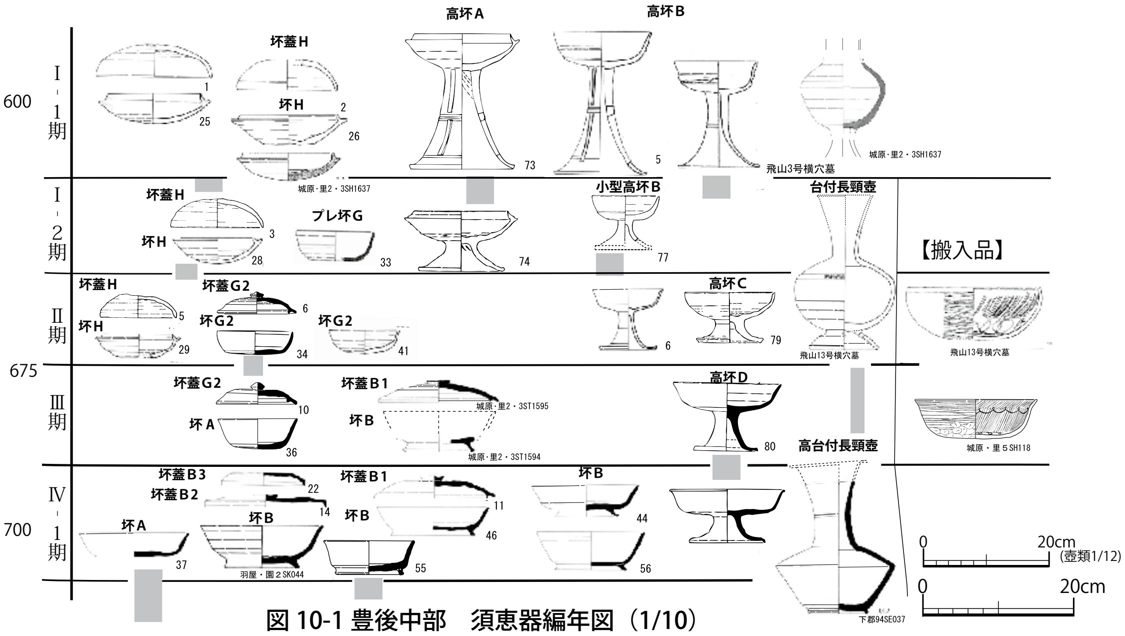
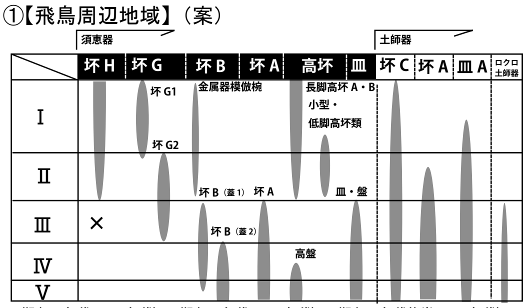


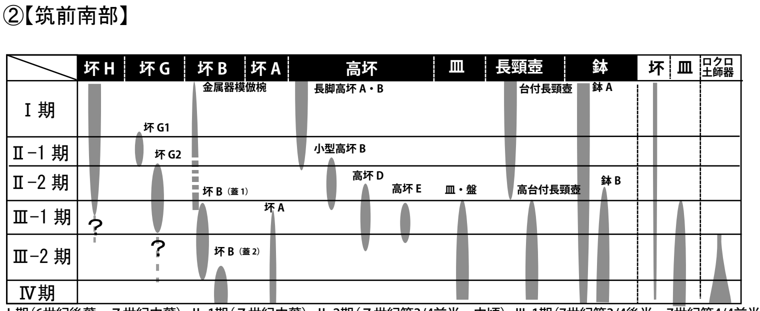
図 10-1 豊後中部　須恵器編年図（1/10）
（長　2012b 図 6-1 を引用一部改変の上、本稿の図 3-2 の形式名をゴシック体で追記）

①【飛鳥周辺地域】（案）



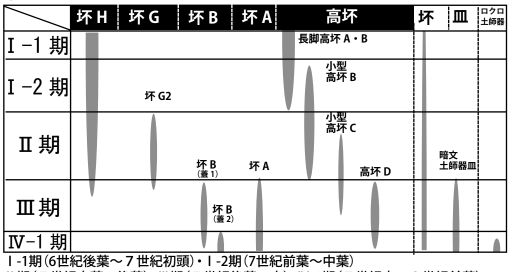
Ⅰ期（600年代～640年代）・Ⅱ期（640年代～660年代）・Ⅲ期（660年代後半～670年代）
Ⅳ期（670年代後半～680年代）・Ⅴ期（694年～710年）

②【筑前南部】



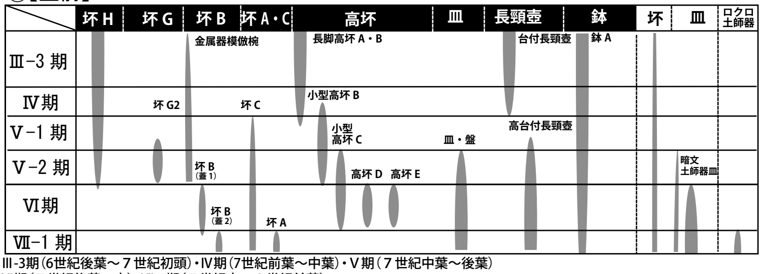
Ⅰ期（6世紀後葉～７世紀中葉）・Ⅱ-1期（７世紀中葉）・Ⅱ-2期（７世紀第3/4前半～中頃）・Ⅲ-1期（7世紀第3/4後半～7世紀第4/4前半）
Ⅲ-2期（７世紀第4/4中頃～後半）・Ⅳ期（7世紀末～8世紀前葉）

④【豊後中部】



Ⅰ-1期（6世紀後葉～７世紀初頭）・Ⅰ-2期（7世紀前葉～中葉）
Ⅱ期（７世紀中葉～後葉）・Ⅲ期（７世紀後葉～末）・Ⅳ-1期（７世紀末～８世紀前葉）

③【豊前】



Ⅲ-3期（6世紀後葉～７世紀初頭）・Ⅳ期（7世紀前葉～中葉）・Ⅴ期（７世紀中葉～後葉）
Ⅵ期（７世紀後葉～末）・Ⅶ-1期（７世紀末～８世紀前葉）

表４　形式消長図（各地の主な形式を抽出・量比はイメージ、年代は図 10-2 より想定）

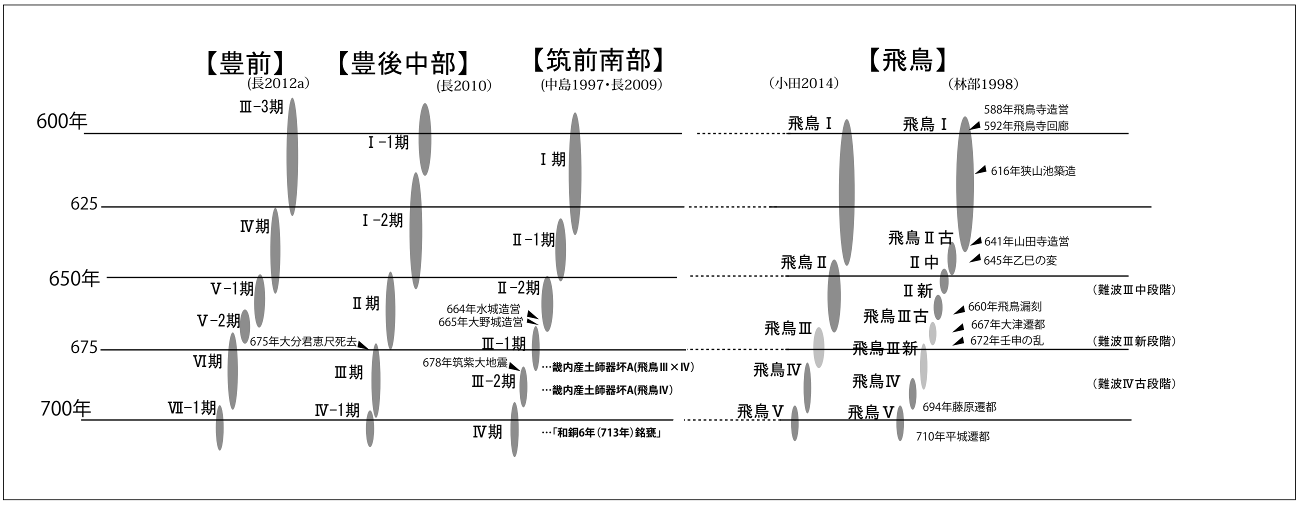


図 10-2　筑前・豊前・豊後・飛鳥地域との併行関係案（長　2012a を一部改変）

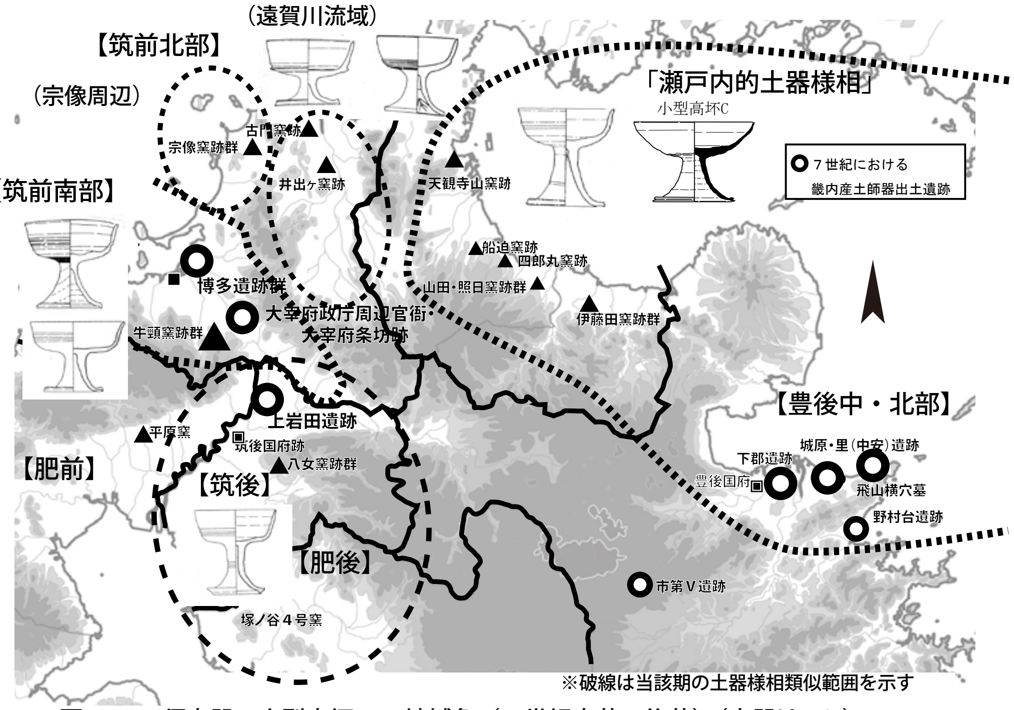


図 11-1　須恵器　小型高坏Bの地域色（7世紀中葉～後葉）（土器は1/8）

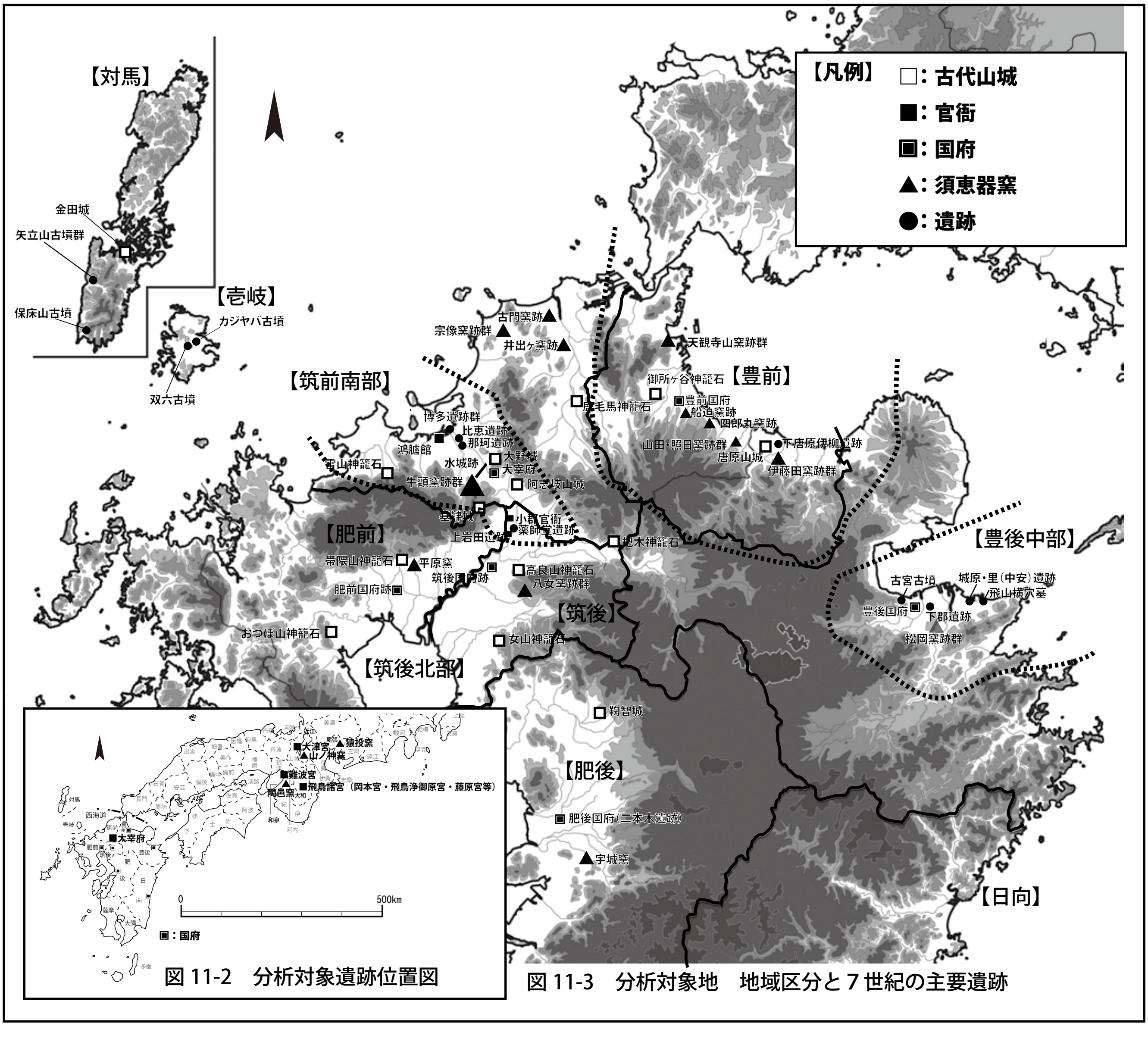


図 11-2　分析対象遺跡位置図
図 11-3　分析対象地　地域区分と7世紀の主要遺跡

【筑前南部Ⅱ−2】『龍頭遺跡』福岡県教委（1996）第 123 集

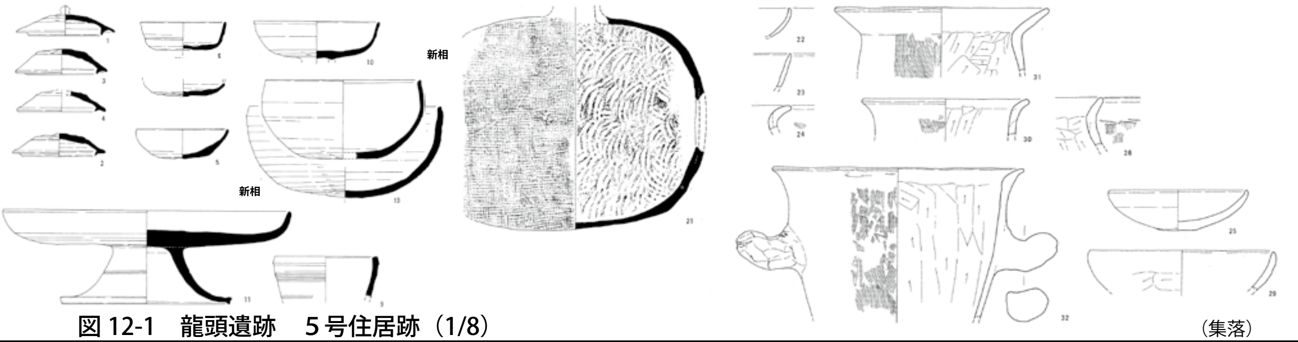
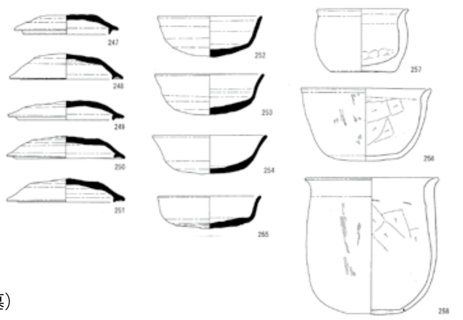


図 12-1　龍頭遺跡　５号住居跡（1/8）

（集落）

【筑前南部Ⅱ−2】

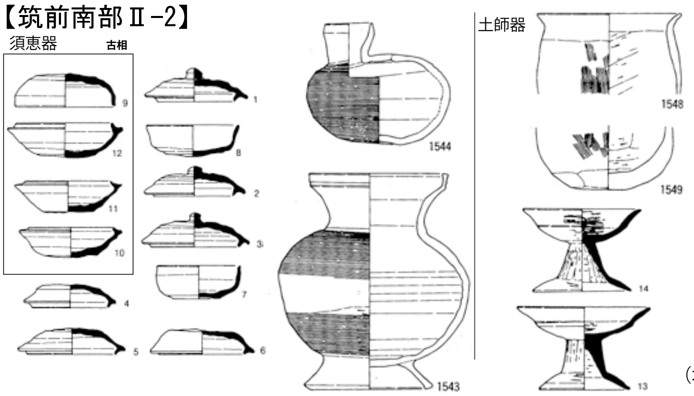
『乙金地区遺跡群 15』大野城市教委（2016）第 139 集



（墳墓）

図 12-2　王城山遺跡第２次 ST01（土坑墓）（1/8）

【筑前南部Ⅱ−2】



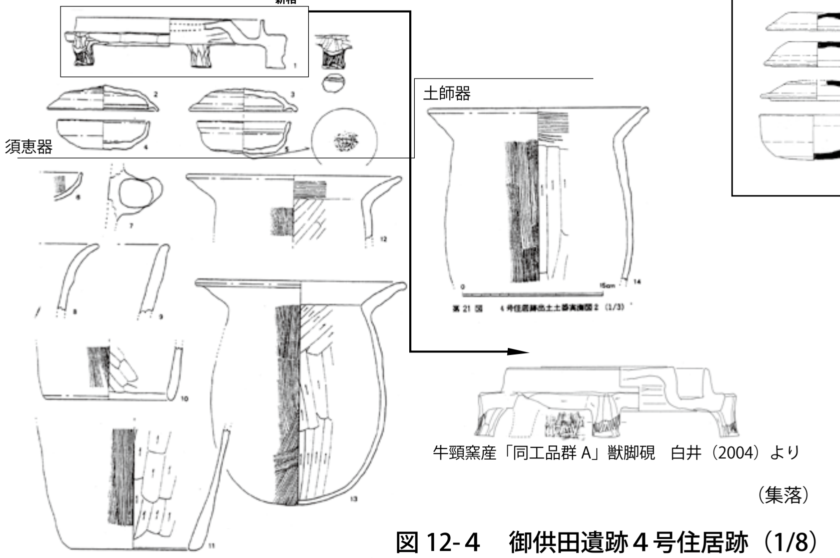
（墳墓）

図 12-3　堤ヶ浦古墳群　SK18（土坑墓）（1/8）

『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』
福岡市教委（1987）第 151 集
及び（中島 1997）

【筑前南部Ⅱ−2〜Ⅲ−2】

福岡県教委（1980）第 56 集



（集落）

図 12-４　御供田遺跡４号住居跡（1/8）

【筑前南部Ⅱ−2＜Ⅲ−1期】『平蔵遺跡』那珂川町教委（1980）第５集

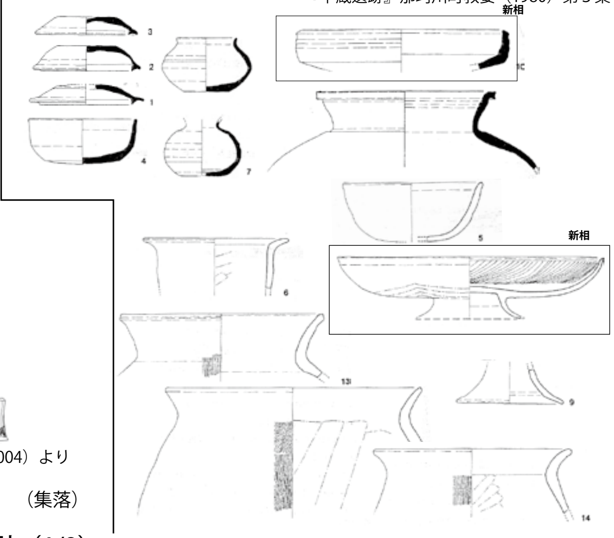


図 12-5　平蔵遺跡 SK11（1/8）

（集落）

【筑前南部Ⅲ−1】

『牛頸塚原遺跡』大野城市教委（1995）第 44 集

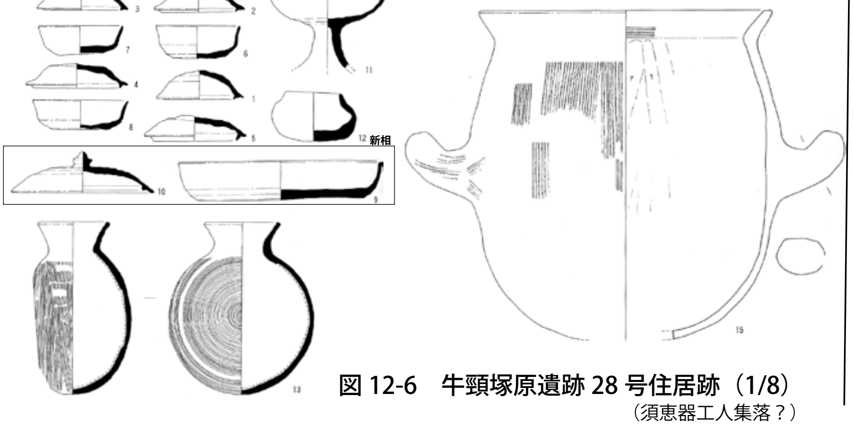
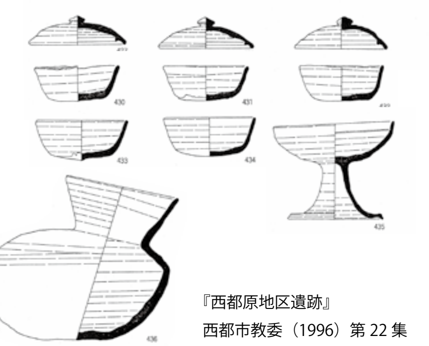


図 12-6　牛頸塚原遺跡 28 号住居跡（1/8）

（須恵器工人集落？）

【日向】



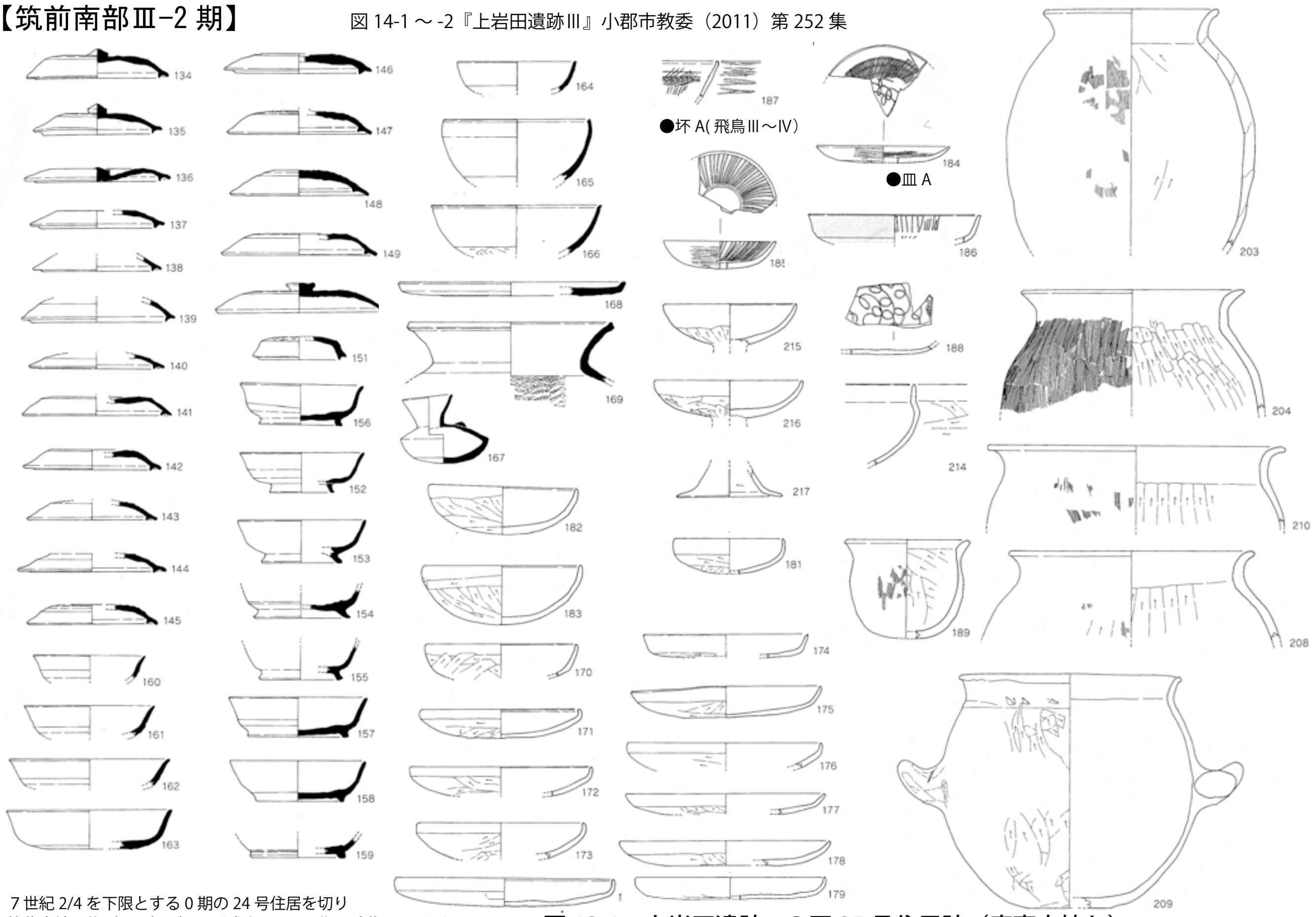
『西都原地区遺跡』
西都市教委（1996）第 22 集

図 12-7　旧競馬場跡 SD1（土坑墓か）

（墳墓）

【筑前南部Ⅲ-2期】

図14-1〜-2『上岩田遺跡Ⅲ』小郡市教委（2011）第252集



7世紀2/4を下限とする0期の24号住居を切り
筑紫大地震後（678年〜）に形成されるⅠb期の建物59に切られる

図13-1　上岩田遺跡　G区25号住居跡（廃棄土坑か）

【筑前南部Ⅲ-2期】

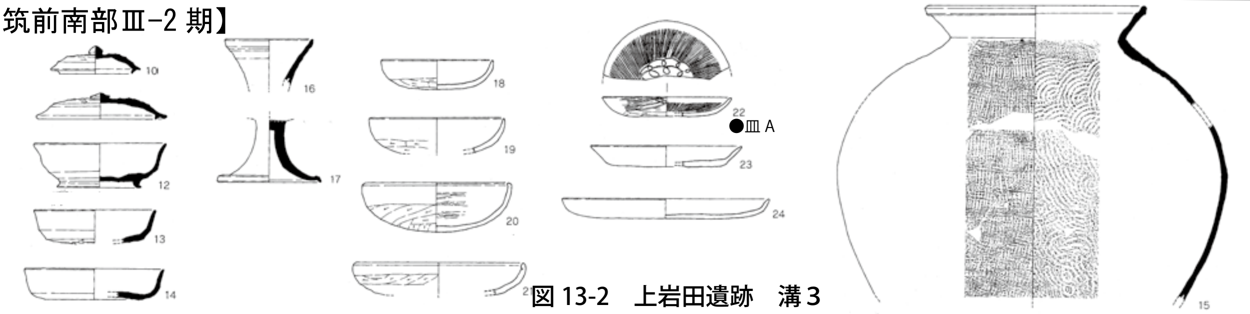


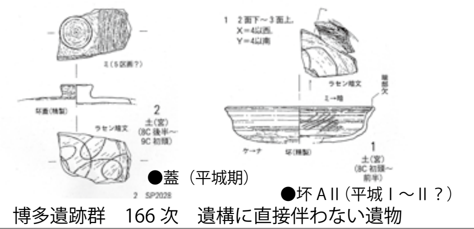
図13-2　上岩田遺跡　溝3

【筑前南部Ⅲ-2期】

『博多58』福岡市教委（1997）第526集

図13-3　博多遺跡群33次SC153

■166次　『博多127』福岡市教委2009（第1039集）



博多遺跡群　166次　遺構に直接伴わない遺物

【筑前南部Ⅲ-1期】

『福岡市埋蔵文化財年報』vol.21 福岡市教委2008

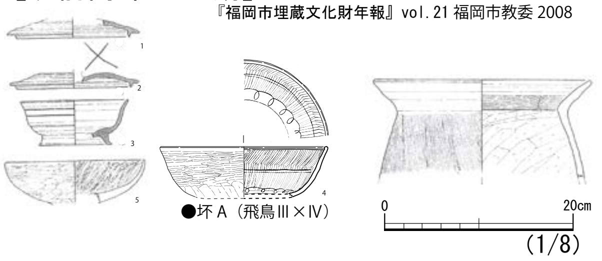
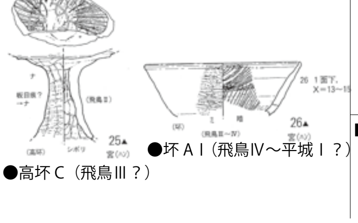


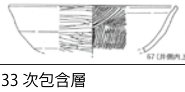
図13-4　博多遺跡群169次SK12

■166次
『博多127』福岡市教委（2009）第1039集

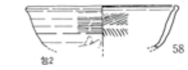


■158次SK1220
『博多119』福岡市教委（2008）第989集

■158次SE1226



■33次包含層
『博多58』福岡市教委（1997）第526集



博多遺跡群　遺構に直接伴わない遺物

【筑前南部Ⅲ-1期】『大宰府条坊跡Ⅸ』太宰府市教委（1996）第30集

■大宰府条坊跡

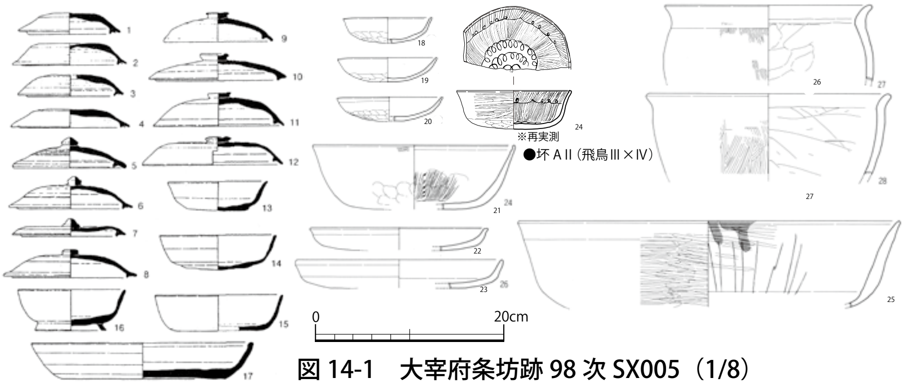
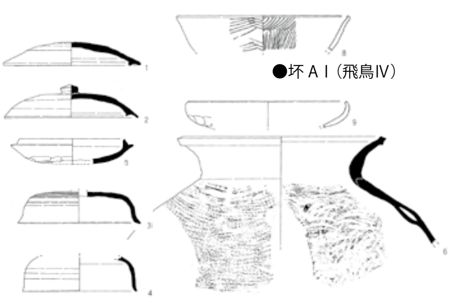


図 14-1　大宰府条坊跡 98 次 SX005（1/8）

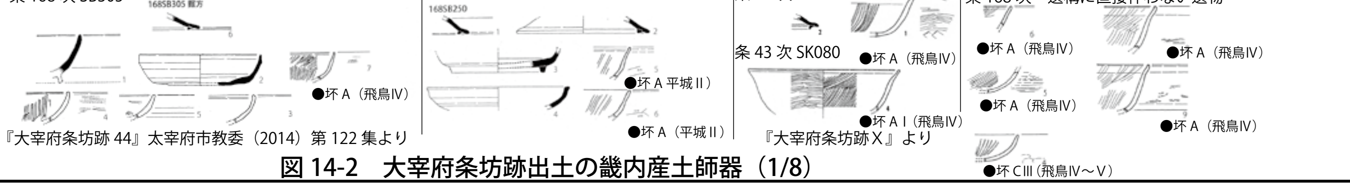
【筑前南部Ⅲ-2期】

■大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区）



『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ-不丁地区遺物編1-』九州歴史資料館（2013）

図 14-3　不丁地区 SK2344A（1/8）



『大宰府条坊跡 44』太宰府市教委（2014）第 122 集より　『大宰府条坊跡Ⅹ』より

図 14-2　大宰府条坊跡出土の畿内産土師器（1/8）

【山本Ⅲ期】『大宰府史跡』九州歴史資料館（1995）平成 6 年度概報

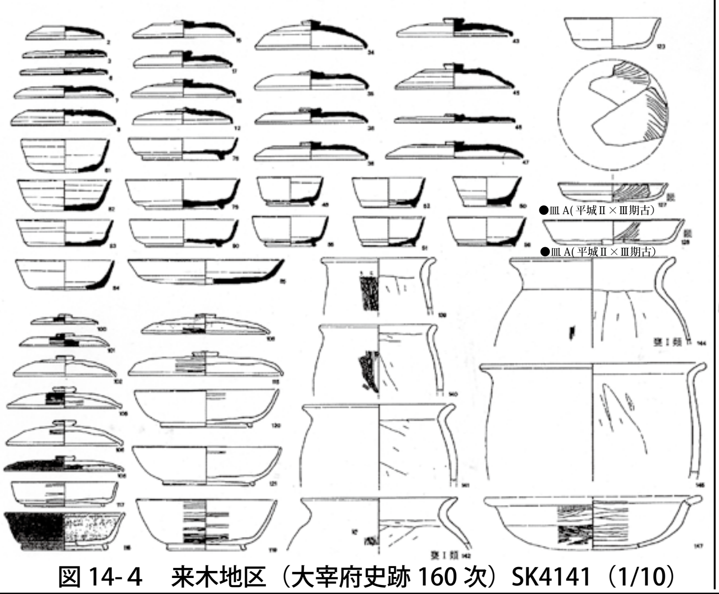
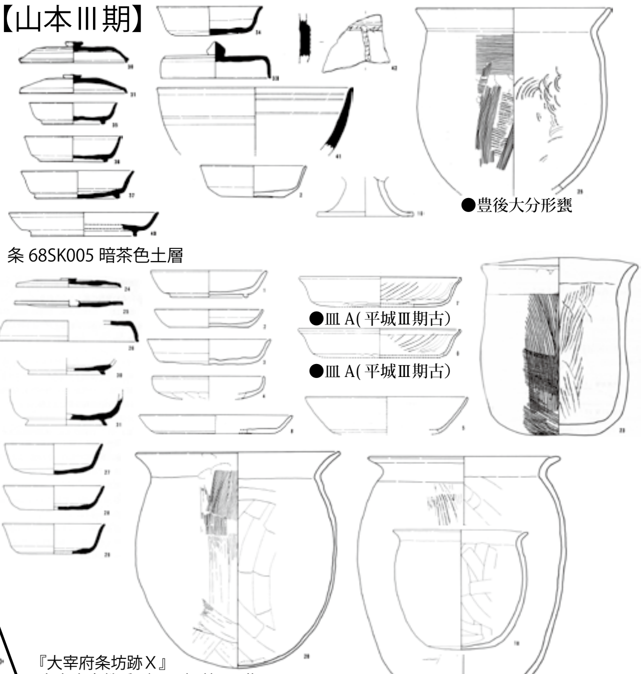


図 14-4　来木地区（大宰府史跡 160 次）SK4141（1/10）

【山本Ⅲ期】



『大宰府条坊跡Ⅹ』太宰府市教委（1998）第 37 集

図 14-5　大宰府条坊跡 68 次 SK005（1/10）

【豊後Ⅲ期】

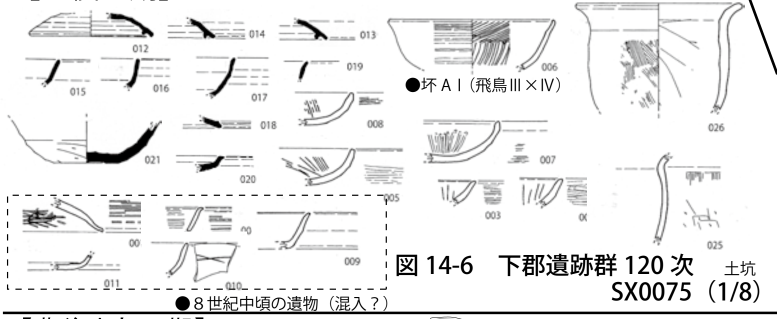


図 14-6　下郡遺跡群 120 次 土坑 SX0075（1/8）

【豊後Ⅱ～Ⅲ期】

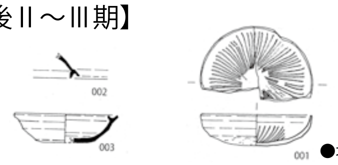
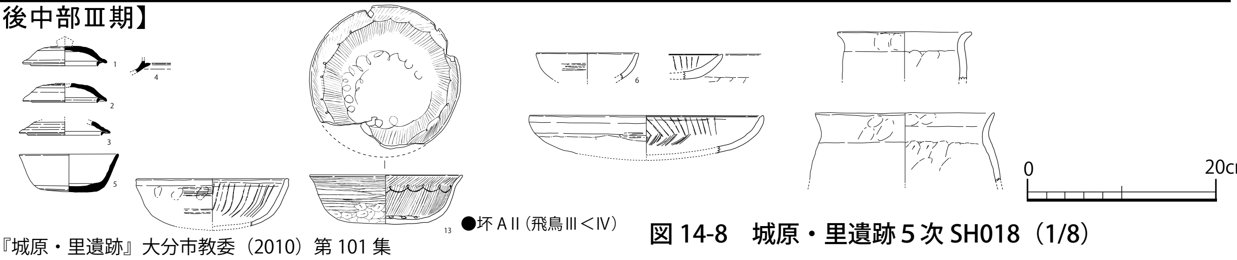


図 14-7　下郡遺跡群 120 次 SX1095（1/8）土坑

『下郡遺跡群Ⅵ』大分市教委（2008）　第 85 集

【豊後中部Ⅲ期】



『城原・里遺跡』大分市教委（2010）第 101 集

図 14-8　城原・里遺跡 5 次 SH018（1/8）

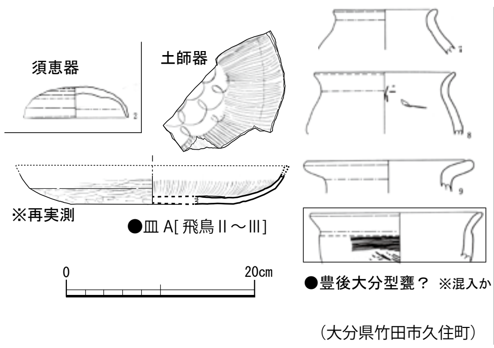


図 15-1　市第Ⅴ遺跡 SH4（1/8）

『市第Ⅴ遺跡』久住町教委（1998）第 5 集

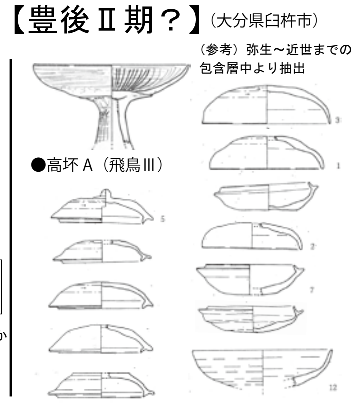


図 15-2　野村台遺跡
田井ヶ迫地区包含層（1/8）

『野村台遺跡』大分県教委（2003）第 156 輯

図 15-3　飛山 13 号横穴（1/8）

『飛山』大分市教委（1973）

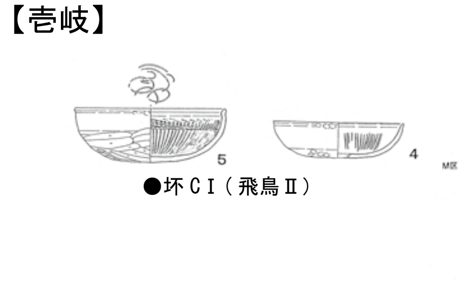


図 15-4　カジヤバ古墳（1/8）

『カジヤバ古墳』芦辺町教委（1988）

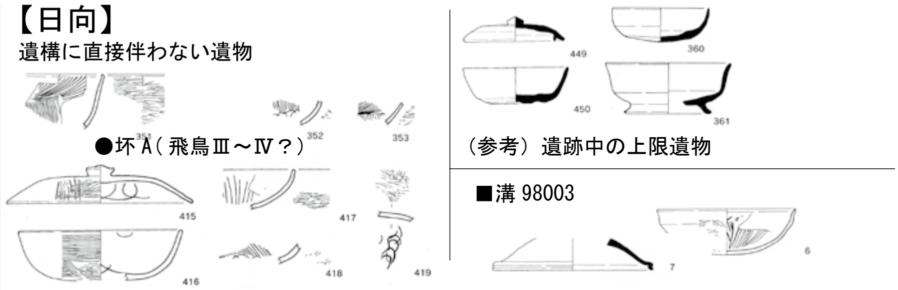


図 15-5　寺崎遺跡（日向国府跡）出土畿内産・畿内系土師器（1/8）

『寺崎遺跡』宮崎県教委（2001）

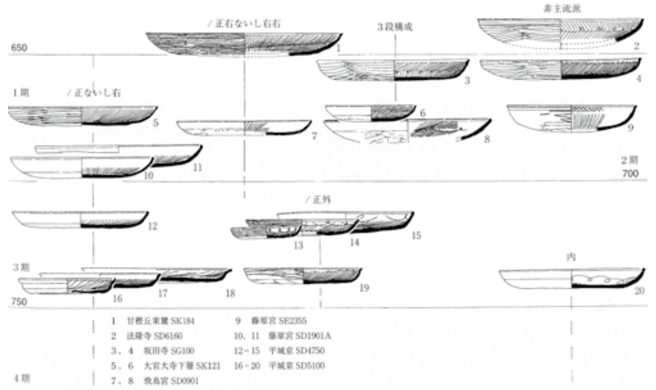


図 15-6　畿内産土師器　皿 A の暗文構成（森　2016　図 11 より）

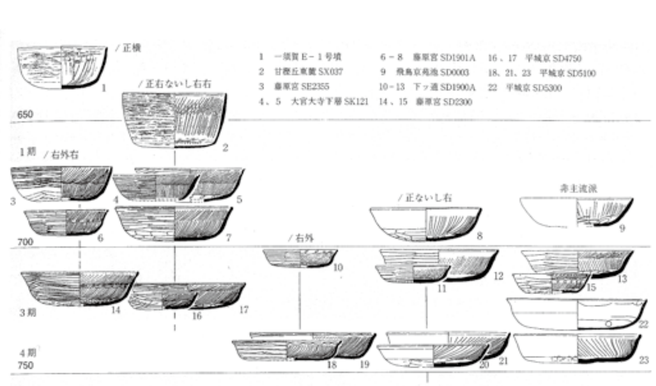
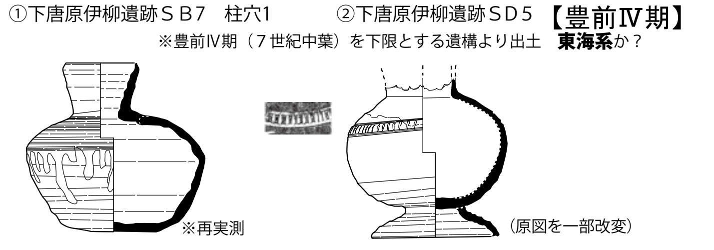


図 15-7　畿内産土師器坏 A の暗文構成（森　2016　図 8 より）



『下唐原伊柳遺跡』太平村教委（2003）・『下唐原伊柳遺跡Ⅱ（遺物編）』上毛町教委（2009）

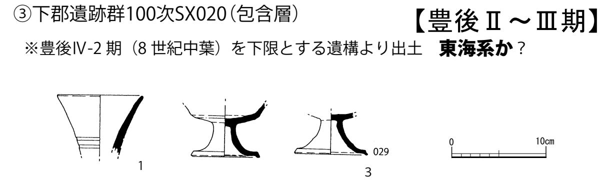


図 15-8　豊前・豊後地域の九州島外産須恵器（1/8）

『下郡遺跡群Ⅵ』大分市教委（2008）　第 85 集

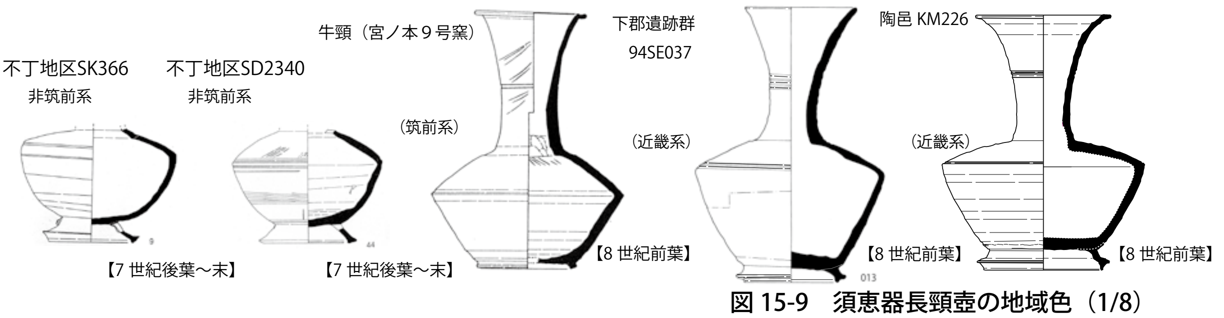
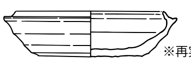


図 15-9　須恵器長頸壺の地域色（1/8）

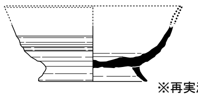
①水城西門（SB120掘方）出土須恵器
坏Ｈ　【筑前南部Ⅱ-2】



『水城跡　下巻』九州歴史資料館（2009）

水城築城に伴うものならば
天智３年（664年）以前の資料

③大野城跡百間石垣　中央谷８層・15層出土須恵器
未定型の坏Bか？　【筑前南部Ⅱ－２＜Ⅲ-1期】

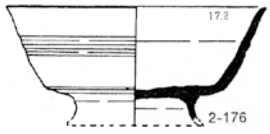


『特別史跡大野城跡整備事業』福岡県教委（2006）

（参考）宮ノ本４号表土（筑前南部Ⅱ-2＜Ⅲ-1）

『宮ノ本遺跡Ⅱ』（窯跡篇）太宰府市教委（1992）

（参考）山ノ神遺跡　灰原上層（飛鳥Ⅲ）



『山ノ神遺跡Ⅱ』大津市教委（1991）

出土層位は石垣の背後にある透水層となっていた石と砂質の
混じった層で報告者は石垣築造時に形成されたと考える。

大野城築城に伴うものならば天智4年（665年）以前の資料

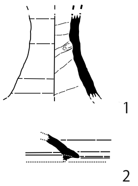
0　10cm　(1/5)

②大土居水城下層溝出土須恵器
坏Ｇ1　【筑前南部Ⅱ-1～Ⅱ】

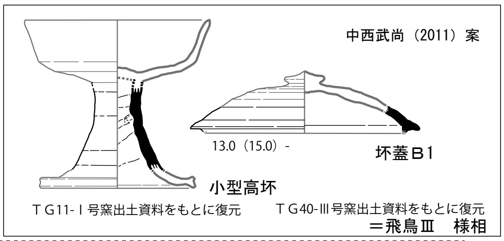
『大土居水城跡』春日市教委（2000）

大土居水城が水城と当時に築城された
ならば天智３年（664年）以前の資料

④古宮古墳羨道出土須恵器
【豊後中部Ⅲ期】

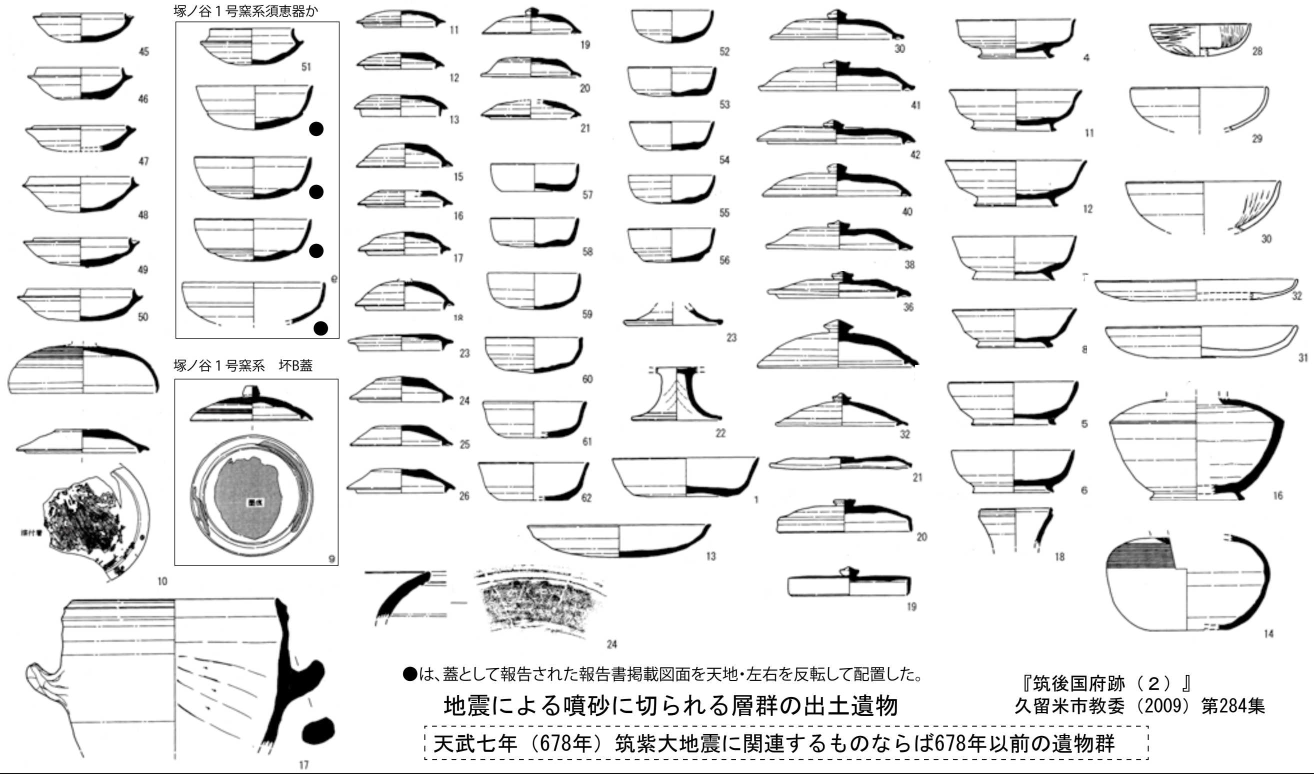


『古宮古墳』大分市教委（1982）



大分君恵尺の墓であれば天武四年（675）に近い遺物

⑤筑後国府87次筑後国府第89次東限大溝SX3856下層出土遺物　【筑前南部Ⅲ-2期】



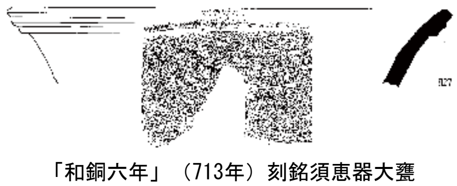
●は、蓋として報告された報告書掲載図面を天地・左右を反転して配置した。

地震による噴砂に切られる層群の出土遺物

『筑後国府跡（２）』
久留米市教委（2009）第284集

天武七年（678年）筑紫大地震に関連するものならば678年以前の遺物群

⑥牛頸窯跡群　ハセムシ窯跡群12地区最下段下層灰原出土大甕



「和銅六年」（713年）刻銘須恵器大甕

Ⅸ号窯を同時焼成した遺物群であれば
左図遺物群は713年頃の遺物群

0　20cm　(1/8)

『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』
大野城市教委（1989）第30集

12-Ⅸ号窯出土須恵器　【筑前南部Ⅳ期】

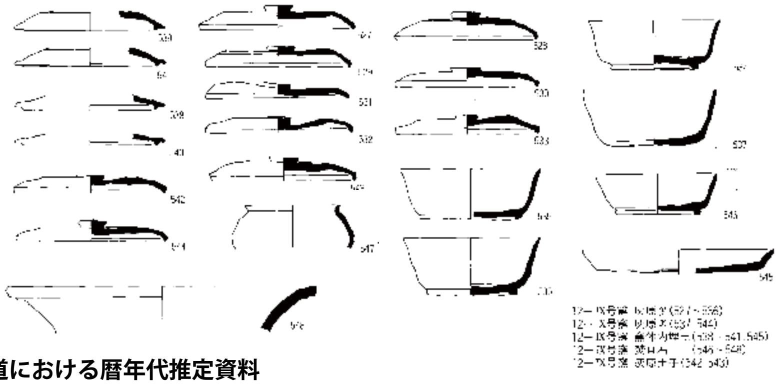


図 16　西海道における暦年代推定資料

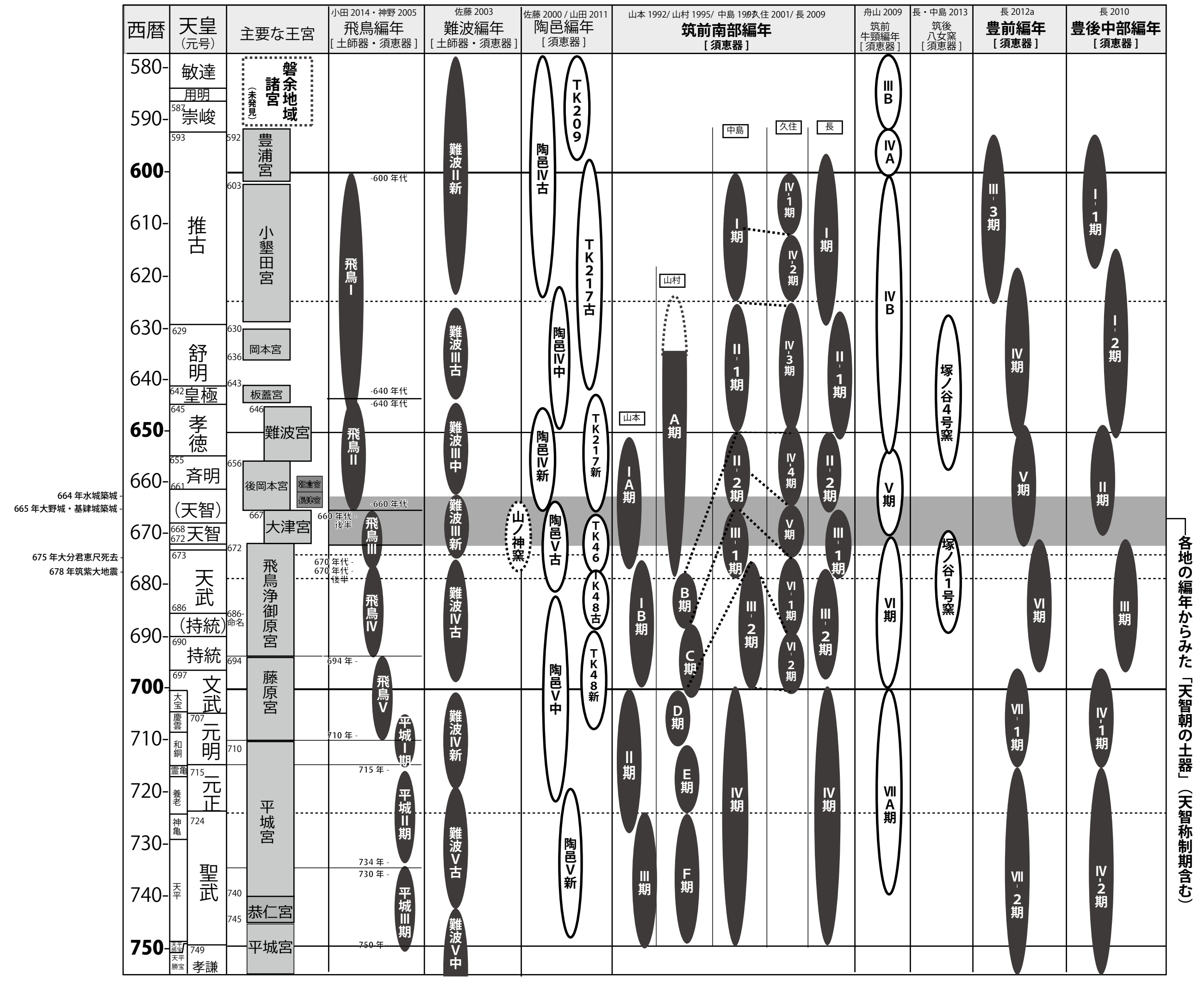
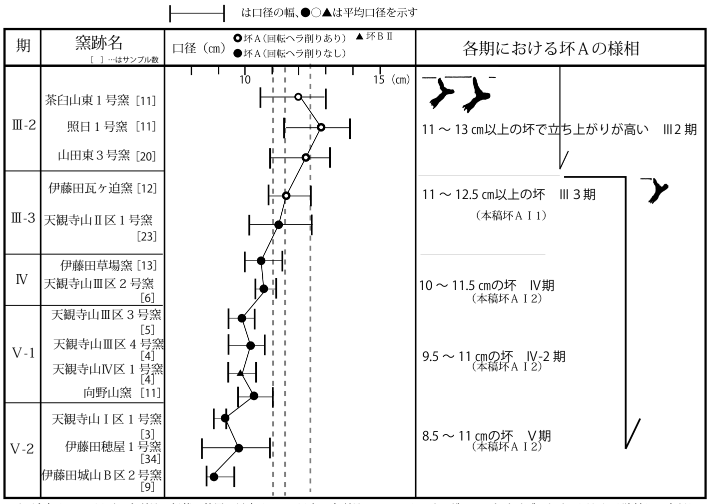


図 17-1　土器編年比較図

※各編年の年代観をもとに作成（土器様相比較や厳密な併行関係検証手続きを踏まえた図ではない）。
※筑前南部編年についてのみ各氏で同一土器様相の年代観に開きが大きいため中島編年を軸に山村氏・久住氏の考える同一様相の上限を破線で示す



伊藤田瓦ヶ迫窯は 10 cm以下の小型品、伊藤田穂屋１号窯は 11 cm以上の大型品については、イレギュラーなサイズのため、図からは除外して表記している。

図 17-2　須恵器坏 H の法量変化（豊前）

（長　2012a 図 14 より）

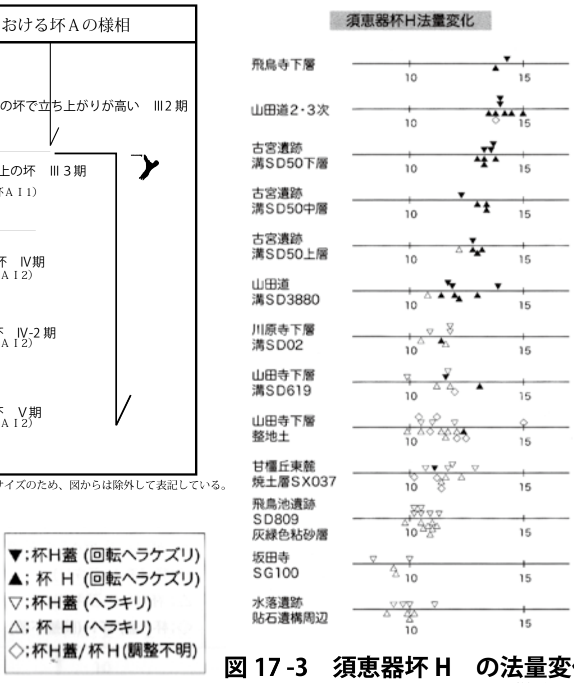


図 17-3　須恵器坏 H　の法量変化（飛鳥）

（筒井　2016 より）

column　豊前国の工房

　大宰府管内の須恵器・瓦生産地でも、とくに工房全体の姿が把握できる遺跡に、福岡県築上郡築上町所在の国指定史跡・船迫窯跡がある。本工房は大きく３段階の変遷をたどり、古墳時代（６世紀）には須恵器生産。飛鳥時代（７世紀）には九州最古級の瓦生産を開始し、奈良時代（８世紀）には豊前国分寺に供給する瓦生産を担った。特筆すべきは、８世紀に利用された瓦製作工房跡で、柱間の床面積が長軸30m×短軸20mの約600㎡にもなる巨大な堀立柱建物が確認された。本建物で瓦の整形･乾燥を行い、その後、工房背後にある低丘陵地に築いた窯で瓦を焼成したと判断できる。

　現在、船迫窯跡は史跡公園として整備されており、発掘調査成果を基に、巨大な瓦製作工房建物が想定復元されている。周辺地形も含めた古代の窯業生産地の姿を立体的に視認できる貴重な場所である。

（小嶋　篤）

船迫窯跡公園の遠景

復元された瓦製作工房

堀立柱建物の内部

第2章

西海道北部の土器生産 ～牛頸窯跡群を中心として～

石木　秀啓

はじめに

牛頸窯跡群は、福岡県大野城市を中心に太宰府市・春日市に広がる九州最大の須恵器窯跡群である。６世紀中ごろから９世紀中ごろの約300年間にわたり操業が行われ、これまで300基ほどの窯跡が調査されたほか、山中には現在でも最大150基が残存しているものと見られ、未調査・消滅のものも含めると、総基数は600基にせまると考えられる。また、窯跡群内の集落・古墳からは、須恵器生産に関連する遺構・遺物が確認されている。このような牛頸窯跡群は、長期間・大規模に操業された須恵器窯跡群として、平成21年に12ヶ所が「牛頸須恵器窯跡」として国史跡に指定されており、現在史跡整備事業を進めているところである1)。

今回、西海道の器と古代山城の築城がテーマとして掲げられている。大野城市の市名の由来となった大野城跡は、市の東部にあり、周知のとおり『日本書紀』に665年築造の記事が見える国内最大の朝鮮式山城である。また、大野城築造の前年に築造記事がみえる水城跡は、牛頸窯跡群が位置する丘陵地帯の北東側にある。水城跡は、長さ約1.2㎞、高さ約10ｍの土塁と濠からなり、福岡平野から二日市地峡帯・筑紫平野へと抜ける平野が最も狭まった所に築造された。水城跡の東と西には、１ヶ所ずつ門が設けられるが、それ以外は通行不可能であり、築造前後で土地利用や交通路・景観は大きく変わっているものと考えられる。さらに、牛頸窯跡群内や周辺には水城跡と同じころに造られたと考えられる小水城跡があり、水城跡西側丘陵地の小さな谷を塞いでいる。

このように、牛頸窯跡群は地理的に大野城・水城と関連がある。また、これまでの研究では、築造時期にあたる７世紀中頃から後半を境に大きな変化があったことが明らかにされている（石木2012）。これらを踏まえ、今回は大野城・水城築造前後の牛頸窯跡群と西海道北部の土器生産の様相を整理し、白村江の戦いから水城・大野城築造・大宰府成立にいたる歴史動向の中で、生産体制がどのように変容していったのか、またその意義を明らかにしていきたい。

図１　牛頸窯跡群周辺遺跡分布図

１．大野城・水城築造以前の牛頸窯跡群

牛頸窯跡群の操業は、６世紀中ごろに始まる。当初は、群北部の上大利地区に窯が作られ、野添６号窯跡など２～３基程度の小規模な生産であったが、６世紀末から７世紀初めの時期に窯の数は一気に急

増し、窯が作られる範囲も牛頸地区などに拡大し、７世紀前半にかけて継続する。

窯構造は、７世紀前半までは全長が10ｍを超えるような大形の窯が作られる。６世紀後半ごろは平面形が紡錘形を呈するものであったが、６世紀末ごろになると平面形が短冊形で排煙孔が複数ある多孔式煙道窯を採用する。多孔式煙道窯は牛頸窯跡群特有の窯構造であり、ここ以外では大阪府陶邑窯跡群に１例あるのみである。

窯では、蓋杯や高杯・椀・𤭯（はそう）・提瓶・甕・大甕などが焼かれており、大形の窯を用いて様々な器種を焼いている。また、須恵器以外の生産品が見られるのもこの時期である。６世紀末にあたる神ノ前２号窯跡などでは、初期瓦の生産が行われ、７世紀中頃まで生産が続けられる。また、野添７次２号窯跡では陶棺２個体が出土し、九州で初めて生産地からの出土が確認されるとともに、その特徴から畿内の技術が用いられていることが明らかになった。

図２　多孔式煙道窯の一例（中通Ａ－２号窯跡）

図３　惣利・惣利東・惣利西遺跡遺構平面図

須恵器生産関連集落では、本堂遺跡14次調査で６世紀中ごろにあたる窯跡の灰原下方の斜面部に、竪穴住居跡と粘土生成土坑が確認された。工房跡と考えられる。このような、窯跡近くの斜面部に位置し、粘土生成土坑などを備え、工房跡と考えられる遺跡は、梅頭遺跡２・３次調査や惣利・惣利西・惣利東遺跡などがあり、７世紀前半まで継続する。一方で、平地に位置する集落としては、上園遺跡13次調査ではロクロピットが確認され、粘土生成土坑の存在から工房跡の存在が明らかになっている。また、牛頸窯跡群のほぼ中央部に位置する塚原・日ノ浦遺跡群では６世紀末頃以降９世紀に至るまで、長期間にわたり継続して集落が営まれ、多量の須恵器が廃棄された土坑が見つかるなど、中心的な須恵器生産関連集落と見られる。

墳墓では、小田浦・後田・中通古墳群で丘陵斜面に横穴式石室を有する円墳が６世紀末頃から７世紀中頃まで築造が行われ、鉄製Ｕ字型鋤先が副葬され、窯に近接して築造されることなどから須恵器工人の墳墓として考えることができる。一方で、梅頭遺跡群では、窯内から鉄刀や鉄鏃、耳環などの副葬品が出土する事例や、窯の焚口付近で遺体を火化した痕が見られるなど、窯を墳墓として転用した事例が３ヶ所で明らかになっている。

２．大野城・水城築造時期の牛頸窯跡群

この時期にあたるのは、牛頸窯跡群編年のⅤ期と呼ばれる時期である。生産される器種が最も少なくなる時期であり、古墳時代以来の主要器種であった蓋杯（杯Ｈ）は基本的に姿を消す時期とされ、法量も最も小形になる。またつまみのついた蓋を有し、丸底の杯身をもつ杯Ｇが増加している。この時期の窯の資料で、Ⅴ期とされる後田60−Ⅰ号窯跡、小田浦50−Ⅰ号窯跡はすべて杯Ｇとして報告されているが、杯Ｈと杯Ｇのどちらにすべきか迷うものが多くあり、Ⅴ期は杯Ｈと杯Ｇが共伴する時期と考える。むしろ、この時期を決めるのは高杯であり、脚が最も短く小型のものが指標となる。

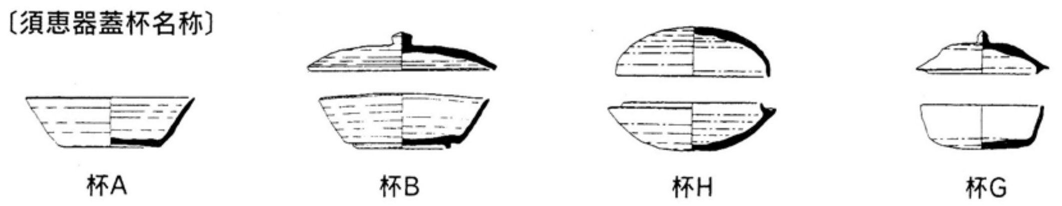


図４　須恵器蓋杯名称の表記（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所分類を援用）

この時期の窯跡は極めて少なく、調査されたものは５基程度と前代に比べて大きく減少する。窯構造は、前代まで主流であった多孔式煙道窯に対し、後田60−Ⅰ号窯跡のような直立煙道窯が出現する。窯の大きさも、全長10ｍを超えるものは少なくなり、全長５ｍ前後のものが増えてくる。

集落は、窯の近くの斜面部に立地するものはこの時期を境になくなり、平地にしか見られなくなる。また、古墳の築造は少なくなり、前代に造られた古墳への追葬が続く。

３．大野城・水城築造後の牛頸窯跡群

７世紀後半になると、杯Ｈは生産されなくなり、つまみ付きで高台を有する蓋杯（杯Ｂ）が主体となる。多孔式煙道窯はさらに少なくなり、直立煙道窯が主体となる。窯の大きさは、全長５ｍ以下のものが増加する。大形の窯で甕を含めた生産を行い、小形の窯で蓋杯や高杯・皿などの小形器種を生産している。また、前代まで生産されていた初期瓦や陶棺のような須恵器以外の生産物は認められなくなる。

図５　水城跡・大野城跡・上大利小水城跡空撮

さらに８世紀に入ると窯の数が増大する。特に８世紀前半は最も多くの窯が作られ、生産される器種も最も豊富な時期である。特にハセムシ・井手窯跡群のように山奥に操業範囲が広がっている。大形の窯では甕などの大形品を、小形の窯では蓋杯などの小形品を焼いており、製品の焼き分けを行っている。窯はすべて直立煙道窯となる。大形の窯でも７～８ｍ程度であり、７世紀に比べて規模は小さくなる。また小形の窯は全長３～４ｍであり、数は大型のものより多く、小形器種中心の生産が進められ、西海道一の大規模須恵器生産地となっていく。

集落は７世紀後半以降になると、太宰府市側にあたる大佐野川沿いに出現する遺跡が多い。特に、谷の最奥部の沖積地上に立地する長ヶ坪遺跡・カヤノ遺跡では、この時期に規模の大きな掘立柱建物が複

数棟出現する。ここは、上大利小水城が築造される水城西側の小さな谷から大宰府へいたる道の要所にあたり、その意義が問われるところである。

図６　長ヶ坪遺跡遺構平面図

また、島本・日焼・前田遺跡では官道が確認されているが、日焼遺跡では、官道側溝や河道から８世紀前半代の遺物が多量に出土し、焼けひずんだものも含まれる一方で、円面硯・転用硯や付札状木製品が出土する。焼けひずみのある須恵器は、前田遺跡や原口遺跡でも確認されている。

墳墓は、古墳への追葬がほとんど行われなくなり、明確な墳墓遺構の確認が少なくなる。一方で、８世紀前半代以降、宮ノ本丘陵において土壙墓が確認されるようになる。

４．Ｖ期の年代観について

水城跡の調査では、西門第Ⅰ期城門の柱穴SB120Ａや木樋部SX050・051出土須恵器があり、水城築造時期に近い時期の遺物として考えられている。

また、ウトグチ遺跡Ｂ地点１号窯跡は、牛頸窯跡群特有の多孔式煙道窯の焼成部床面を階段状に掘りくぼめて瓦窯として使用している。窯構造は、この時期に位置づけられる小田浦50－Ⅰ号窯跡と、平面形や規模が類似している。出土遺物は、軒丸瓦・軒平瓦とともに、須恵器が出土しており、瓦の年代と文献資料から、その時期を「斉明朝（655 ～ 661年）を中心とする前後」にあたるとされている（渡辺1995）。

さらに、大土居小水城においては、２次調査出土遺物の中で、土塁南側裾部積土下の小溝から出土した杯身があり、小水城築造時期の上限を示す資料と考えることができる。上大利小水城跡においても、大浦２号窯跡に並行すると考えられる平瓦が積み土中から出土しており、水城・小水城の築造がⅤ期段階にあったことを知ることができる。

５．西海道北部の須恵器生産

九州では、５世紀以降各地で須恵器生産が行われる。７世紀になると、宗像・八女・牛頸窯跡群で大規模な生産地が成立しており、周辺では井手ヶ浦・裏ノ田窯跡群などで小規模な生産地があり、それぞれ独自の操業を行っている。これらの窯跡群は、７世紀前半代まではそれぞれ盛んに操業を行っているが、７世紀後半代になると筑前地域では牛頸窯跡群での調査例が非常に多くなり、他の窯跡群ではこの時期の窯の調査事例が少なくなる。またこの時期には、牛頸窯跡群の中に、ハセムシ27号窯跡のような宗像窯跡群の窯構造の特徴をもつものが作られ、操業が行われている。このことは、宗像窯の工人が牛頸窯に移入されたことを示している。

このように、筑前地域では７世紀後半になると牛頸窯跡群で集中的な須恵器生産が行われていると考えられる。８世紀前半代に入ると、牛頸窯跡群の操業はピークを迎え、筑前国一国の生産を担うようになり、西海道一の窯場へと発展をとげる。

まとめ

水城・大野城が作られるＶ期からその後にかけて、牛頸窯跡群では窯の基数や窯構造・器種など生産体制の変化が生じている。すなわち、Ｖ期段階では窯の基数が大きく減少し、生産される器種も減少するが、続くⅥ期においては窯構造の変化がおこり、窯の規模に応じた製品の焼き分けが行われ、生産される器種も杯Ｂを中心とした生産物へと変化する。

また、この時期の集落についても、窯とともに丘陵斜面にあった集落が姿を消し、窯と集落は切り離された形で別々の立地をとるようになる。このことは、個別に行われていた窯の操業が、集中的に行われるようになった結果と見ることができ、窯の動向と合わせ、生産体制の大きな変化が生じている。さらに、この時期に築造される水城は、東西の２ヶ所のみに門を構え、小水城もまた窯の所在する丘陵を塞ぐように位置している。これらの軍事的要塞は、土地利用や交通路・景観・住民の心情に変化をもたらし、集落構造・通行圏など地域の在り方に大きな影響を与えている。牛頸窯跡群においては、この時期以降に大佐野川周辺の集落・窯跡が増加し、水城西門官道側溝に焼けひずんだ須恵器が廃棄されていることは、大宰府への供給が志向された結果と考えられ、そのルートも小水城・水城を通行しないものであったと考えられる。

このように、水城・大野城築造を境にして大きく生産体制を変える牛頸窯跡群は、窯を転用した墳墓とヘラ書き須恵器から、７世紀前半には「大神部」と呼ばれる工人首長が生産を掌握していたものと考えられる。この大神部は、畿内の大神氏と関わりをもつ部民である。

『日本書紀』天智２年（663年）３月条には、新羅討伐へむかう軍の陣容と将軍の名前が挙げられており、地方豪族が中心となる軍と中央氏族が率いる軍があったことが知られている（森1998）。その将軍の一人に、「三輪君根麻呂」の名前が見える。鈴木正信氏によれば、「律令制以前に中央氏族が軍事行動に派遣される際、その中央氏族と関係を結んでいた地方氏族がその配下に加わって活躍した場合が存在した」としている（鈴木2014）。

このことから、７世紀前半に既に大神氏と関係を有し、牛頸窯跡群の操業を掌握していた大神部に連なる須恵器工人が、三輪君根麻呂が率いる軍に動員された可能性が考えられる。その結果、Ｖ期段階における窯の減少につながり、生産体制の大きな変化を生じさせることとなっ

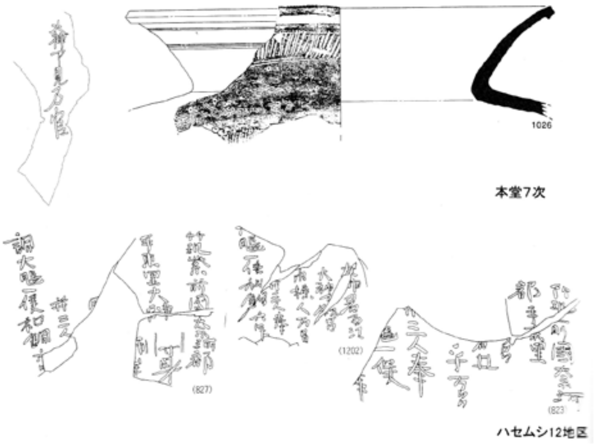


図７　牛頸窯跡群出土ヘラ書き須恵器

表１　百済救援の出兵者と募兵地域（森2016より転載）

国名	郡名	出典	人名	備考
駿河		斉明７・是歳条		船を造らせる
甲斐	山梨	古屋家家譜	大伴山前連淵守	唐で戦死
常陸	石城	風土記香島郡条		*「淡海之世」に石城で造った船が香島郡に漂着
陸奥	信太	慶雲４・５・癸亥条	生王五百足	40余年後に帰国
但馬	朝来	粟鹿大神元記	神部直根閉	帰国後，大領に
播磨		風土記讃容郡条	国宰道守臣	*官船を造る
備中	下道	風土記逸文		邇磨郷で軍士２万人を徴発
備後	三谷	日本霊異記上—７	三谷郡大領之先祖	百済の僧侶をつれて帰国
讃岐	那賀	慶雲４・５・癸亥条	錦部刀良	40余年後に帰国
伊予	風速	持統10・４・戊戌条	物部薬	帰国，追大弐授与
	越智	日本霊異記上—17	越智郡大領之先祖	帰国後，立評，小市国造か
筑前	早良	天武13・12・癸亥条	筑紫三宅連得許	帰国
筑後	山門	慶雲４・５・癸亥条	許勢部形見	40余年後に帰国
	上妻	持統４・９・丁酉条	大伴部博麻	軍丁，30余年後に帰国
		持統４・10・乙丑条		
		天智10・11・癸卯条	筑紫君薩夜馬	帰国，筑紫国造か
豊前	宇佐	天智10・11・癸卯条	韓嶋勝娑婆	帰国，宇佐の有力豪連か
肥後	皮石	持統10・４・戊戌条	壬生諸石	帰国，追大弐授与
不詳		天智10・11・癸卯条	布師首磐	帰国，越中国射水郡・土佐国安芸郡に布師郷がある，讃岐国山田郡・鵜足郡に布敷臣が居住
		天武13・12・癸亥条	猪使連子首	帰国
		持統４・10・乙丑条	土師連富杼	天智10・11・癸卯条で帰国か
			氷連老	
			弓削連元宝児	
第１次派遣軍		斉明７・８・条 斉明７・９・条	前将軍阿曇連比邏夫・河辺臣百枝 後将軍阿倍引田臣比羅夫・物部連熊・守君大石 別将狭井連檳榔・秦造田来津〔近江・愛智〕	
第２次派遣軍		天智２・３・条	前将軍上毛野君稚子・間人連大蓋 中将軍巨勢神前臣訳語〔近江・神崎〕・三輪君根麻呂 後将軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄	
第３次派遣軍		天智２・８・甲子条	盧原君臣〔駿河・廬原〕	

たのではないかと考えている。

　このように、水城･大野城が作られた時代を契機に、西海道北部の須恵器生産体制は大きく転換する。特に牛頸窯跡群では、その動向が顕著に表れており、水城・大野城を抜きにして歴史的動向を考えることはできない。今後、さらに広範な研究が必要である。

註

１）　史跡名称は「牛頸須恵器窯跡」であるが､本稿ではこれまでの研究史で使用されている「牛頸窯跡群」の語を用いるものとする。

参考文献

石木秀啓 2010「第３部　第３章　九州」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社

石木秀啓 2012「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」『古文化談叢』第67集　九州古文化研究会

杉原敏之編 2009『水城跡－上・下巻－』九州歴史資料館

鈴木正信 2014『大神氏の研究』日本古代氏族研究叢書④　雄山閣

中村昇平・森井千賀子 2004『ウトグチ遺跡Ｂ地点』春日市文化財調査報告書第39集　春日市教育委員会

中村昇平 2000『大土居小水城跡』春日市文化財調査報告書第28集　春日市教育委員会

舟山良一・石川健 2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書第77集　大野城市教育委員会

森公章 1998『「白村江」以後』講談社メチエ132　講談社

森公章 2016『天智天皇』人物叢書新装版　吉川弘文館

渡辺正気 1995「第４章　第３節　古代窯業遺跡」『春日市史』 春日市

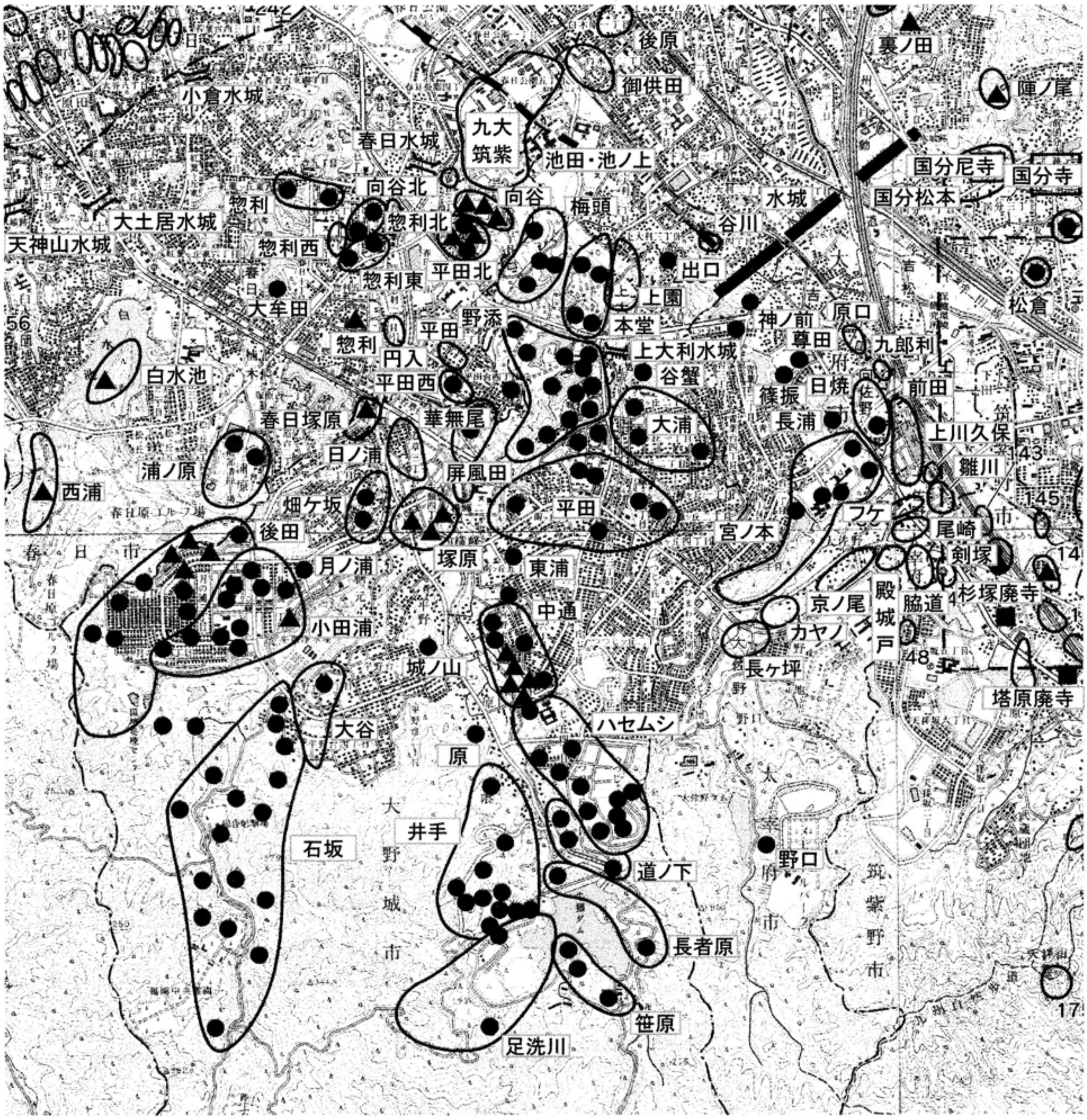
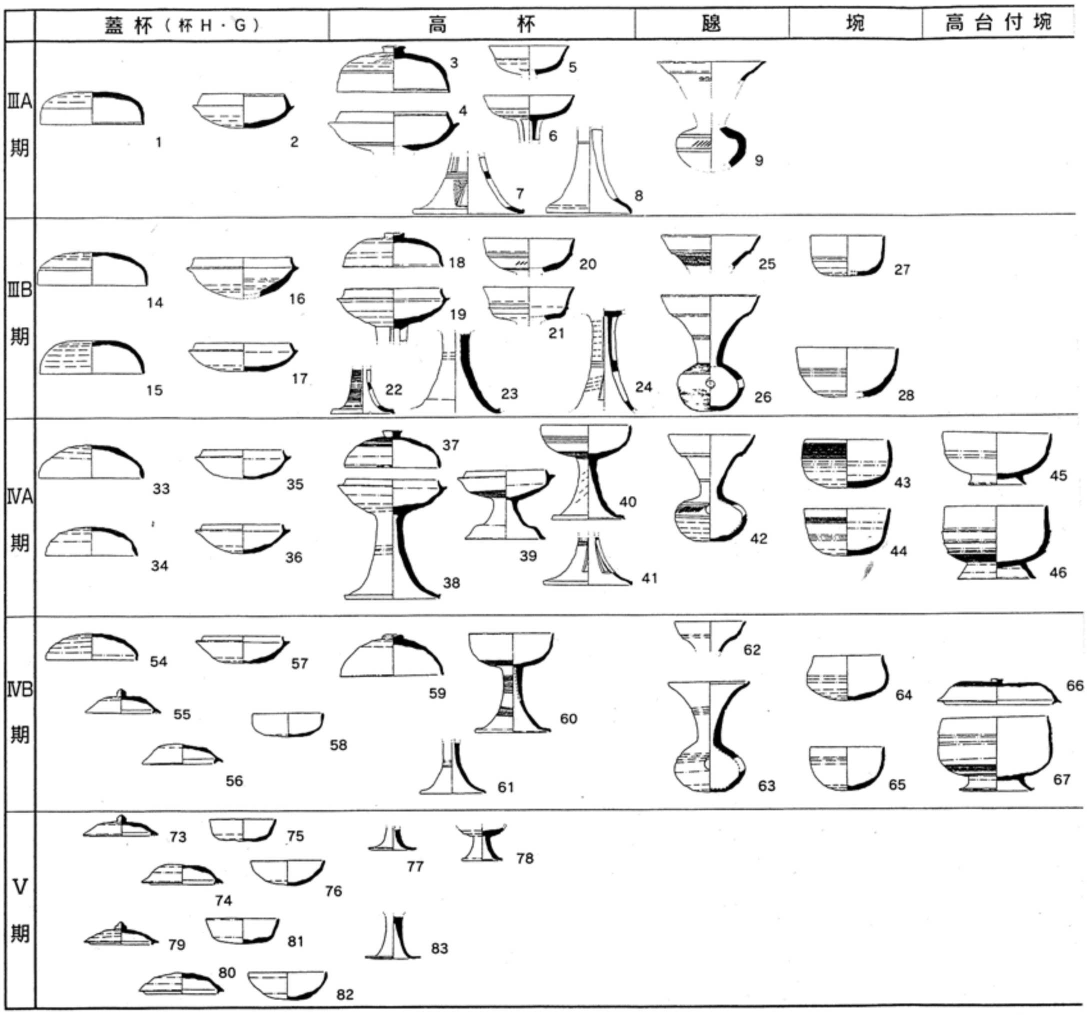
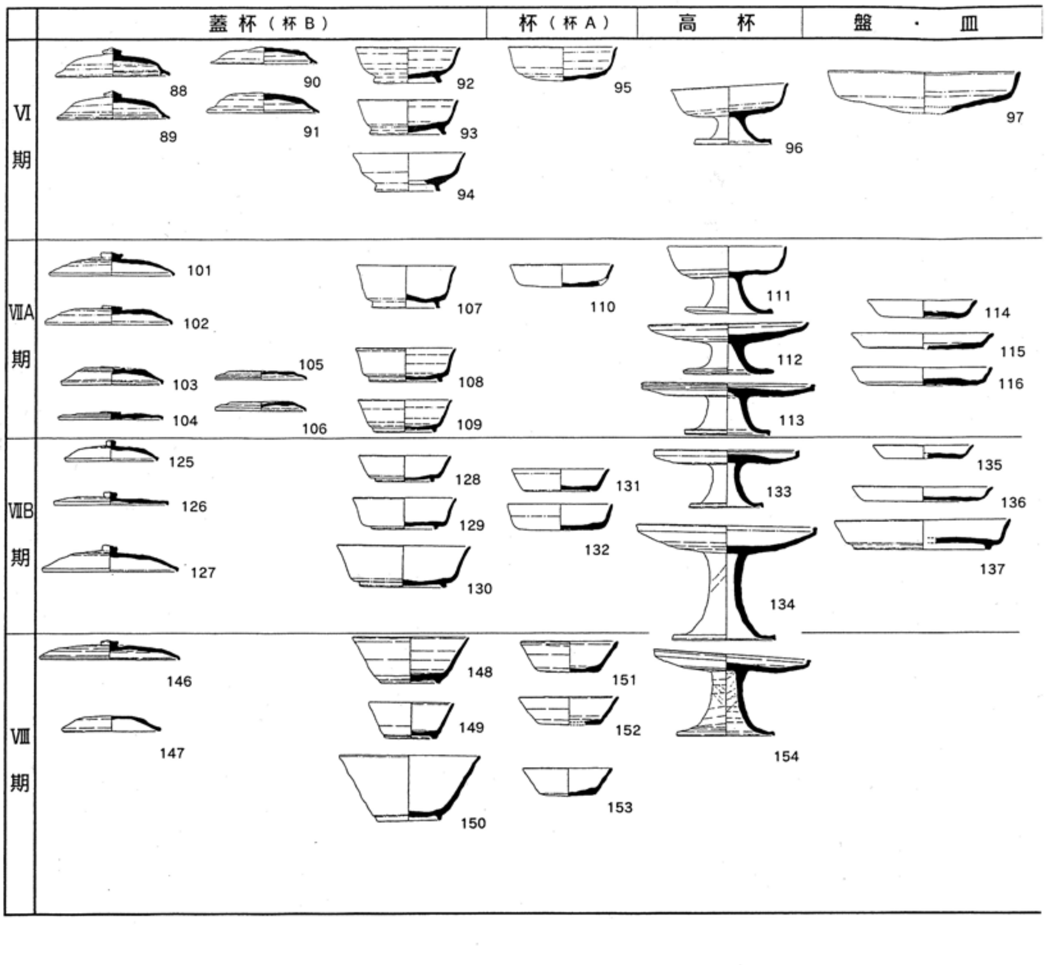
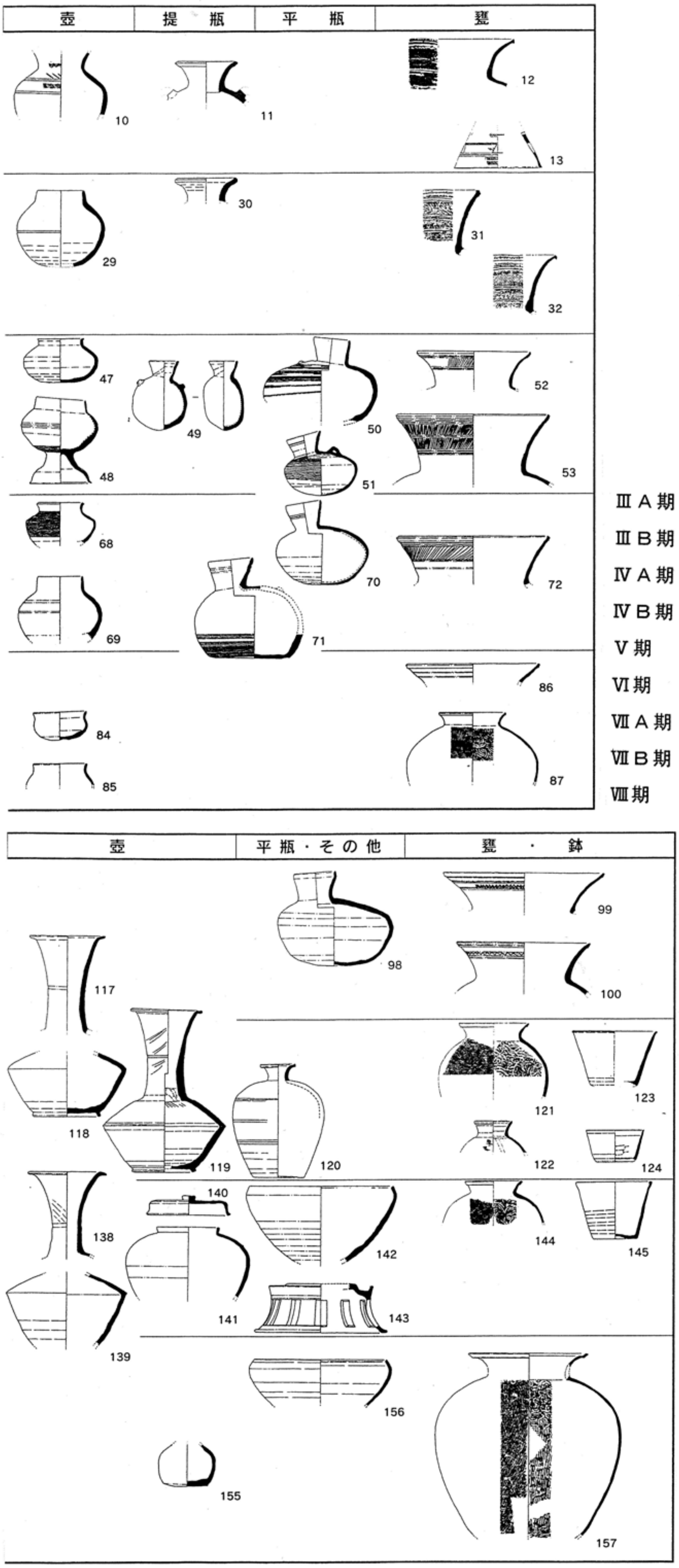


図８　牛頸窯跡群遺跡分布図（●は須恵器窯跡、▲は古墳を表す、■は寺跡を表す）


蓋杯（杯H・G）
高杯
𤭯
埦
高台付埦
ⅢA期
ⅢB期
ⅣA期
ⅣB期
Ⅴ期


蓋杯（杯B）
杯（杯A）
高杯
盤・皿
Ⅵ期
ⅦA期
ⅦB期
Ⅷ期



Ⅲ A 期	6 世紀中頃
Ⅲ B 期	6 世紀後半
Ⅳ A 期	6 世紀末～7 世紀初頭
Ⅳ B 期	7 世紀前半
Ⅴ 期	7 世紀中頃
Ⅵ 期	7 世紀後半
Ⅶ A 期	8 世紀前半
Ⅶ B 期	8 世紀後半
Ⅷ 期	8 世紀末～9 世紀前半

図９
牛頸窯跡群出土須恵器
変遷図（S=1/10）

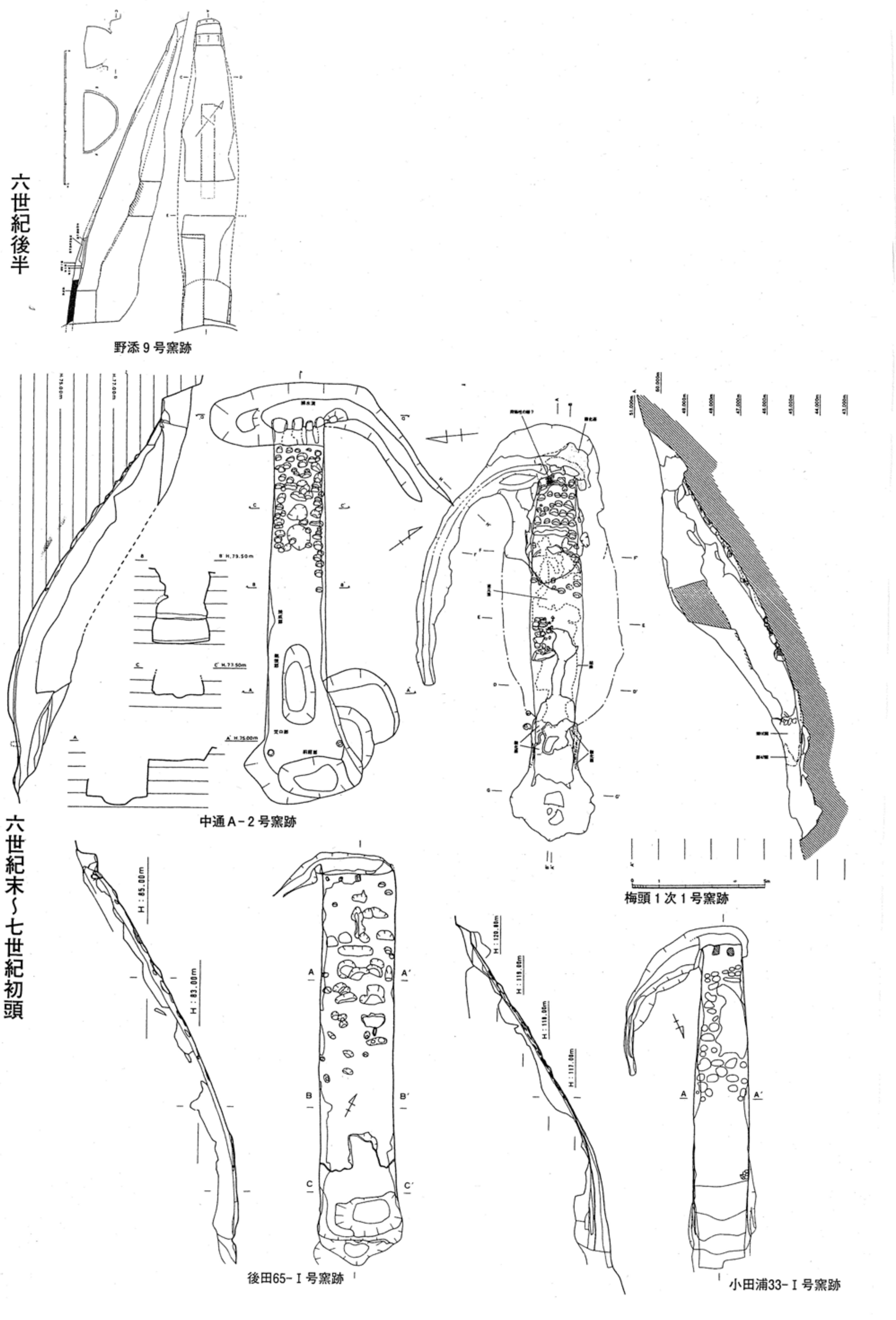


図10　牛頸窯跡群窯構造変遷図①（S=1/200）

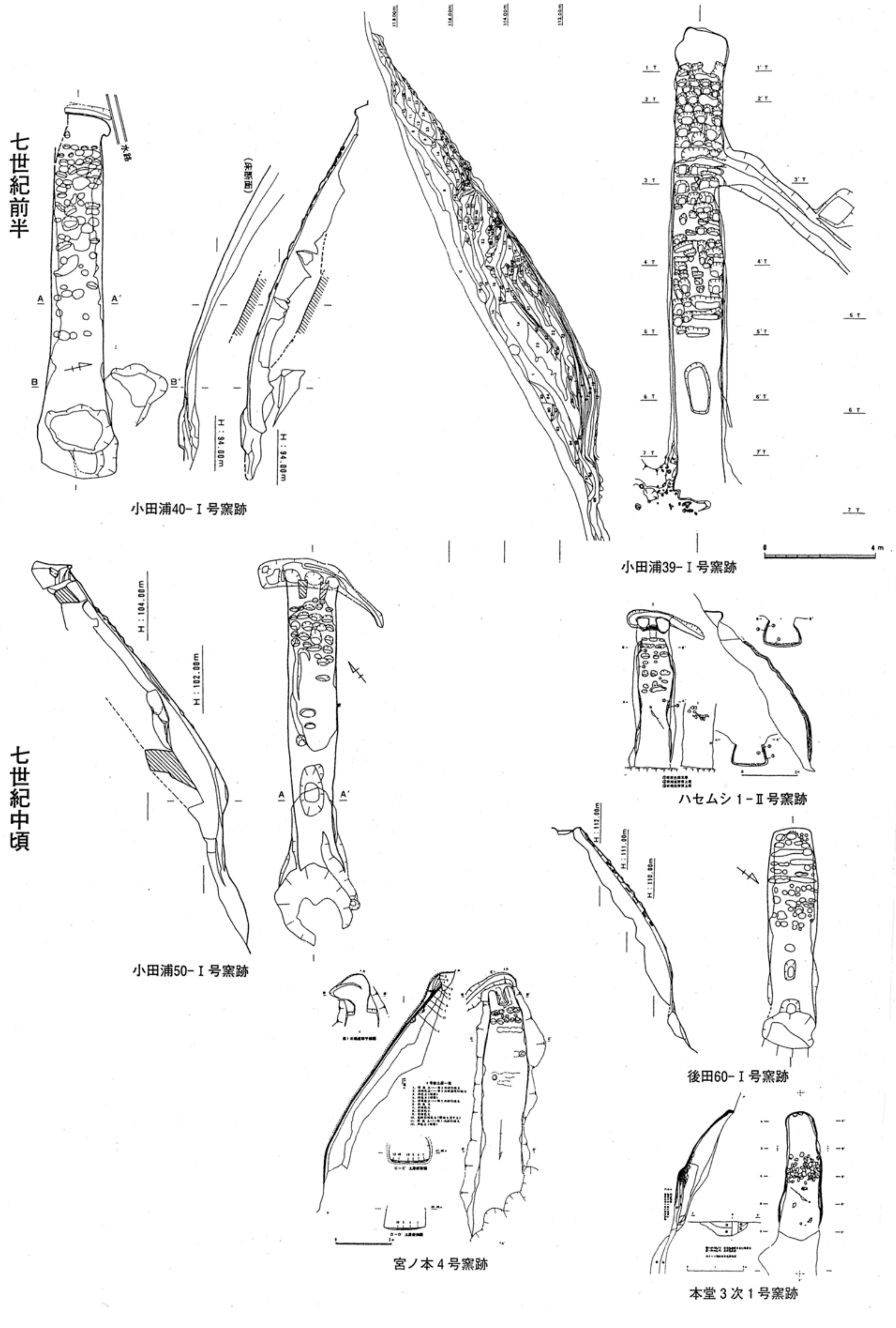


図11　牛頸窯跡群窯構造変遷図②（S=1/200）

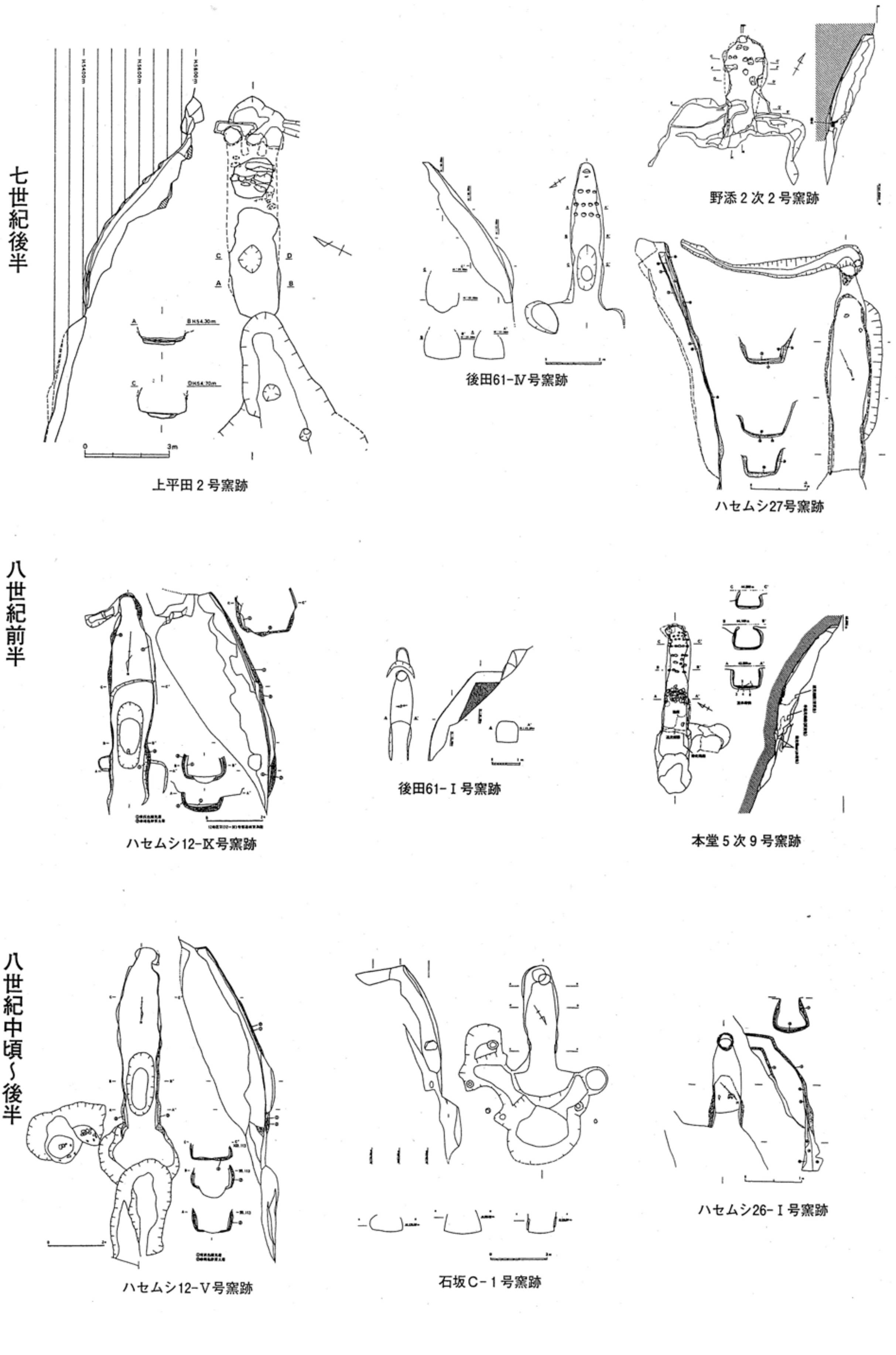


図12　牛頸窯跡群窯構造変遷図③（S=1/200）

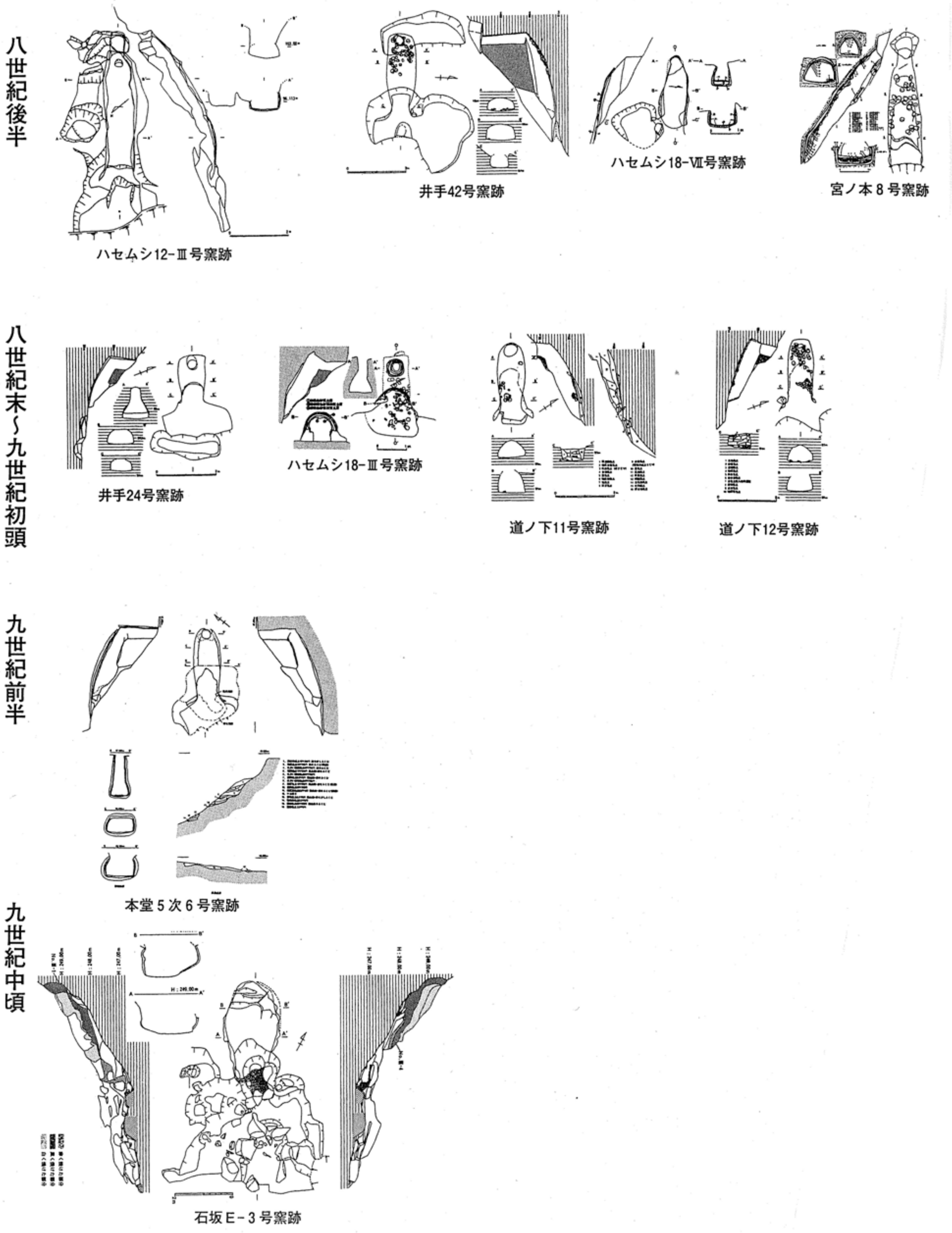


図13　牛頸窯跡群窯構造変遷図④（S=1/200）

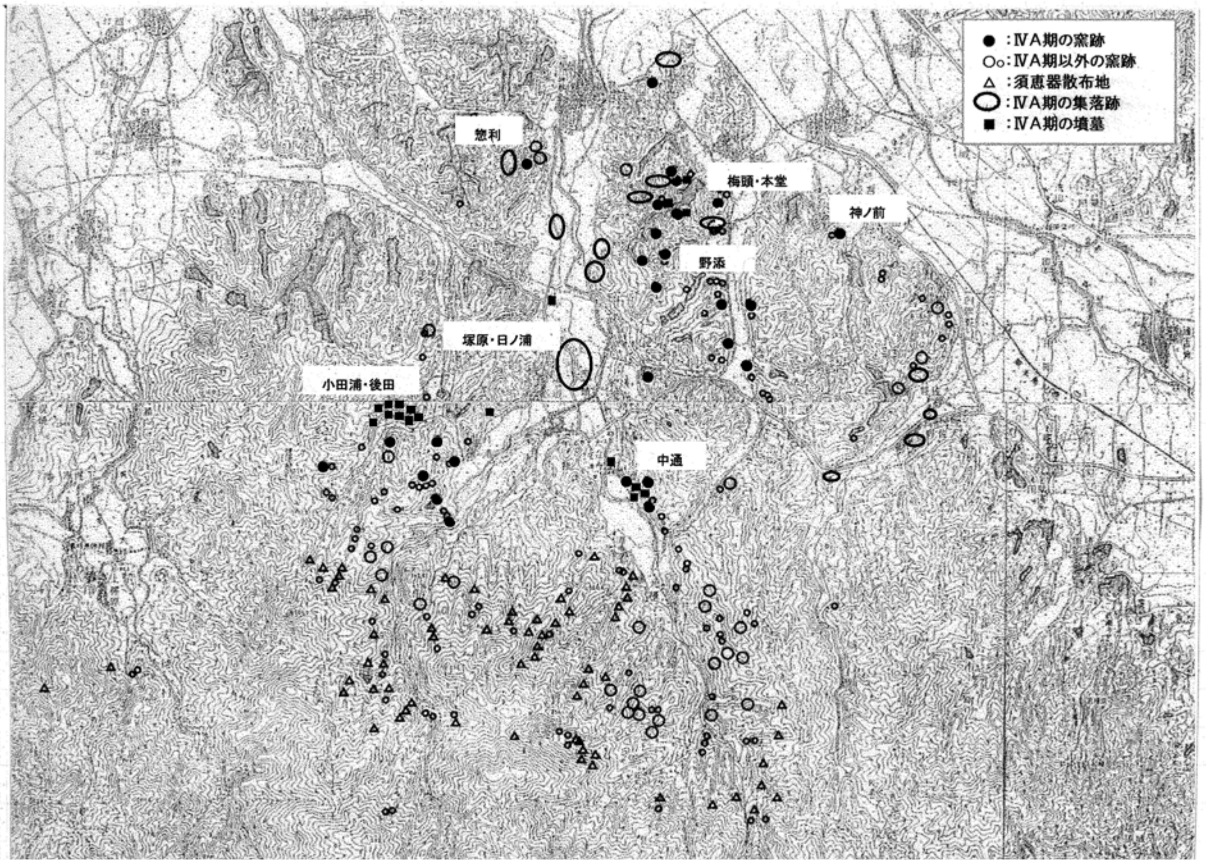


図14　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（６世紀末～７世紀初頭）

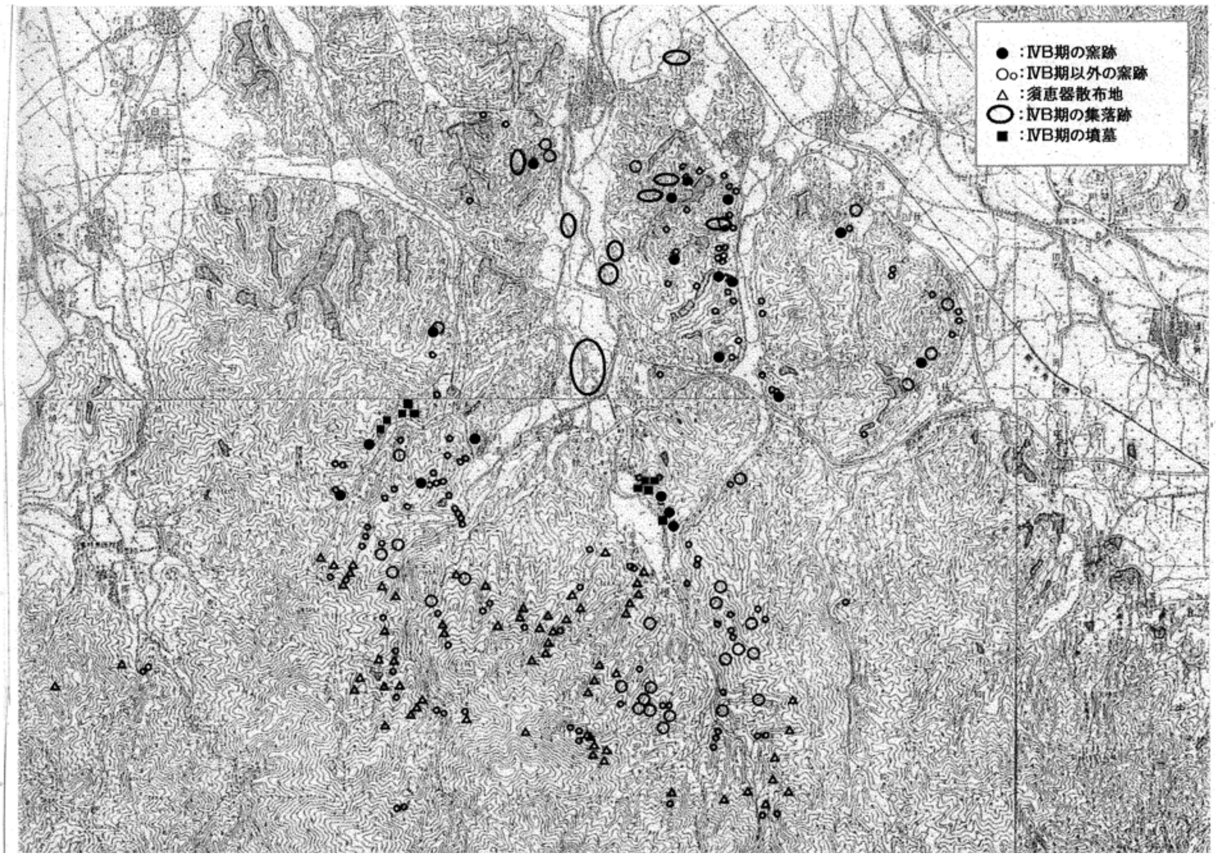


図15　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（７世紀前半）

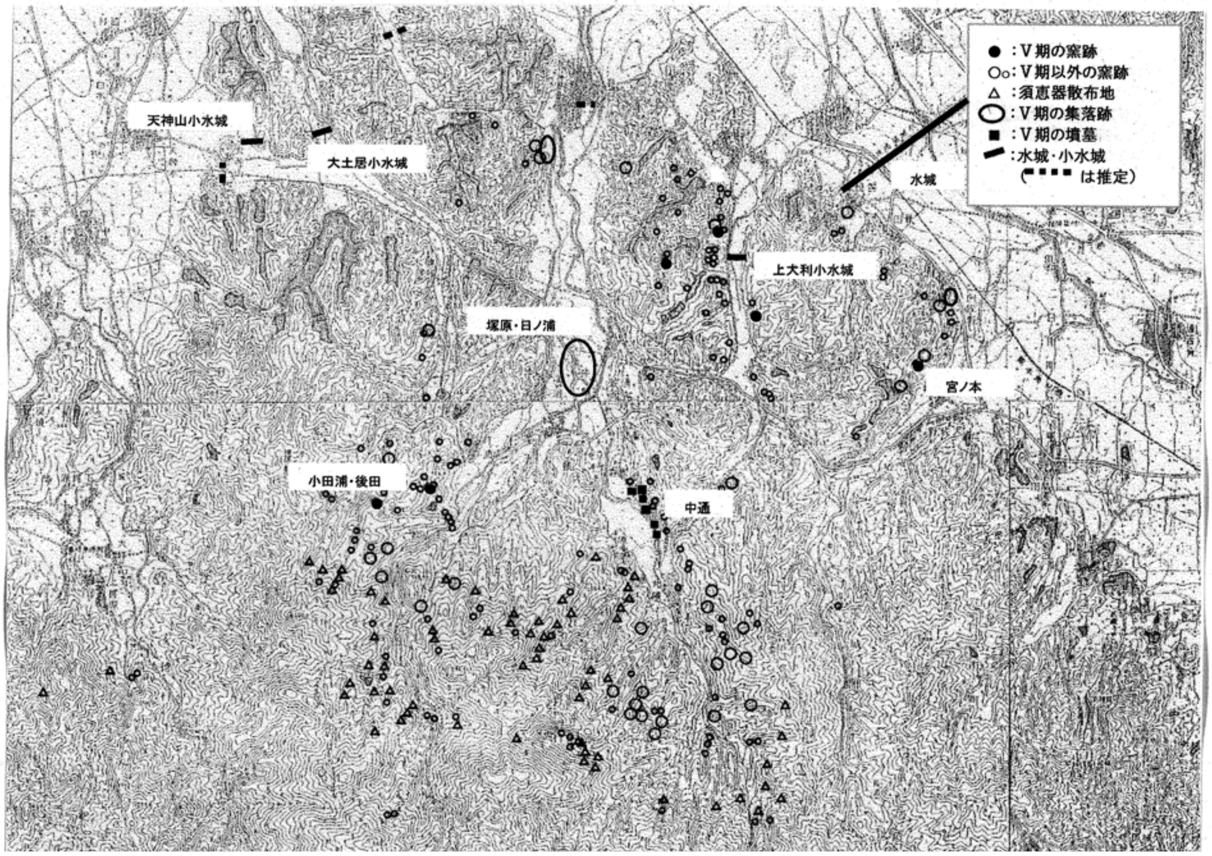


図16　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（７世紀中頃）

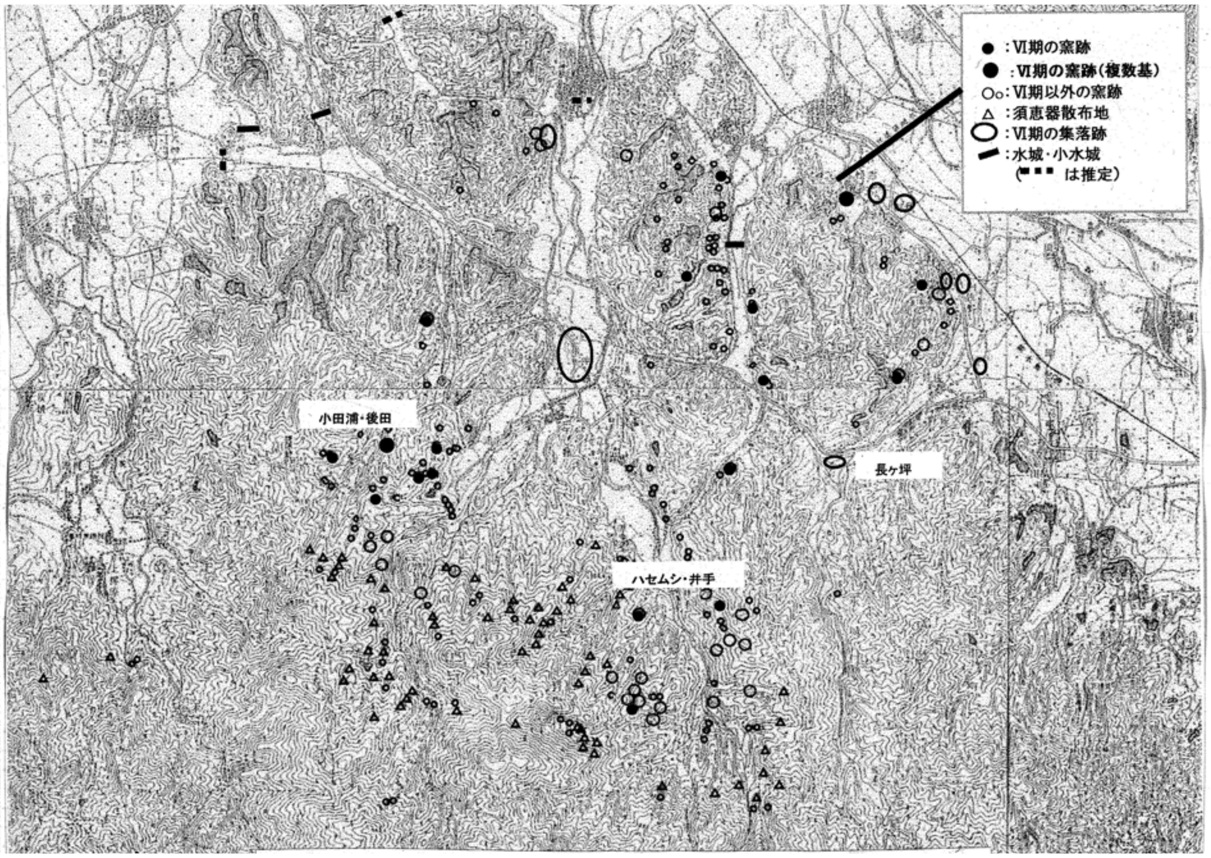


図17　牛頸窯跡群窯跡・集落跡・古墳分布図（７世紀後半）

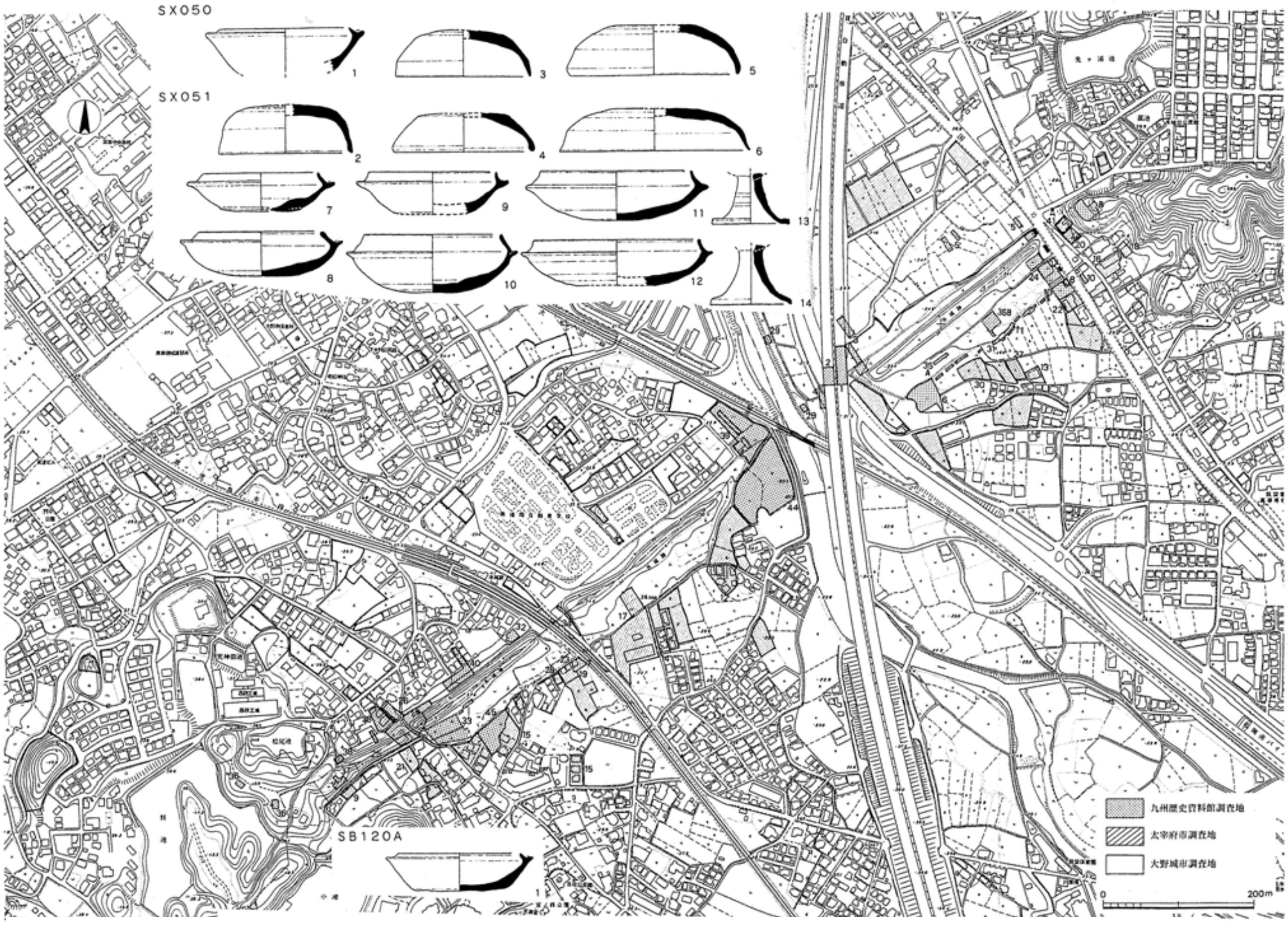


図18　水城跡西門跡SB120A・木樋SX050・051出土遺物（S=1/6）

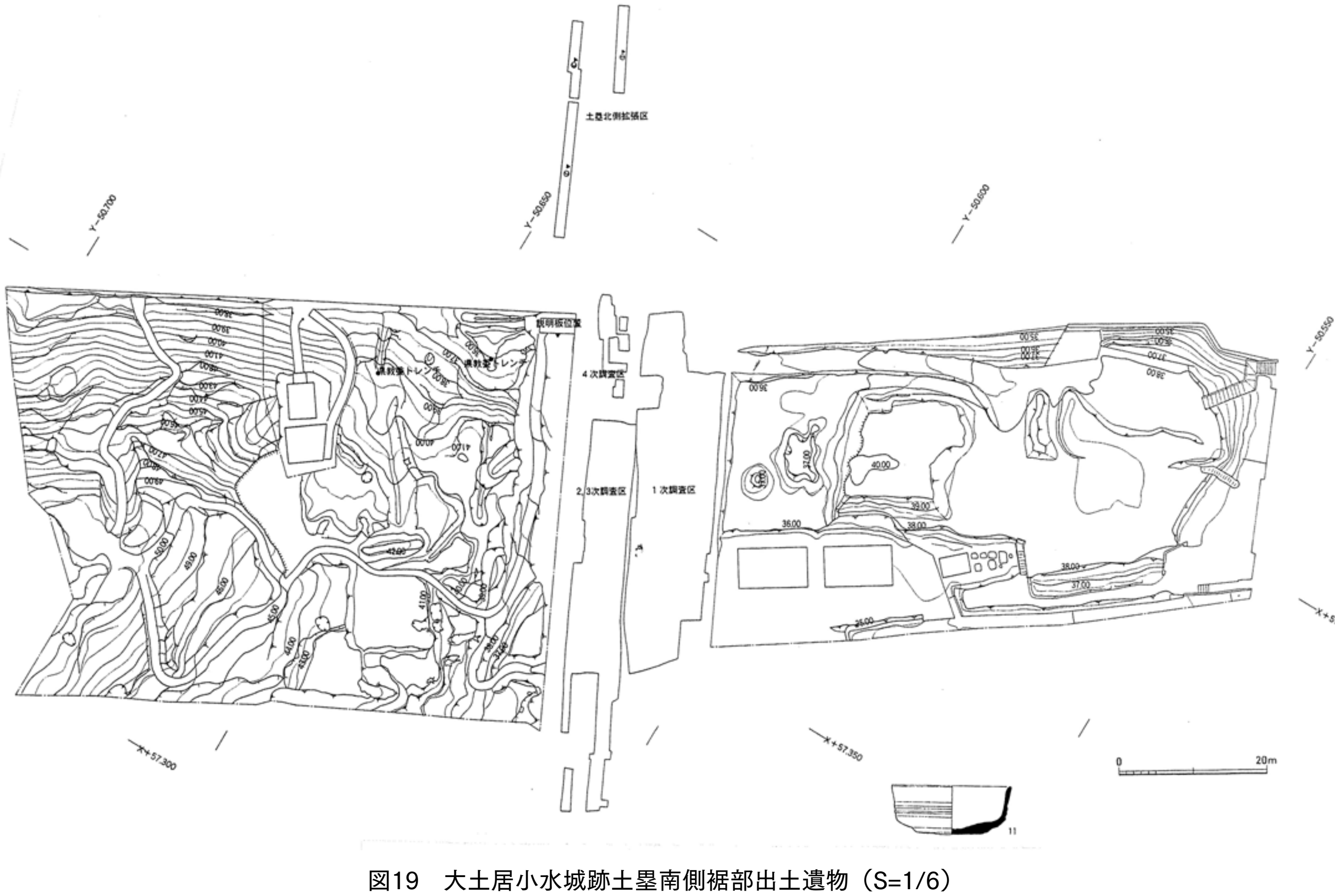


図19　大土居小水城跡土塁南側裾部出土遺物（S=1/6）

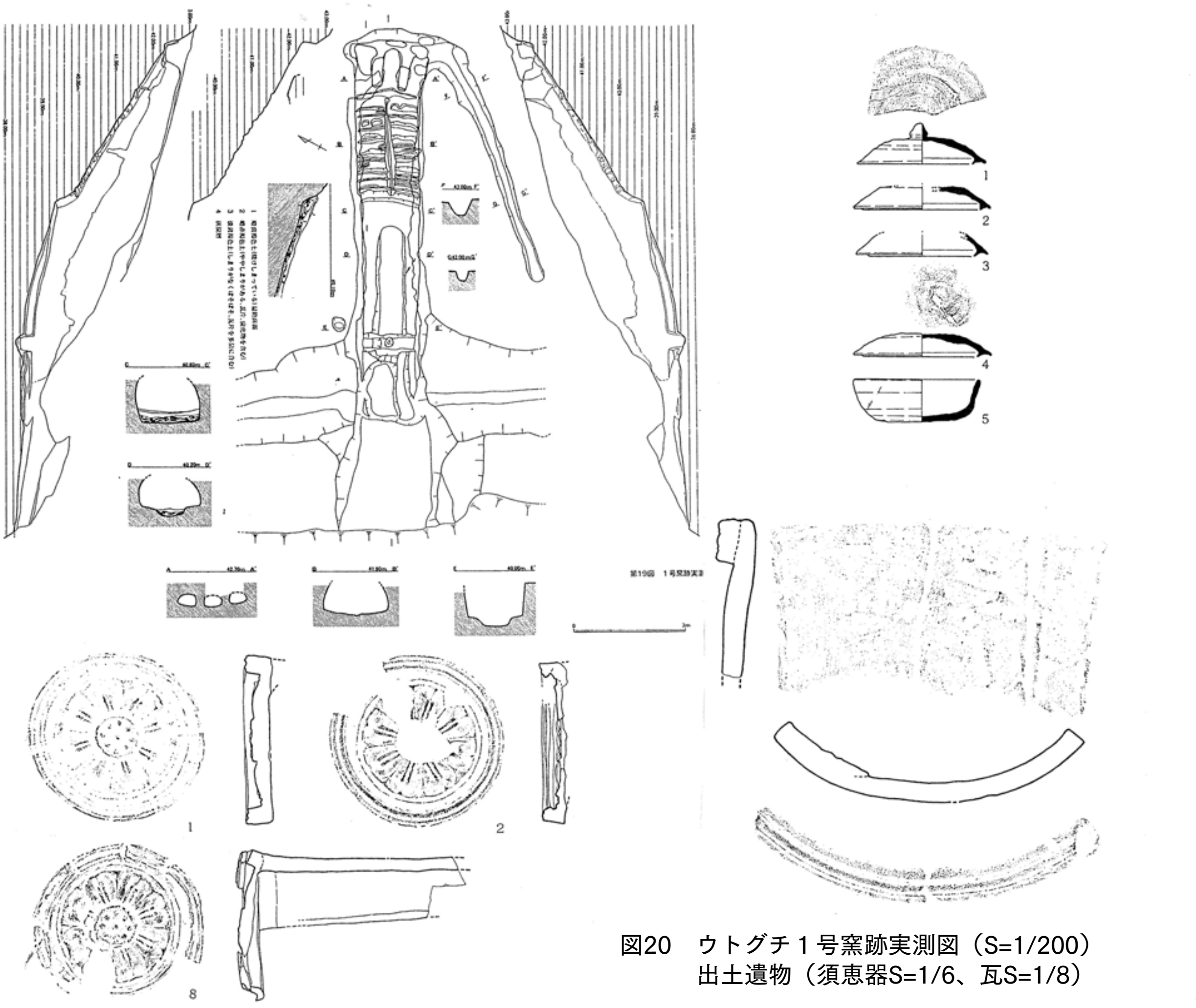


図20　ウトグチ１号窯跡実測図（S=1/200）
出土遺物（須恵器S=1/6、瓦S=1/8）

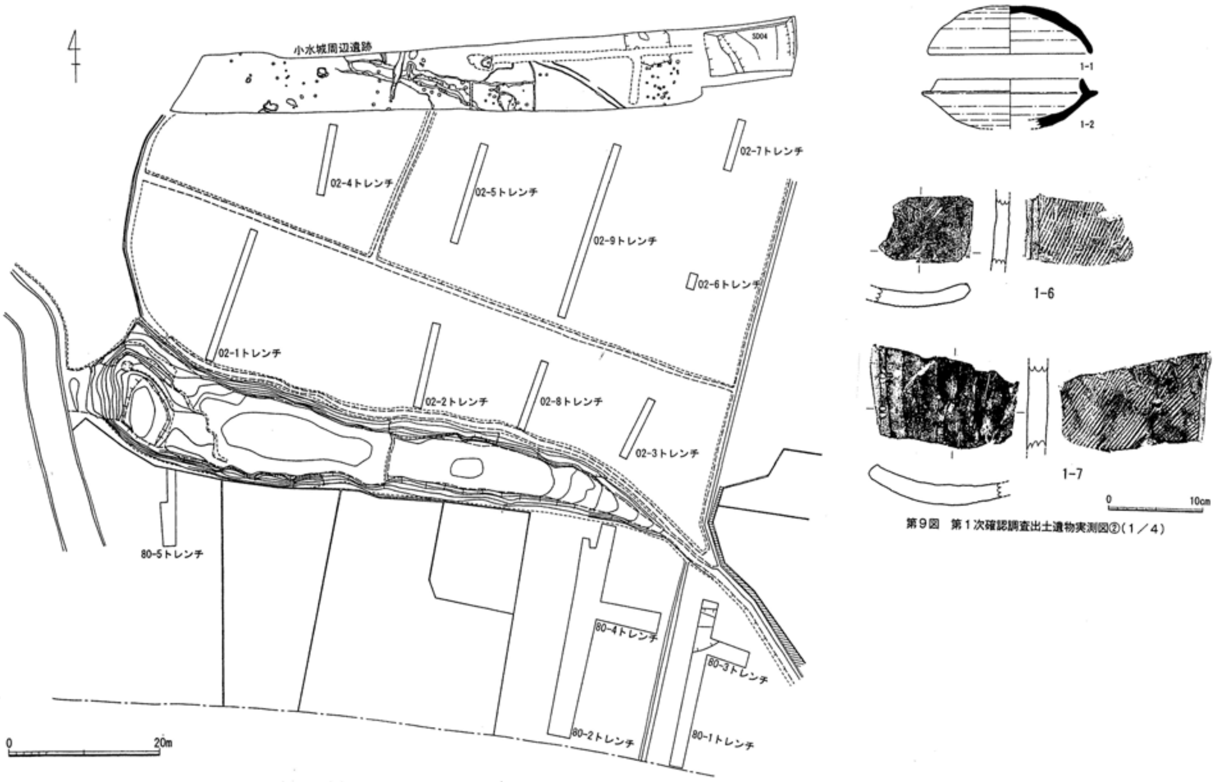


図21　上大利小水城跡出土遺物（須恵器S=1/6、瓦S=1/8）

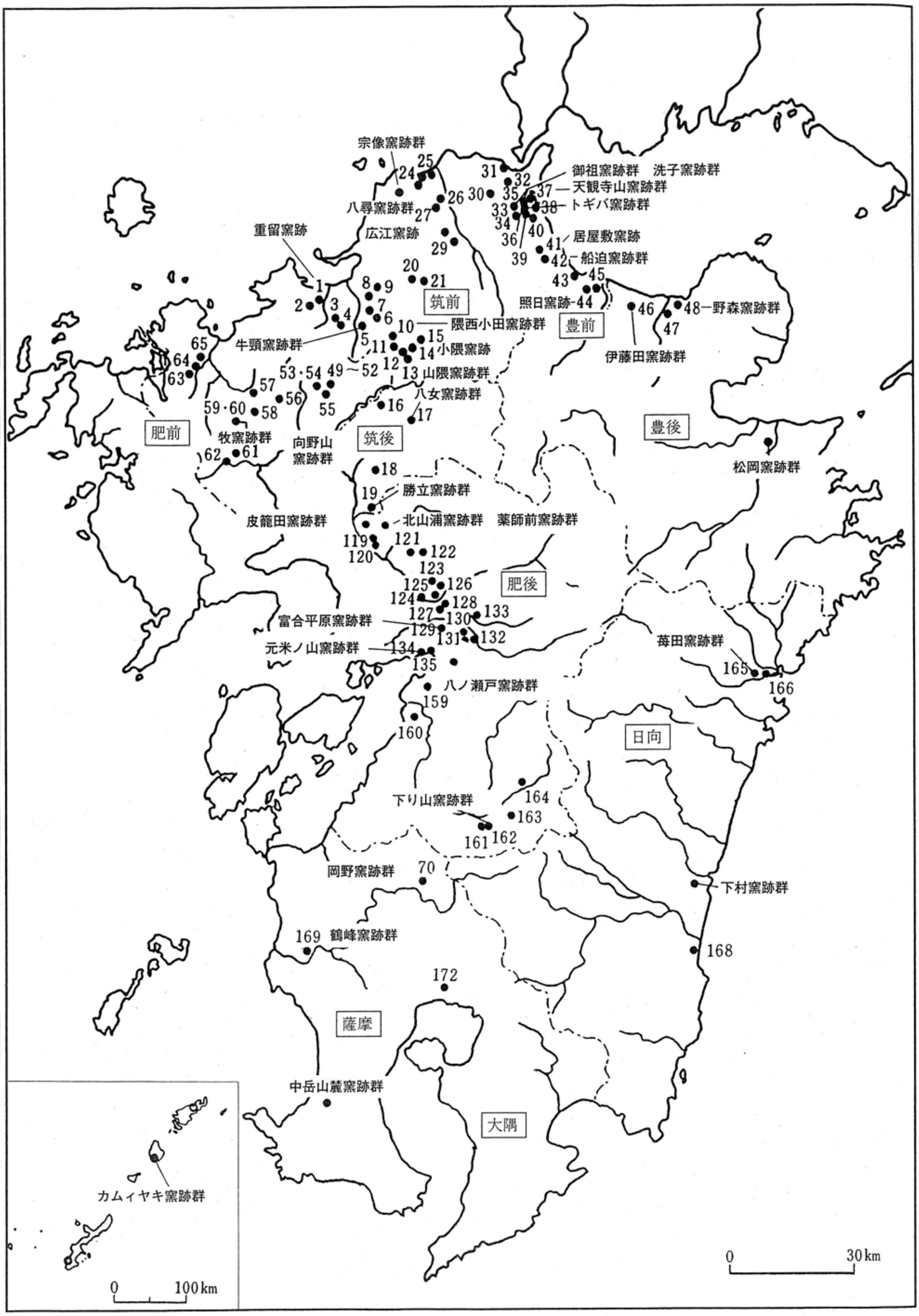
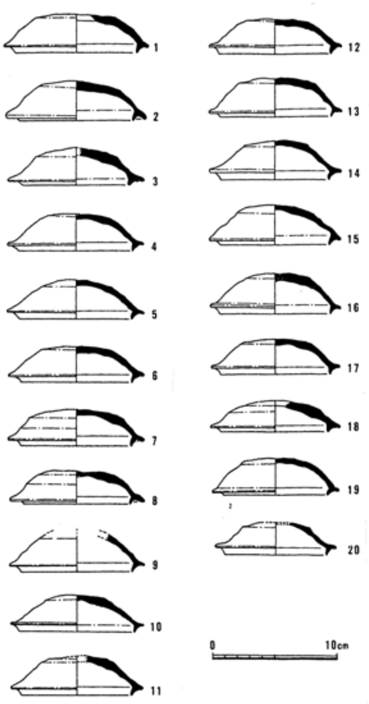


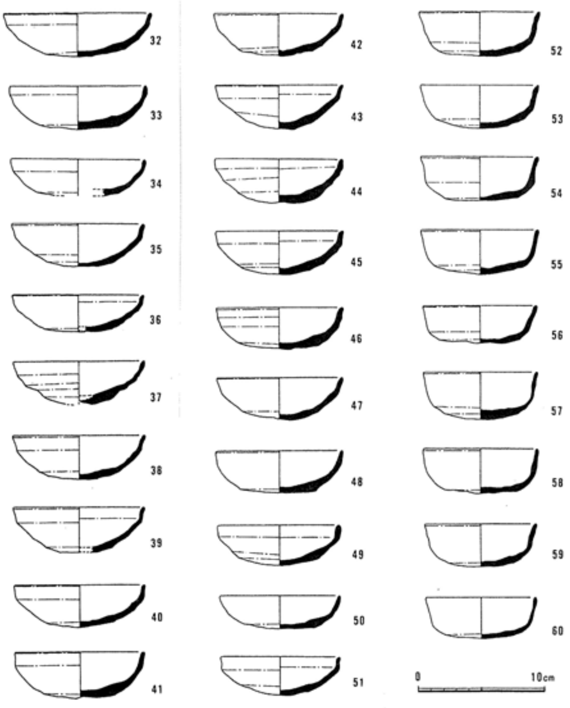
図22　九州の須恵器窯跡分布図

表２　西海道北部の須恵器窯跡群変遷表

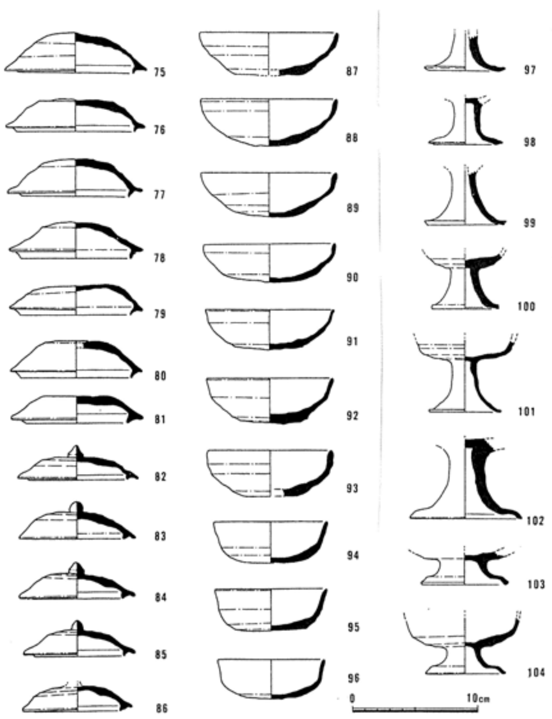
国名	郡名	窯跡群名	5世紀			6世紀			7世紀			8世紀			9世紀		
筑前	怡土郡																
	志麻郡																
	早良郡	新開窯跡		■	■												
		重留窯跡			■	■											
		中島窯跡群					■	■									
	那珂郡	牛頸須恵器窯跡					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
		地別当窯跡群										■					
	席田郡																
	糟屋郡	岩長浦窯跡群					■	■									
		若杉今里窯跡						■	■								
	宗像郡	稲元日焼原窯跡群・三郎丸			■	■	■	■	■	▒							
	遠賀郡	野間窯跡群						■	■								
	鞍手郡	古門窯跡群						■	■								
		広江・八尋・宮崎窯跡群											■	■	■		
	嘉麻郡																
	穂波郡	井手ヶ浦窯跡群					■	■	■	■	■						
	夜須郡	小隈・山隈・八並窯跡群	■	■	■												
	下座郡																
	上座郡																
	御笠郡	隈西小田窯跡群	■	■													
		乙金窯跡群					■	■									
		雉子ヶ尾・裏ノ田窯跡群					■	■	■	■							
筑後	御原郡	苅又窯跡群						■	■								
	生葉郡																
	竹野郡																
	山本郡																
	御井郡																
	三潴郡																
	上妻郡	八女窯跡群					■	■	■	■	■	■	■	■			
	下妻郡																
	山門郡																
	三池郡	勝立・片平窯跡群												■	■		
豊前	田河郡	天郷窯跡・号四郎窯跡															
	企救郡	水晶山系窯跡群						■	■	■				■			
	京都郡	向野山・殿川窯跡群						■	■				■	■			
		荘原池窯跡群						■	■								
	仲津郡	居屋敷窯跡		■													
	築城郡	船迫窯跡群						■	■								
	上毛郡	山田・照日窯跡群					■	■			■	■					
		四郎丸窯跡群									■	■					
	下毛郡	伊藤田窯跡群						■	■	■	■			■			
	宇佐郡	野森窯跡群・新池窯跡群							■		■	▒					
豊後	日高郡																
	球珠郡																
	直入郡																
	大野郡																
	海部郡																
	大分郡	松岡窯跡群											■	■			
	速見郡																
	国東郡																
肥前	基肄郡																
	養父郡																
	三根郡																
	神崎郡																
	佐嘉郡	神籠池窯跡			■												
		不動滝窯跡群															
	小城郡																
	藤津郡	光武窯跡群・高月窯跡群												■			
	杵島郡	向野山窯跡群									■	■	■				
		牧窯跡群													■	■	
	松浦郡																
	彼杵郡																
	高来郡																
肥後	玉名郡	荒尾窯跡群						■	■					■	■		■
	山鹿郡																
	菊池郡																
	阿蘇郡																
	益城郡	宇城窯跡群										■	■	■	■	■	■
	合志郡																
	山本郡	鈴麦窯跡群												■	■		
	飽田郡																
	託麻郡																
	宇土郡	宇城窯跡群						■	■	■	■						
	八代郡																
	天草郡																
	葦北郡																
	球磨郡	下り山窯跡群											■	■	■		



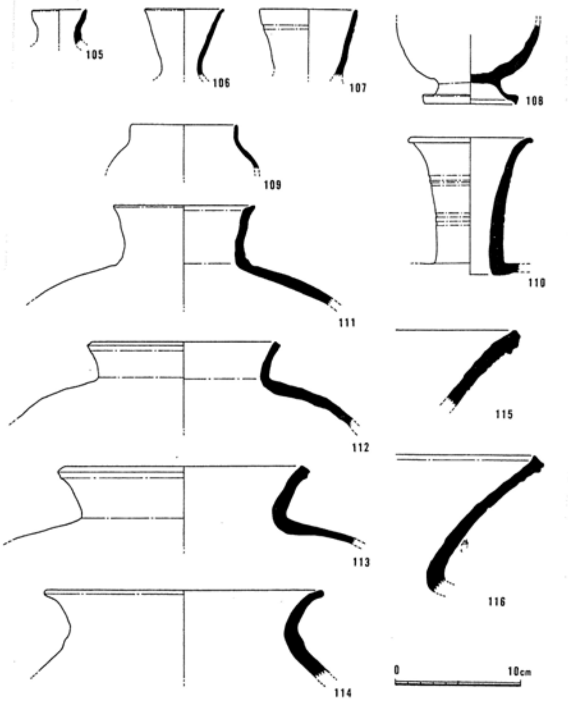
第36図　50―Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（1/3）



第37図　50―Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（1/3）



第39図　50地点灰原出土遺物実測図①（1/3）



第40図　50地点灰原出土遺物実測図②（1/3）

図23　小田浦50-Ⅰ号窯跡出土遺物（S=1/6）

第3章

西海道南部の土器生産

松﨑　大嗣

はじめに

九州南部の弥生時代終末～平安時代までの土器は一般的に「成川式土器」と呼ばれている（中村1987・2013）。成川式土器の特徴として、突帯をもつ甕や壺、脚台を持つ甕や鉢、丹塗が施される高杯や坩などが知られており、弥生時代の伝統を強く保持する点があげられる。

1980年代後半までは、成川式土器の下限は古墳時代後期におさまると考えられており、成川式土器が使用されなくなった後は古代の土器様式へ移行すると言われてきた（平田1979）。しかし、その後の発掘調査によって古代の須恵器との共伴例や降下テフラをもとにした土器の年代推定によって、成川式土器は８世紀代まで存続することが確実となった（下山1992）。近年では、指宿市の敷領遺跡で貞観16年（874年）の開聞岳噴火によって倒壊した建物跡の調査によって、建物内から多くの土器が確認された。詳細は後述するが、この調査によって９世紀後半まで成川式土器の伝統が存続することが判明している。

以上のように、九州南部の７世紀から９世紀の土器を検討する上で、成川式土器の下限と古代の土師器との関係性や年代的な位置づけは大きな課題となっている。そこで本論では、これまでの成川式土器の研究や近年確認された遺跡等をもとに、九州南部の当該期の土器について検討を行いたい。

１．成川式土器の研究

（１）大正年間～ 1960年代

成川式土器の本格的な研究は、大正年間の橋牟礼川遺跡の発掘調査を嚆矢とする。1918年、揖宿郡揖宿村土器包蔵地（現在の橋牟礼川遺跡）において京都帝國大学による発掘調査が行われた（濱田1921）。濱田耕作は、火山灰層を挟んで、下層より出土した土器を「貝塚土器（アイヌ式土器）」、上層より出土した土器を「所謂、彌生式土器と称するものの系統に属するもの」（濱田1921：p.34）とし、それぞれの層位に対応する形で「指宿上層式土器」を弥生土器、「指宿下層式土器」を縄文土器として位置づけた。この際、「指宿上層式土器」として位置づけられた土器は、現在の成川式土器と呼ばれる土器様式に属するものであった。

その後、指宿上層式土器は「南九州C様式（小林1938）」、「薩摩式土器（寺師1950）」、「３・４様式（河口1952）」、「第Ⅴ様式（河口1964）」といった名称で呼ばれ、九州南部の弥生時代後期の土器様式として位置づけられてきた。

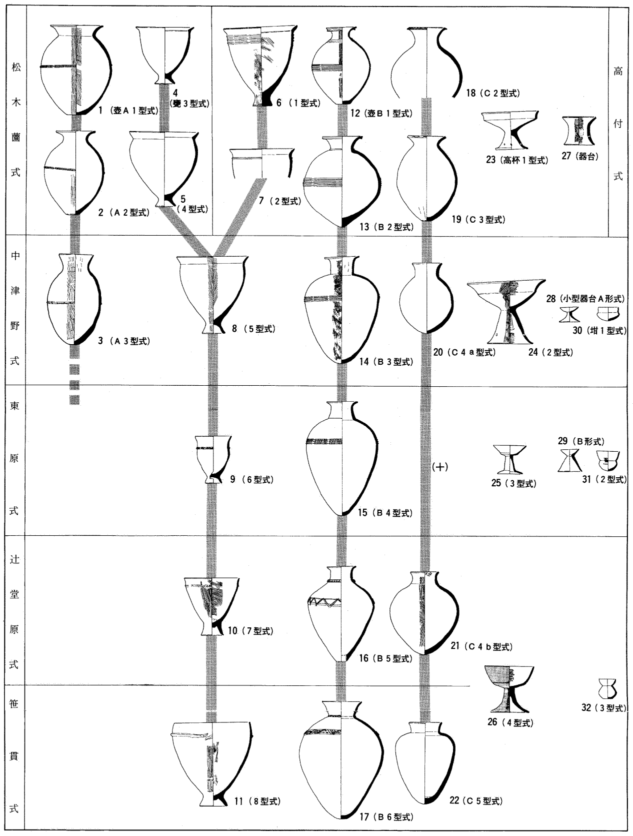
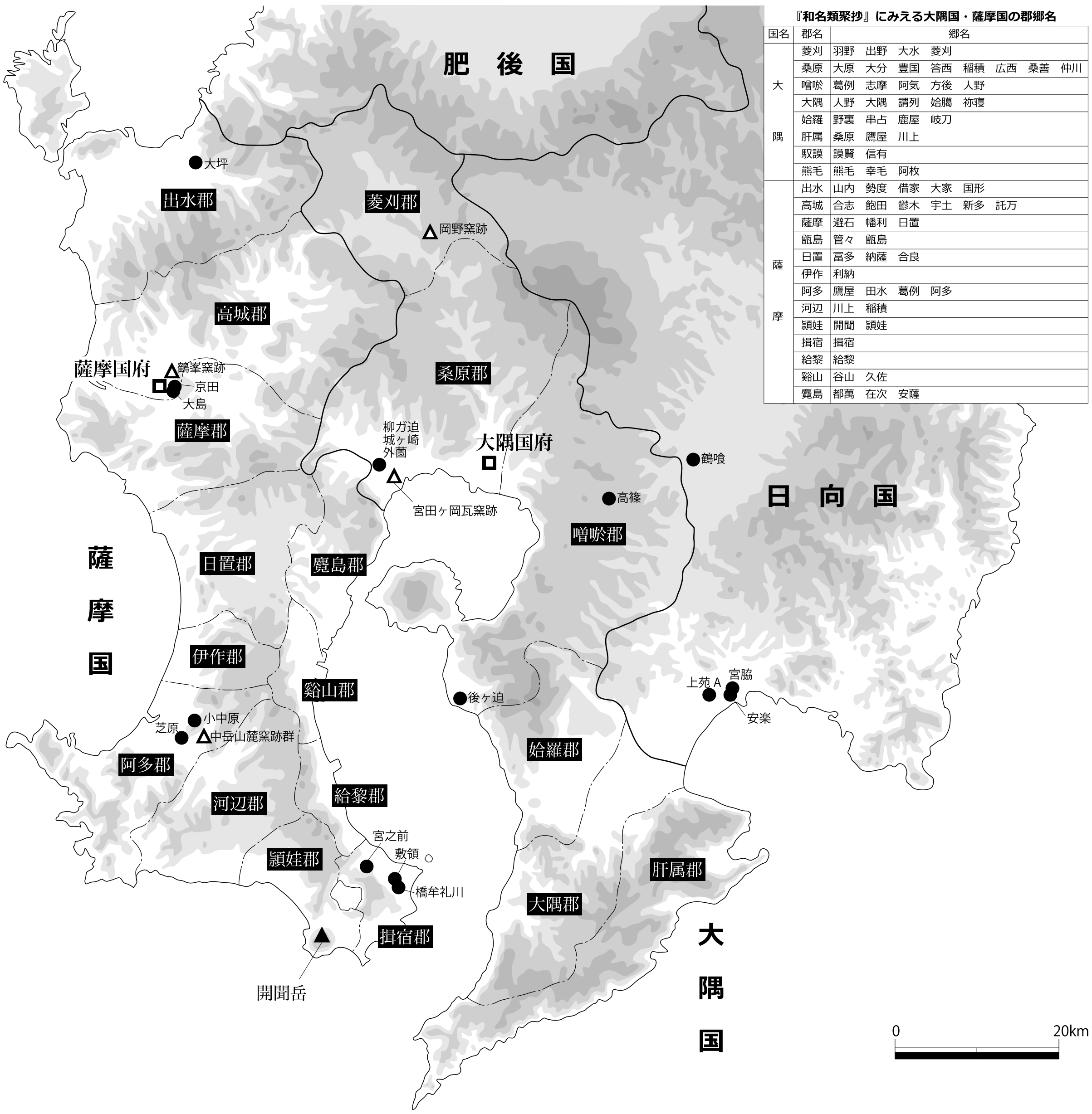


図１　成川式土器編年図（中村1987）



『和名類聚抄』にみえる大隅国・薩摩国の郡郷名

国名	郡名	郷名
大隅	菱刈	羽野　出野　大水　菱刈
	桑原	大原　大分　豊国　答西　稲積　広西　桑善　仲川
	噌唹	葛例　志摩　阿気　方後　人野
	大隅	人野　大隅　謂列　姶臈　祢寝
	始羅	野裏　串占　鹿屋　岐刀
	肝属	桑原　鷹屋　川上
	馭謨	謨賢　信有
	熊毛	熊毛　幸毛　阿枚
薩摩	出水	山内　勢度　借家　大家　国形
	高城	合志　飽田　鬱木　宇土　新多　託万
	薩摩	避石　幡利　日置
	甑島	管々　甑島
	日置	冨多　納薩　合良
	伊作	利納
	阿多	鷹屋　田水　葛例　阿多
	河辺	川上　稲積
	頴娃	開聞　頴娃
	揖宿	揖宿
	給黎	給黎
	谿山	谷山　久佐
	麑島	都萬　在次　安薩

図２　本論で対象とする遺跡

（２）成川遺跡の調査

成川式土器は弥生時代に属する土器様式であるという評価が一般的な中、成川式土器の標識遺跡である成川遺跡の発掘調査が行われた（河口ほか1958，文化庁1974）。当遺跡からは多くの立石土壙墓・土壙墓が検出され、計233体の人骨が出土した。また、墓に供献された土器も多量に出土した。出土した土器は第Ⅰ類から第Ⅴ類まで分類されたが、その大半は第Ⅳ類土器であり、従来指宿上層式土器と呼ばれてきた土器群であった。河口貞徳は、この第Ⅳ類土器について、「この種の土器に対して、我々は従来指宿上層式土器と称していたが、指宿下層式土器である縄文式土器を、単に指宿式土器と称するようになったので、本形式土器を改めて成川式土器と呼ぶことにしたい」（河口1974：p.66）と述べている。河口による改称案により、従来使用されてきた「指宿上層式土器」や「薩摩式土器」、「南九州Ｃ様式」などは、成川遺跡を標識遺跡として「成川式土器」と呼ばれるようになった。

さらに乙益重隆は、共伴する鉄器・鉄製品の年代から「成川遺跡の上層における鉄器・鉄製品はたとえ上限が弥生時代後期末に比定されるとしても、主体をなす遺物の最盛期は、５世紀代の中・後期にあっ

たと考えられ、下限は6世紀前半に及ぶもの。」（乙益1974：p.150）と推定した。この見解は、従来「弥生時代に属する土器」として評価されてきた成川式土器に対して、時期幅をもつ可能性があることを初めて指摘したものとなった。

その後、鹿児島県内において成川式土器と須恵器などの古墳時代に属する遺物が共伴する事例が多く報告されるようなる。これらの発掘調査により、成川式土器は弥生時代後期の土器様式ではなく、古墳時代を主体とする土器様式であるという説が確実なものとなった。その中で、年代的位置づけや細分化をめぐって、1980年代に編年研究が精力的に行われた（平島1977，平田1978，池畑1980，多々良1981，坪根1986）。

多くの編年案が提示された中で、1987年に中村直子によって提示された編年が現在でも多く使用されており、成川式土器の編年研究は一定の枠組みが構築された（中村1987，図1）。中村は中津野式（弥生時代終末から古墳時代初頭）→東原式（古墳時代前期から古墳時代中期前半）→辻堂原式（古墳時代中期後半）→笹貫式（古墳時代後期）という変遷を明らかにし、笹貫式の下限は、須恵器との共伴関係から6世紀前半を想定している。

（3）青コラの降下年代

中村編年の提示により、成川式土器の基本的な枠組みは確立されたかに思われたが、1991年に行われた指宿市橋牟礼川遺跡の調査により、その下限に対して問題点が浮上する。これまで指宿地域の遺跡では、開聞岳を給源とするテフラが認められ、遺跡の年代を決める上で重要な鍵層とされてきた。中でも「青コラ（Km11）」と呼ばれる青灰色の火山灰層は、成川式土器の中でも最終段階に位置づけられる笹貫式の土器を被覆することで知られ、中村編年をもとに5～6世紀代に降下したと考えられていた（下山1990）。

しかし、1991年の発掘調査において、青コラに被覆されるかたちで須恵器台付長頸壺が出土した（図3）。下山は「一次降下物は、堆積後の攪乱を受けていないため、頸部下にはフォール・ユニットが明瞭に観察された。また、壺内部には、同様に、一次堆積物がフォール・ユニットを形成し、その後、ラミナが認められる火山噴出物の二次堆積層が壺内、外部に堆積していた。」（下山1992：p.69）と報告しており、出土状況から青コラ降下時点では、台付長頸壺は若干傾きながらも立っていた可能性を指摘した（下山1992）。この須恵器は中村浩による編年のⅢ型式3段階からⅣ型式1段階に位置づけられることから、7世紀後半から8世紀初頭の年代が想定された。これらの新見解により、青コラ直下から出土する成川式土器は7世紀後半まで下ることが想定されるようになる。

その後、1992年に行われた橋牟礼川遺跡の発掘調査において、成川式土器の下限はさらに下る。青コラの上位から掘り込まれた4基の竪穴住居が検出されたのである（下山ほか1996）。これらの住居には方形、円形の2種類のプランがあり、床中央部に炉をもつ。出土遺物としては、2号住居内から笹貫式の甕・鉢・須恵器の甕、軽石製品が、4号住居からは笹貫式の甕・鉢・壺・高杯、須恵器の杯蓋、甕が出土している（図4）。この調査により、少なくとも青コラ降下後の8世紀代まで成川式土器の伝統が継承されていたことが明らかとなった。一方、下山は「橋牟礼川遺跡出土の資料だけで、「成川式土器」の存続幅を一律に決定することは不可能である。」（下山1992：p.67）とし、成川式土器の終焉には地域差があることを指摘した。

以上のように、成川式土器の下限に関して再考を促す資料が提示されたが、指宿地域だけにみられる事例であったことから、成川式土器の下限に関する議論には限界があった。その後の研究は、成川式土器の年代的な位置づけだけでなく、他地域の土器様式の器種構成や土器製作技術の比較を論じるものが多くなる（相美2004，中村1999・2004）。また、成川式土器を検討する際に重要となる「小地域色」に着目した編年も提示されている（鎌田2009・2014）。

中村直子は、成川式土器と土師器を製作技術・器種組成などの面から比較し、北薩地域・肝属平野・

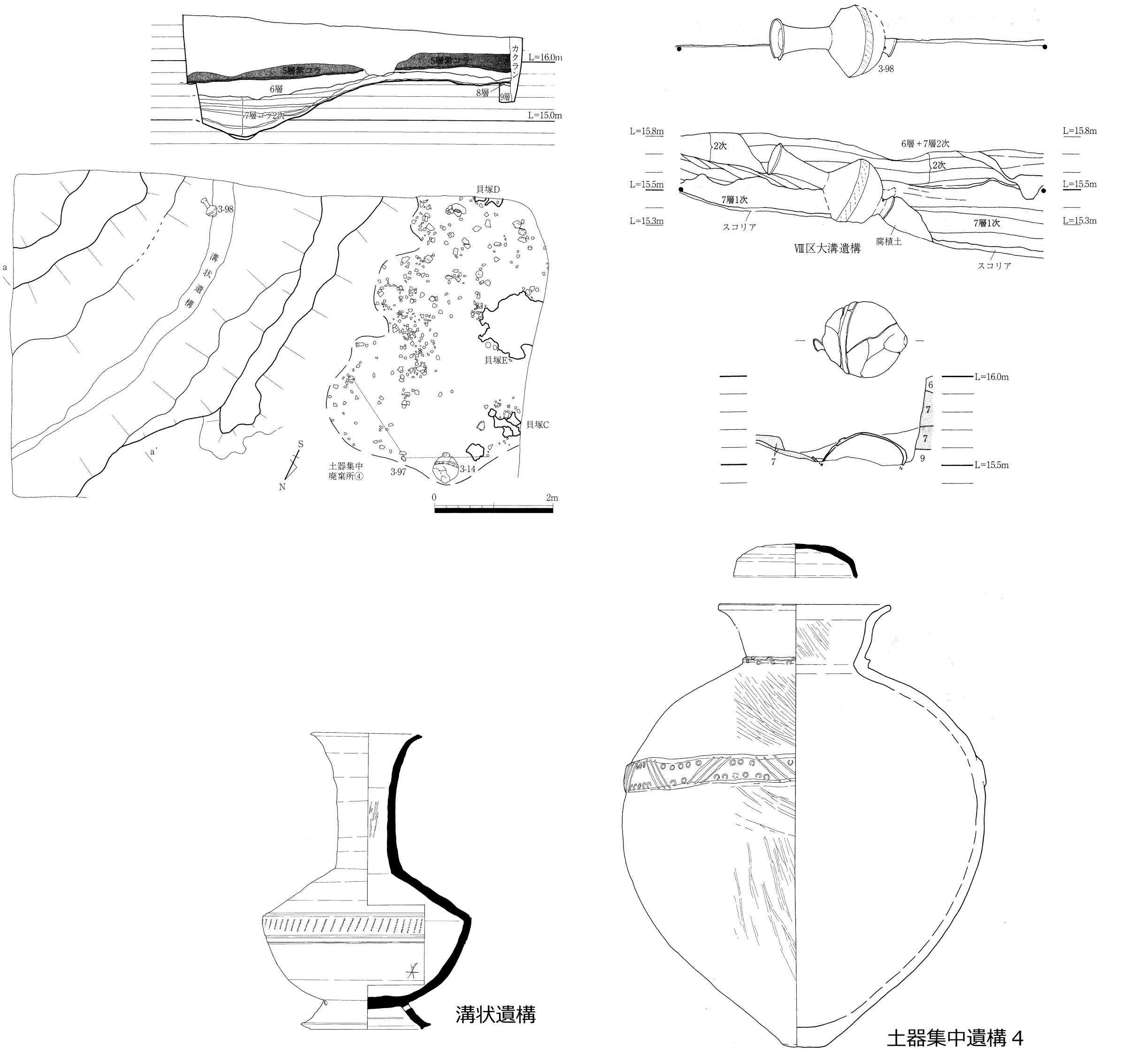
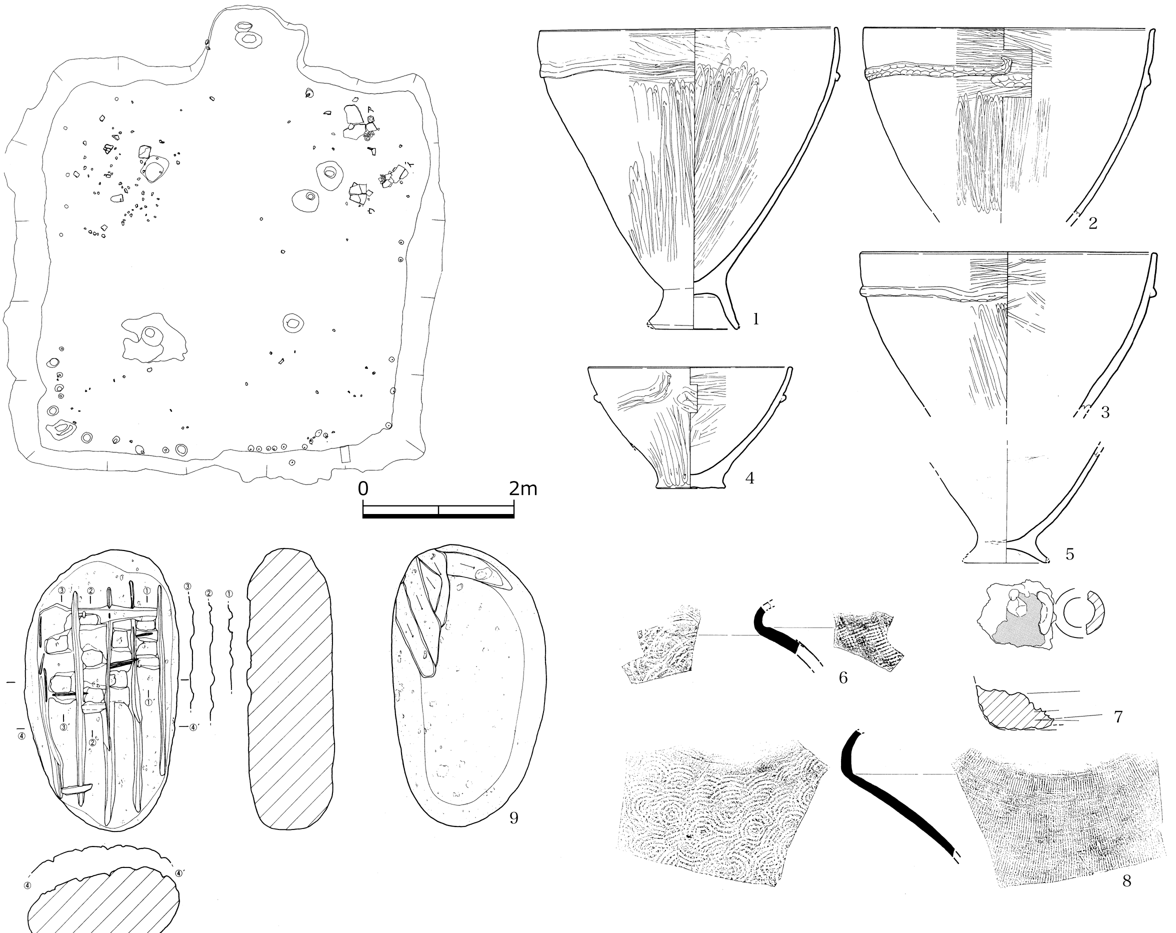


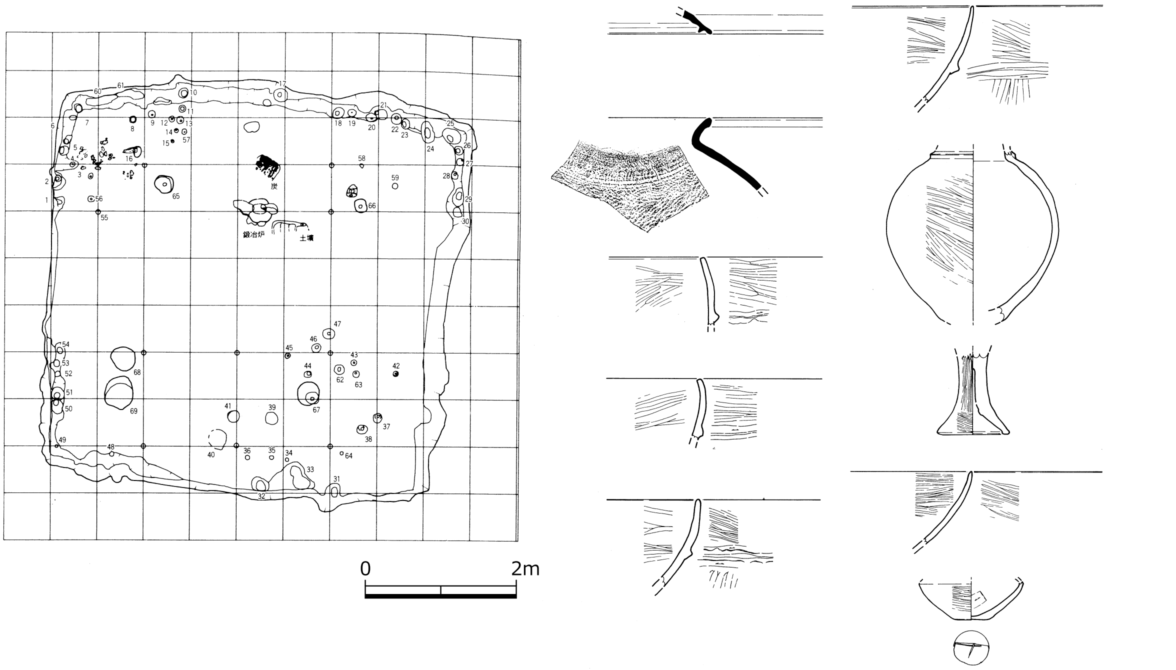
図３　橋牟礼川遺跡溝状遺構周辺遺物

都城盆地においては折衷甕・杯が存在するが、薩摩半島・鹿児島湾沿岸部では地域性の強い様相が認められると論じた（中村2004）。相美伊久雄は南九州を地勢的特徴から区分し、それぞれの地域における成川式土器の器種組成を通時的に分析した。分析の結果、辻堂原期において杯が川内平野、肝属平野、都城盆地、加久藤・小林盆地などで新器種として加わり、笹貫期に入ると薩摩半島西岸域や鹿児島湾奥でもわずかに認められるようになるが、薩摩半島東岸域では認められないことを明らかにした（相美2004）。このような地域差が生まれる要因として、中村は古墳の築造域・非築造域という違いから生じる生活様式の差異（竃・須恵器が導入されないなど）が反映されていると考えた（中村ibid.）。

他地域の土器との関係性が通時的な分析によって明らかになっていく中で、南九州で７・８世紀に位置づけられる集落の発掘調査事例も増加してきた。特に年代比定が可能な須恵器と共伴関係にある資料が増加したことは大きな成果である。新たな調査によって資料が蓄積される一方、笹貫式の下限が８世紀代まで下るということから、笹貫式の年代幅が６世紀から８世紀までの長期にわたるという問題点も浮上する。笹貫式（特に編年の指標となっている甕）は器形の変化が緩慢であることから（吉本2006）、笹貫式を区分するためには土器の形態だけでなく、他の属性に着目する必要があった。

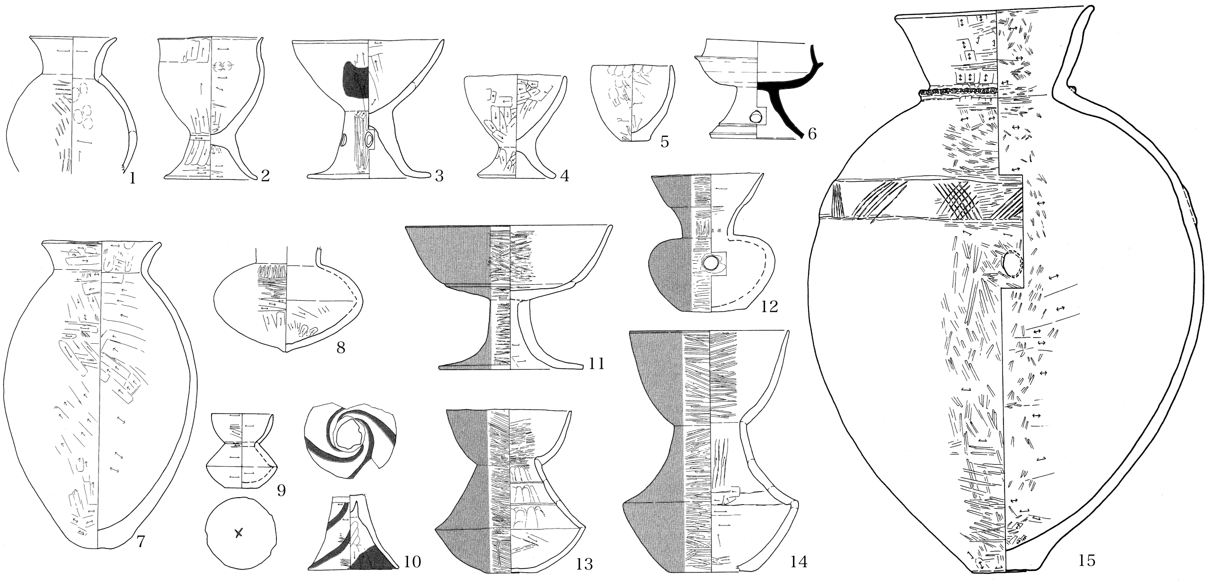


橋牟礼川遺跡２号住居跡

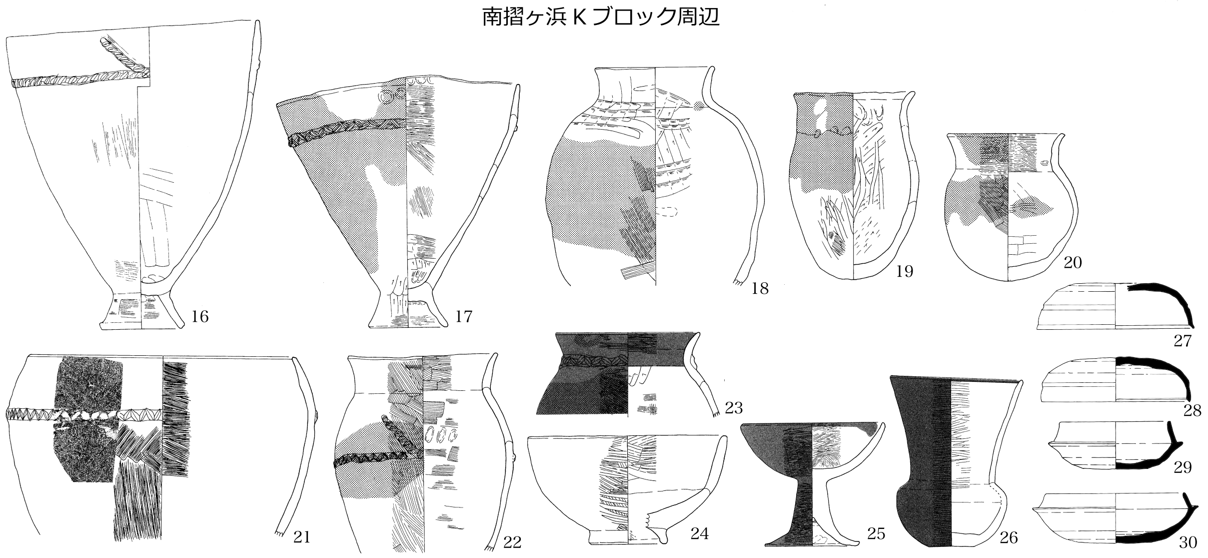


橋牟礼川遺跡４号住居跡

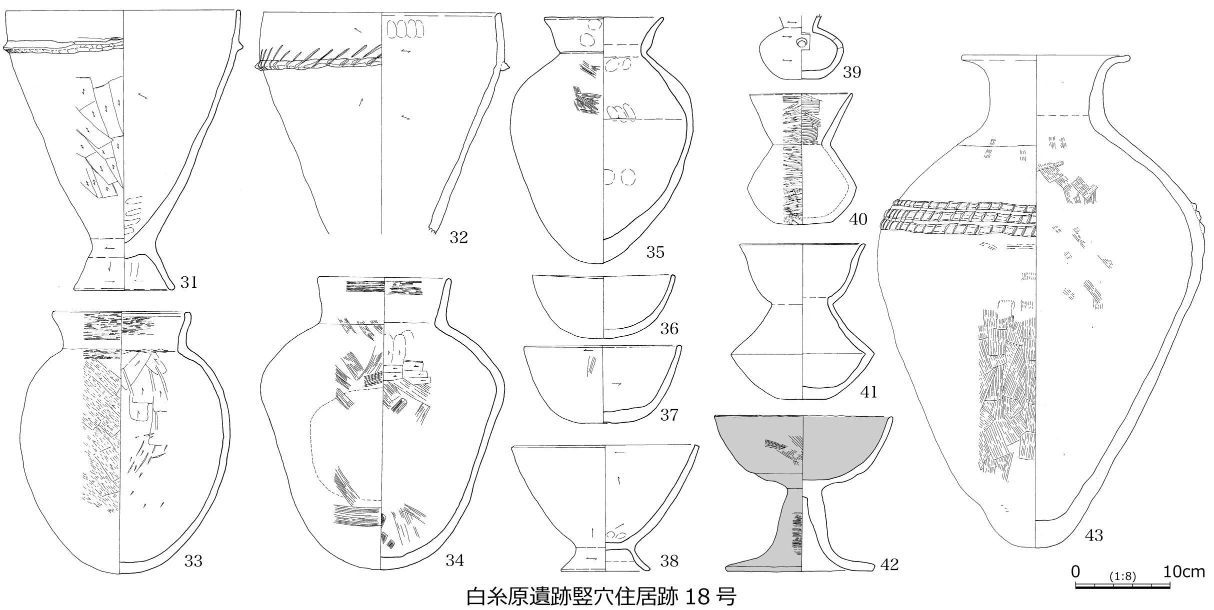
図４　橋牟礼川遺跡　青コラ上位から掘り込んだ住居



南摺ヶ浜Kブロック周辺

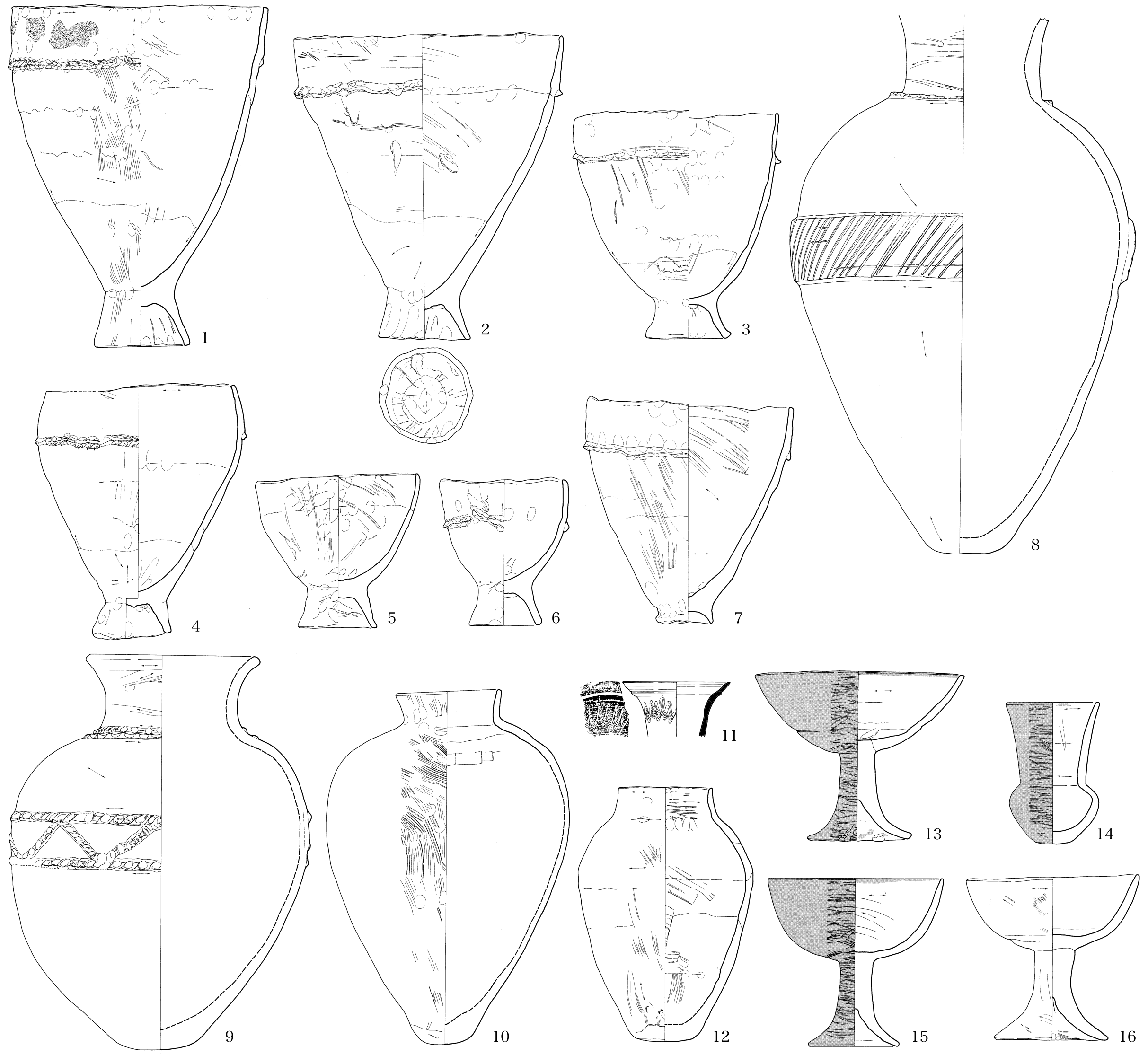


尾ヶ原4号竪穴住居跡

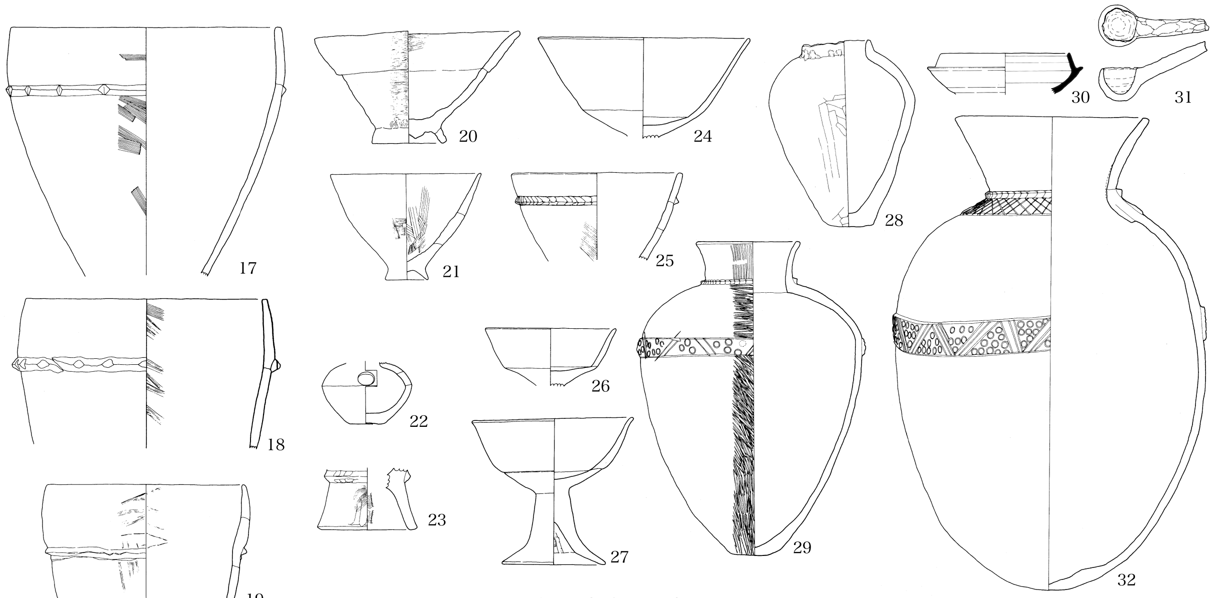


白糸原遺跡竪穴住居跡18号

図5　笹貫式古段階の土器（1）



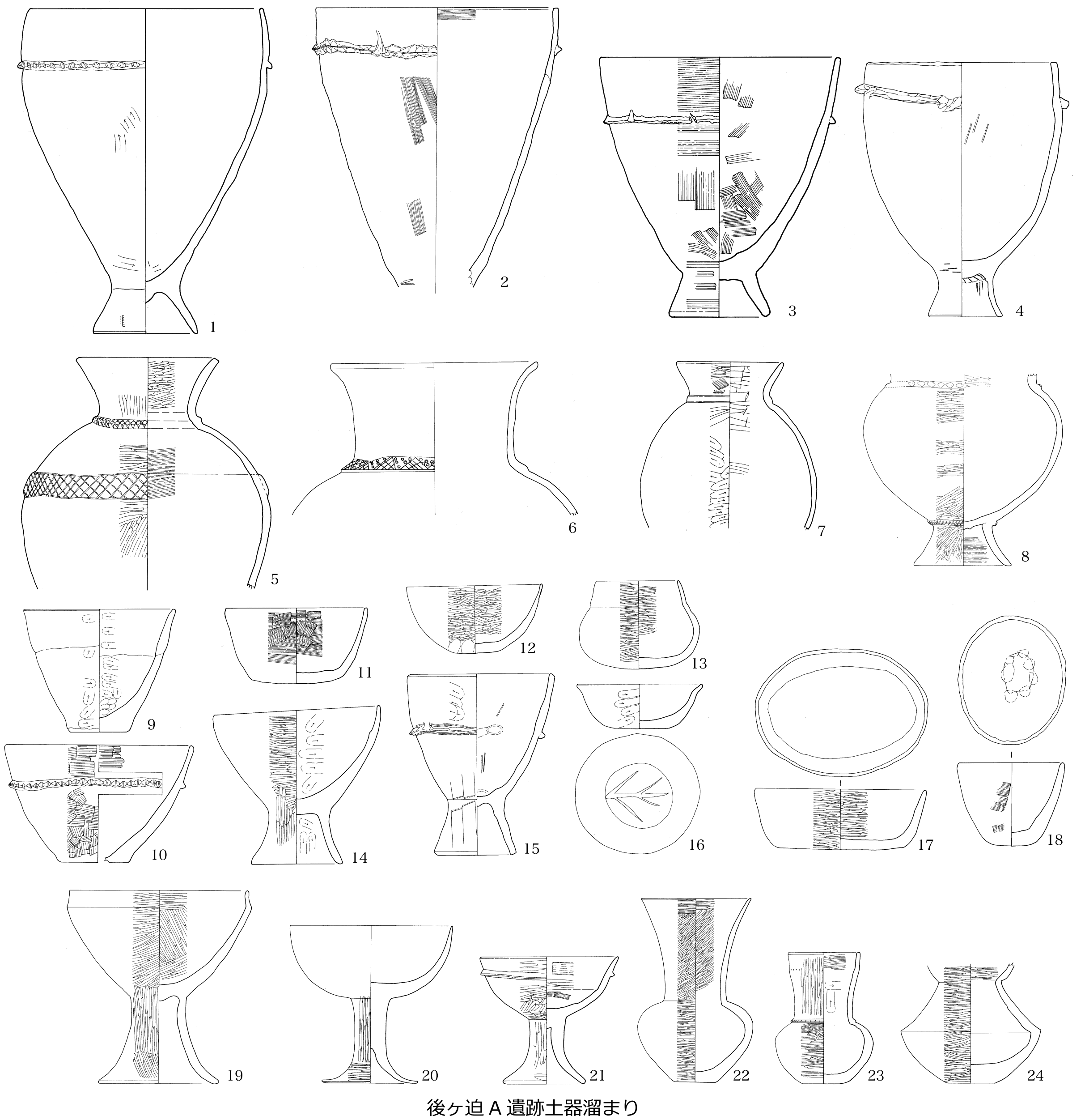
鹿児島大学校内遺跡 SD4



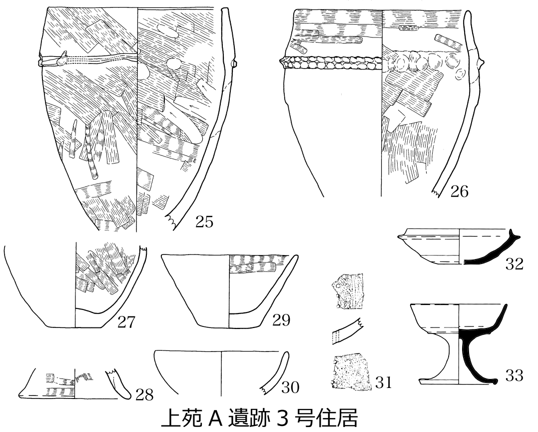
西船子遺跡溝状遺構

0 (1:8) 10cm

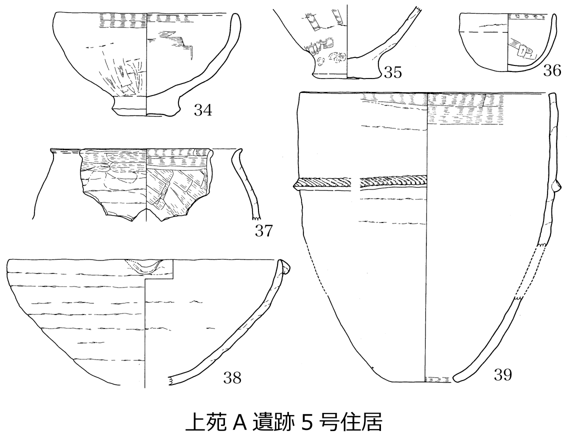
図６　笹貫式古段階の土器（２）



後ヶ迫Ａ遺跡土器溜まり



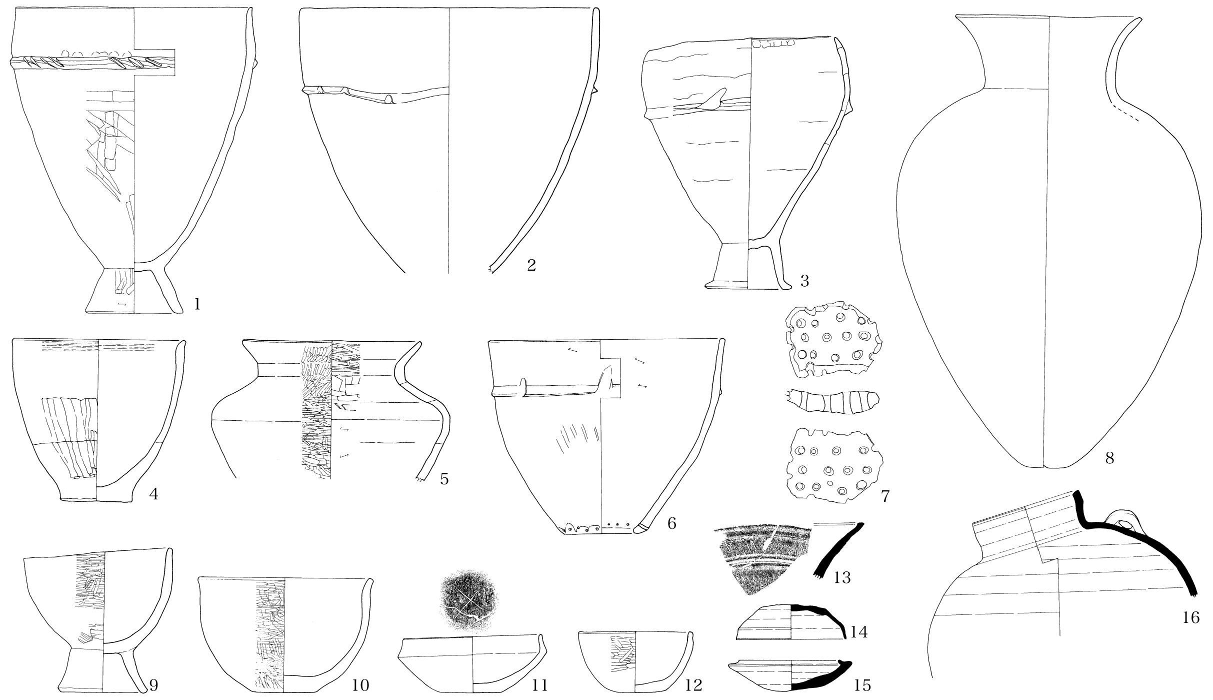
上苑Ａ遺跡３号住居



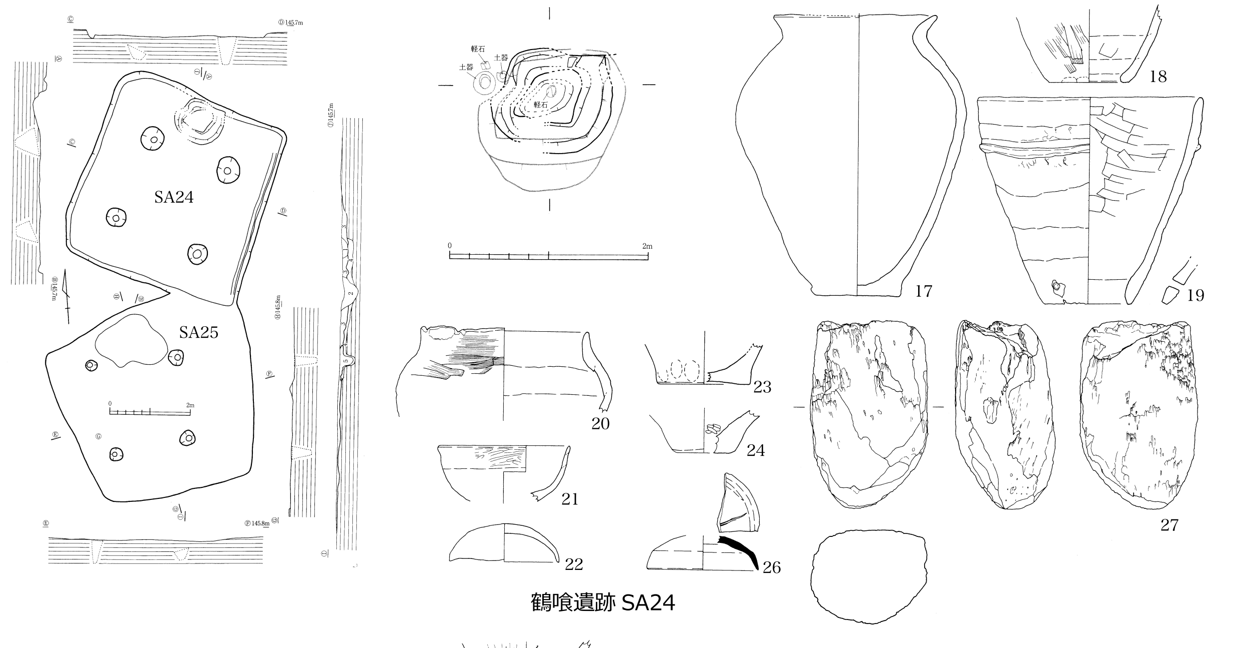
上苑Ａ遺跡５号住居

0 (1:8) 10cm

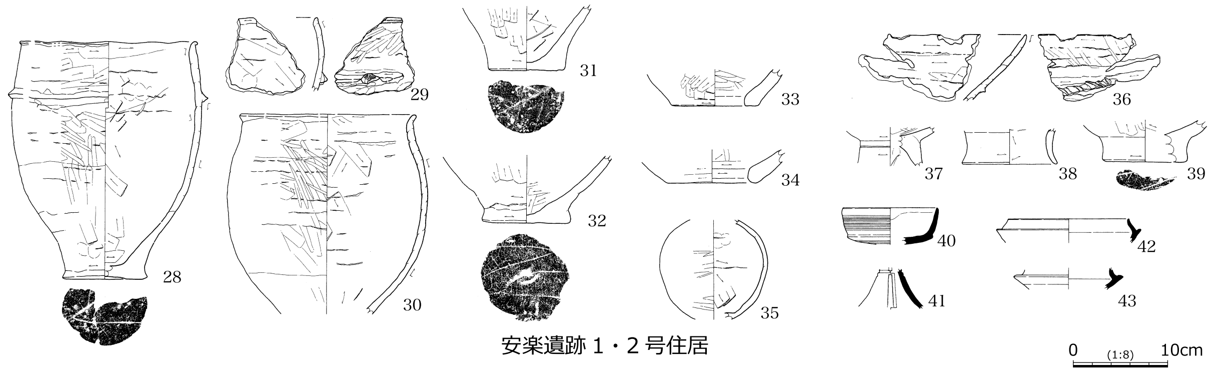
図７　笹貫式新段階の土器（１）



中尾遺跡４号溝

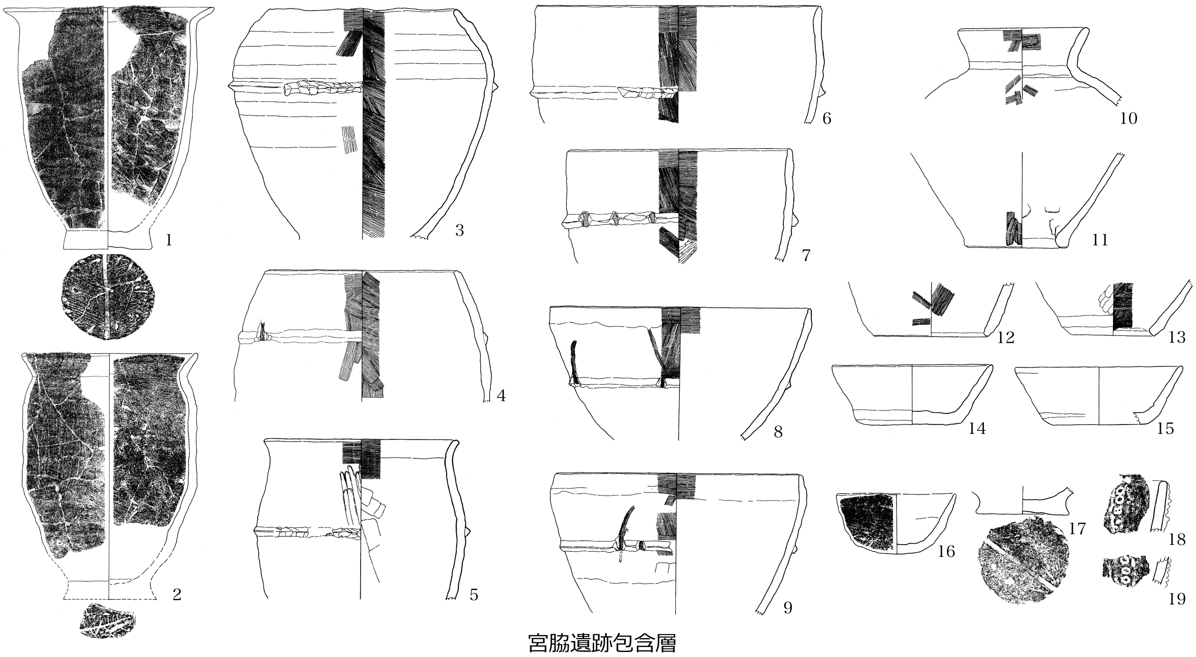


鶴喰遺跡 SA24

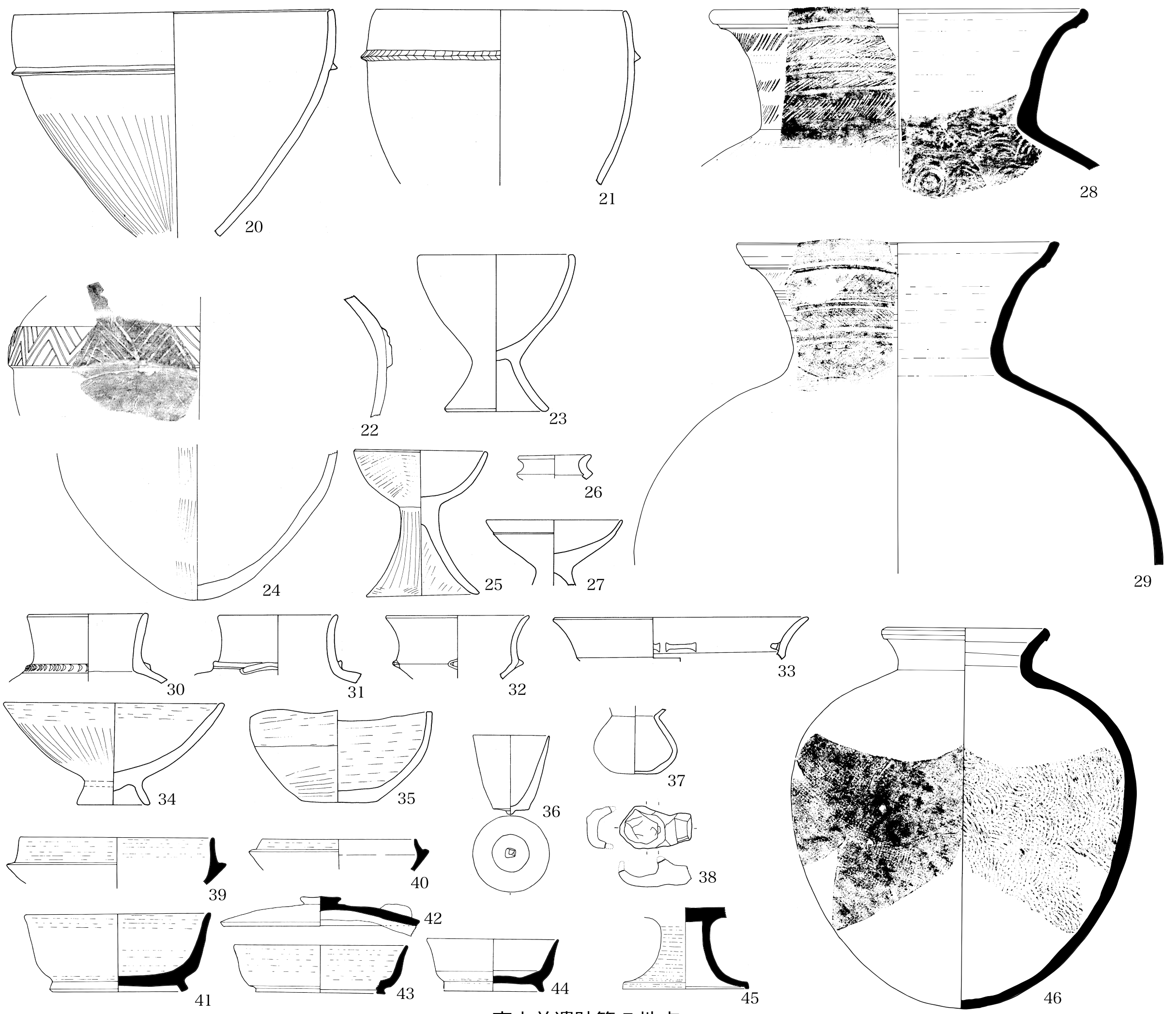


安楽遺跡１・２号住居

図８　笹貫式新段階の土器（２）



宮脇遺跡包含層



宮之前遺跡第５地点

図９　笹貫式新段階の土器（３）

（４）笹貫式新段階の設定

中村直子は、須恵器の共伴例から笹貫式の細分を行った。そして、笹貫式でも新しい段階に位置づけられる一群を「笹貫式新段階」として設定した（中村直2009）。笹貫式新段階の特徴として、①甕や甑に施された太くまばらな刻目突帯、②複数器種において認められる器面に残る接合線、③甕の器面に施されたミガキ、④甑の安定的出土、⑤口が広く浅いタイプの杯、⑥小型化した高杯があげられている。図５・６には笹貫式古段階、図７～９には笹貫式新段階の代表的な資料を掲載している。

笹貫式新段階が設定されたことによって、これまで須恵器が共伴しなければ年代的な位置づけが難しかった成川式土器について、新古の関係性はおおよそ理解できるようになってきた。相美伊久雄は、志布志湾北岸域の笹貫式新段階に位置づけられる甕について同時期の宮崎平野、都城盆地との資料と比較を行った（相美2014）。比較の際、「南九州的特徴」として突帯の貼付、ミガキ調整、底部形態の脚台を、「宮崎平野的特徴」として器面の接合痕、木葉痕をあげ、土器の属性レベルにおける複雑な交流関係を示した。

以上のように、笹貫式新段階の資料が蓄積されることによって、７世紀～８世紀前半の九州南部における食器構成や地域間交流の議論も進展しつつある。一方、「成川式土器様式がどのように消えて他の土器様式に変わるのかという“様式の崩壊（変換）過程”」（下山1995）については不明な点が多く残っている。食器組成をみると古墳時代後期の九州南部では、置食器である高杯で手食中心であるのに対し、９世紀段階には手持ち食器である土師器杯や須恵器杯を中心としたものに変化しており、食事様式においても大きな変化があったことが想定されている（中村2013・2016）。

外来系の食膳具を受容する中で、煮炊具ついては成川式土器の伝統を保持しており、笹貫式新段階の甕と古代の土師器甕の共伴例は未確認だった。指宿地域では、笹貫式新段階の甕と古代の土師器甕の「折衷型」と位置づけられる資料（下山1992，松﨑2015）も出土しているが、資料数が少ないこともあり、安定した器種として存在するかは不明である。

（５）敷領遺跡３号建物跡の調査

そのような中、指宿市敷領遺跡範囲内で確認調査が実施され、開聞岳の噴出物に被覆された倒壊建物跡が確認された（中摩ほか2015）。敷領遺跡は874年３月25日（貞観16年３月４日）の開聞岳噴火（Km12）によって埋没した火山災害遺跡（集落遺跡）で、橋牟礼川遺跡から直線距離で３㎞ほどの地点に位置する。

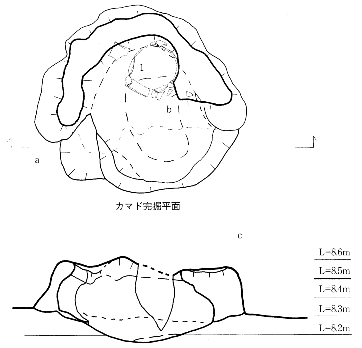
この開聞岳の噴火年代については、『日本三代実録』に記された火山災害報告と橋牟礼川遺跡の調査成果をもとに、年代と堆積層の類推が行われている（永山1992，下山1992）。現在のところ、874年の開聞岳噴火に伴う火山災害遺跡は指宿市内で橋牟礼川遺跡と敷領遺跡、慶固遺跡、小田遺跡が確認されている。

なかでも敷領遺跡では、平成７年以降、開発に伴う発掘調査や大学の学術調査によって火山被害直後の集落の様相が徐々に解明されつつある。中敷領地区では２軒の建物跡が確認されており、居住域の北側には畠域、東側には水田域が確認されている。当遺跡は、開聞岳噴火に伴う噴出物で良好な状態で建物や耕作地がパックされていることから、古代の揖宿郡における集落を検討する上で非常に重要な遺跡となっている。平成26年度に確認された建物跡は、長軸5.3ｍ×短軸3.8ｍの掘立柱建物である（図10，敷領遺跡３号建物跡）。建物跡の周囲は壁を外側から土盛りした痕跡が残っており、壁立に対して外側から土盛りをしたと考えられる。建物の南壁では土盛りが途切れていることから、南側が出入口であると想定できる。また、建物周囲の土層を観察すると、火山礫や火山灰をともなう一次降下物、その上層に二次堆積物である土石流層が見られるのに対し、建物内部には一次堆積物はみられない。そのため、３号建物跡は噴火直後（一次堆積物降下時）まで上屋のある状態で被災したと考えられる。

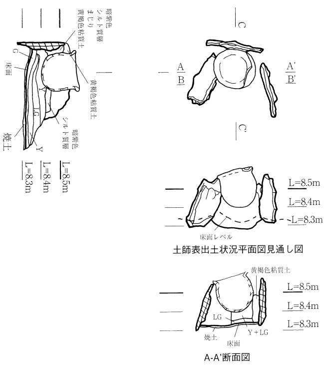
この建物跡の特徴は、建物内の調理施設が良好な状態で保存されていたことである。建物内では、中央軸よりやや離れた場所で壁に付かない独立したカマド跡、石組炉が検出されている。この二つの調理施設には、煮炊具である丸底甕が掛けられた状態で、二次堆積物によって被覆されていた。カマド内部

建物跡平面図

カマド検出平面図



カマド完掘平面・断面図



石組炉見通し・断面図

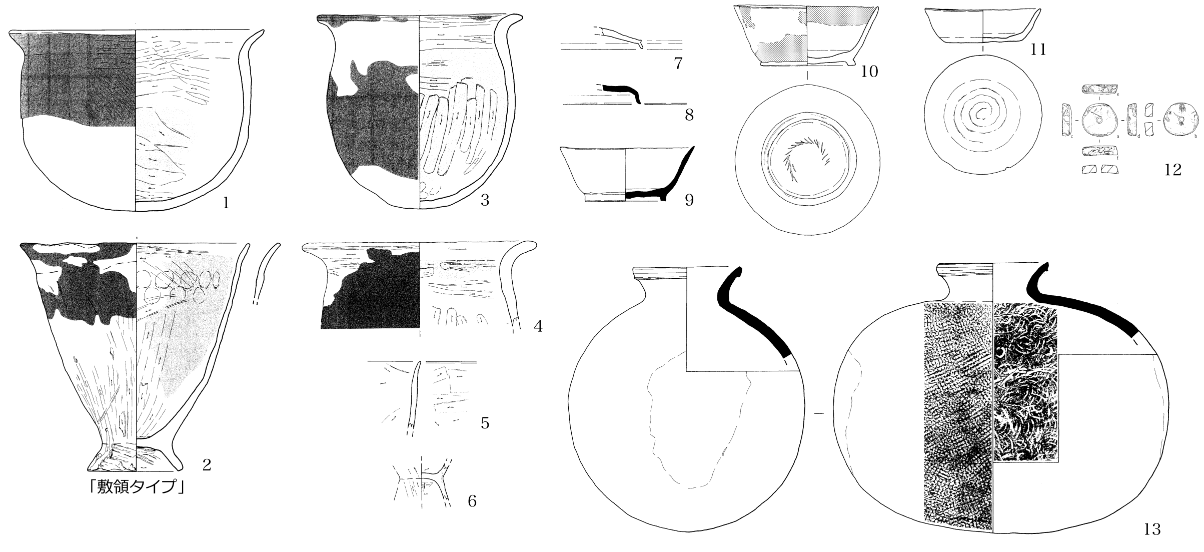


図10　敷領遺跡３号建物跡の遺構と出土遺物

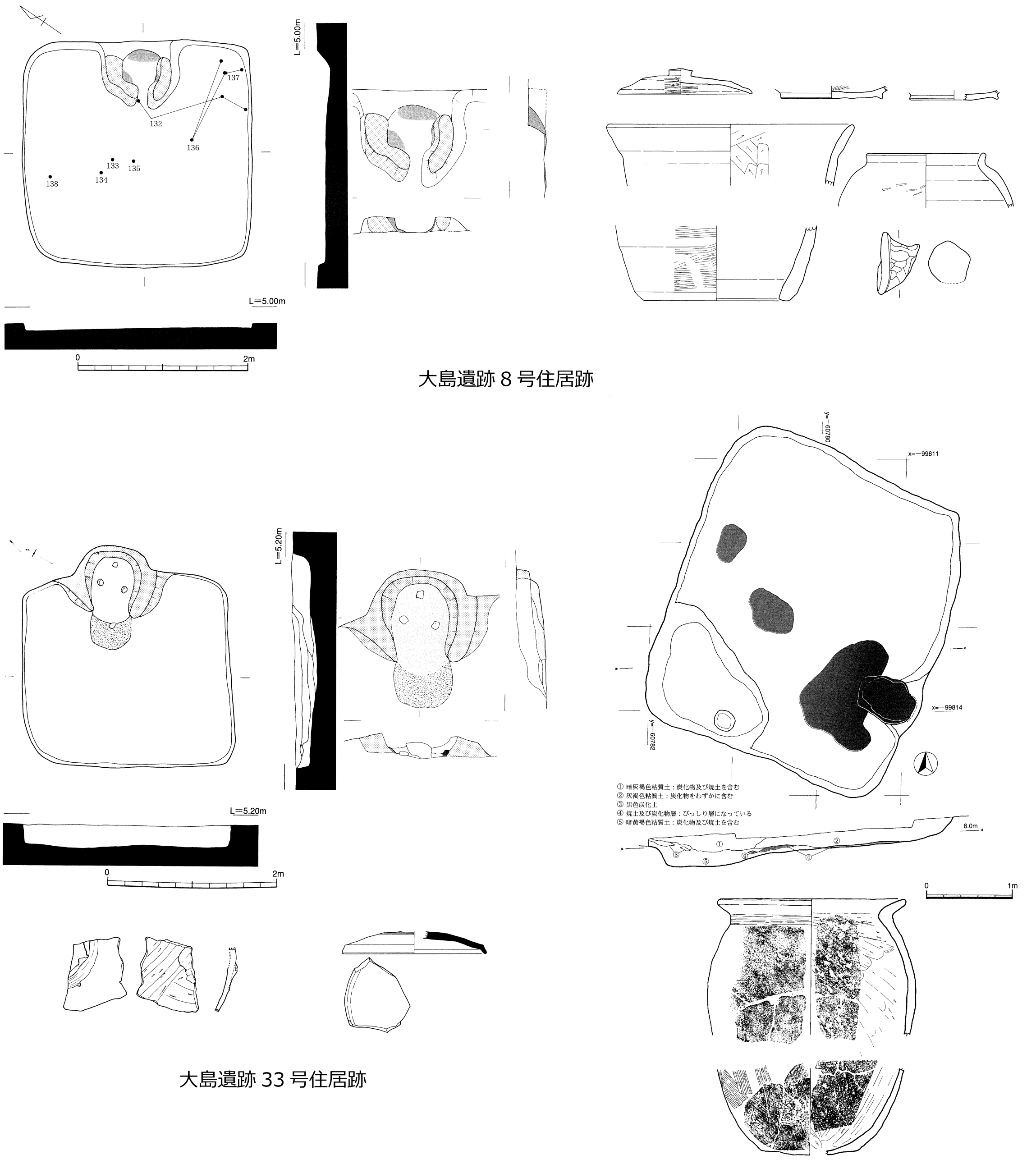


図11　薩摩大隅におけるカマド付住居跡

には灰が詰まった状態で、カマド焚き口では炭化物がまとまった状態でみられており、噴火当時までこの建物は機能していたと考えられる。これまで、薩摩・大隅における造り付けカマドの検出例は、薩摩川内市大島遺跡８号・33号住居、出水市大坪遺跡SH29のみであり（上床2015）、いずれも壁につくタイプである（図11）。そのため、敷領遺跡の建物中央で独立し、煙道をもたないタイプのカマドがどこからの影響を受けて作られたかは今後検討する必要がある。

また、カマドの東壁には横転した状態で、成川式土器の甕が出土している。この甕の形態は笹貫式新段階の甕と異なり、口縁部が内湾せず頸部から若干外反する形態である。また、突帯などの装飾はつかない。器壁は胴部で２㎜～３㎜と薄く、先述した橋牟礼川遺跡２号住居から出土した甕の器壁が５㎜～６㎜であることを考えると薄手の作りである。この成川式土器は、床面直上に倒れた状態であり、器の

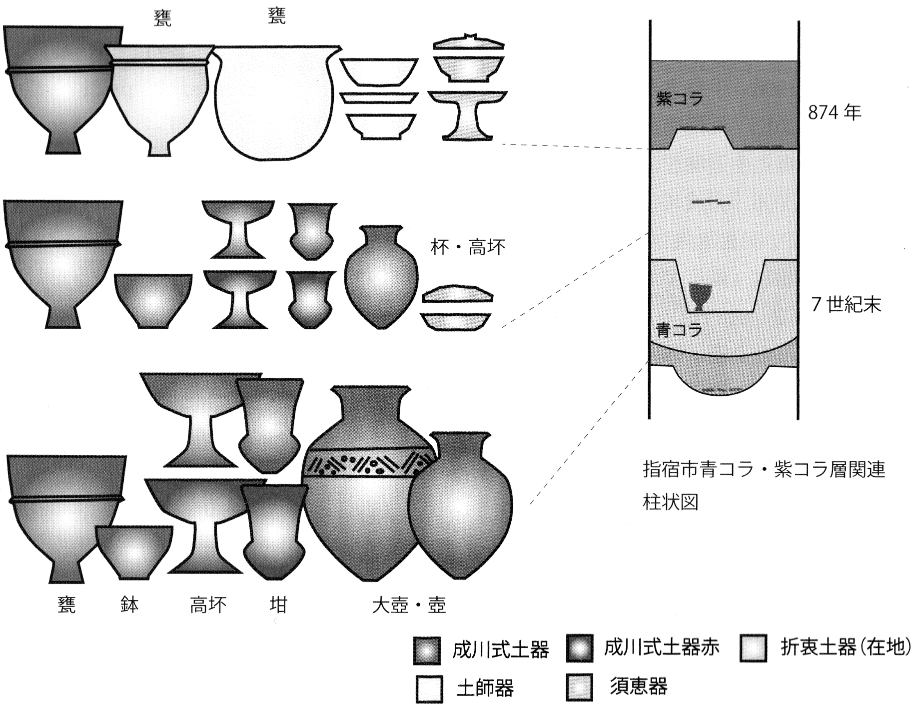


図12　指宿地域における成川式土器最終段階の土器相（中村2015より引用）

内部には開聞岳噴火に伴う２次堆積物が堆積していることから、カマドに設置された土師器甕同様、９世紀後半の年代が想定される。この甕は笹貫式新段階の甕とは形態的な類似性や共通点が少なく、型式学的な連続性は希薄である。現段階では、この甕を「敷領タイプ」として位置づけたい。敷領タイプの特徴として、①脚台を有する、②器壁が薄い、③口縁部形態はゆるやかに外反する、④突帯などの装飾は施されない等があげられる。その他、建物内部からは、須恵器杯、土師器杯、墨書土器、須恵器横瓶などが出土しており、当時の食器構成を知る上で非常に良好な一括資料と言える。

また、敷領遺跡３号建物跡で重要な点は、（A）九州南部で初めて成川式土器の甕と土師器甕が共伴して出土したこと、（B）平田信芳が指摘した成川式土器の下限（台付甕の消失）は、丸底の釜形土器とカマドの出現以降と考えられてきたが（平田1979）、カマドが受容・定着しても脚台付きの甕を使用していたこと、である。この調査によって、成川式土器の下限は（指宿地域において）９世紀後半まで下ることが確実となった（図12）。

２．薩摩・大隅における８世紀代の土師器編年

成川式土器が（指宿地域において）９世紀後半まで存続することが明らかになったことから、古代に位置づけられる土師器がいつから、どのように普及するかが課題となる。九州南部では大宝２年（702年）に薩摩国、和銅６年（713年）に大隅国が日向国から分かれて建国されており、８世紀初頭頃から律令制が普及し始めたと考えられる。

しかし、『続日本紀』和銅７年（714年）三月壬寅条に「隼人昏荒、野心未習憲法。因移豊前国民二百戸、令相勧導也。」とあり、薩摩・大隅両国建国時において律令制の導入は順調ではなかったと考えられる。この移民については、大隅国桑原郡に大原・大分・豊国・答西・稲積・広西・桑善・仲川の８郷が記されていることから（図２）、大分は豊後国大分郡からの移民と考えられるため、豊前国だけでなく豊後国からも移民が行われたことがわかっている（永山2011）。また、この移民政策は大隅国だけでなく薩摩国

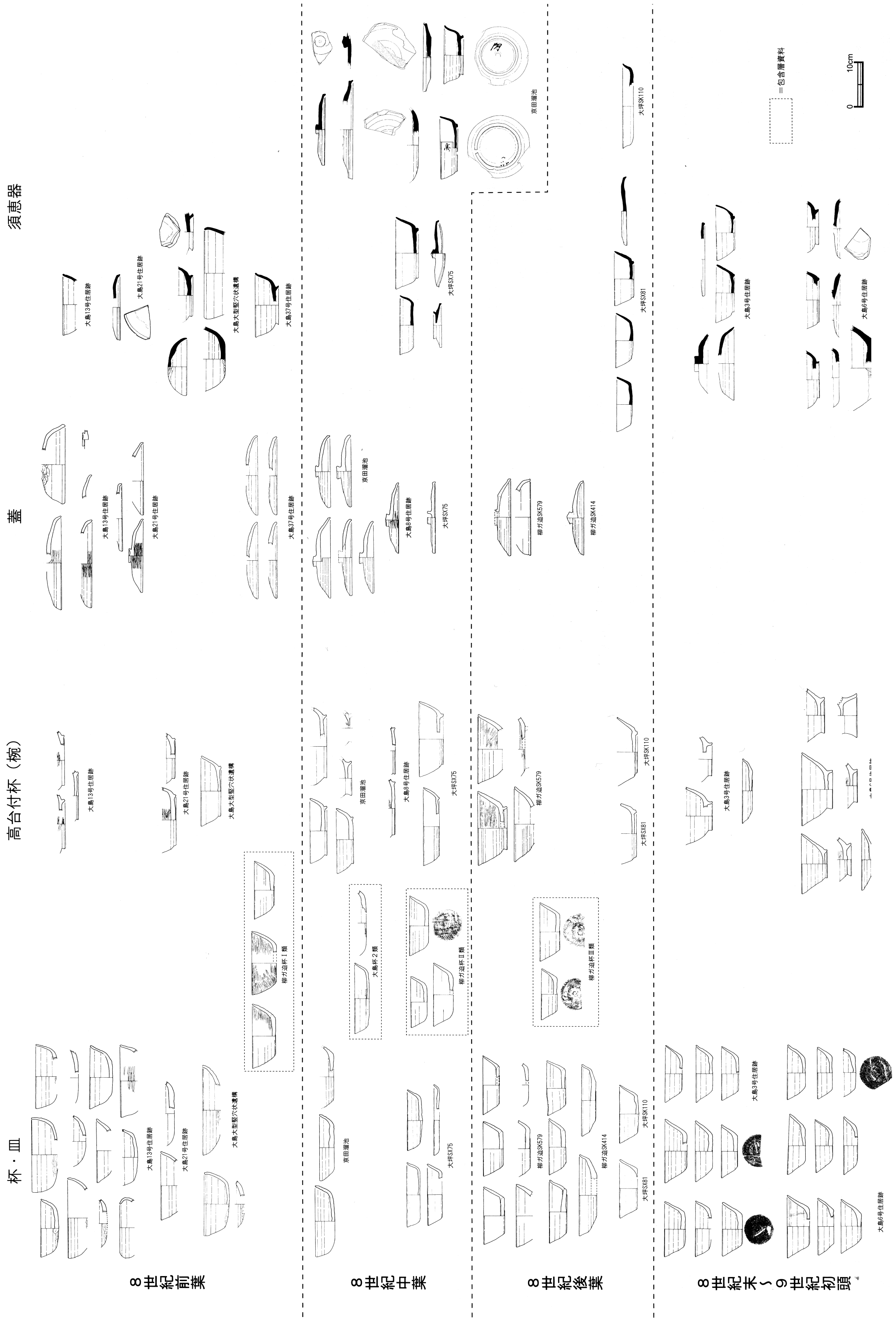


図13　薩摩・大隅国における8世紀の土師器編年（深野2012より引用）

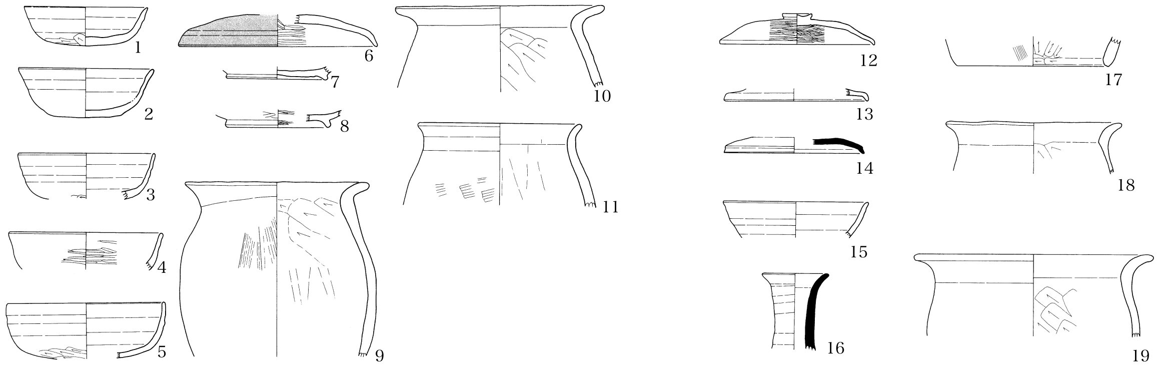


図14　深野編年１期の土器（８世紀前葉）

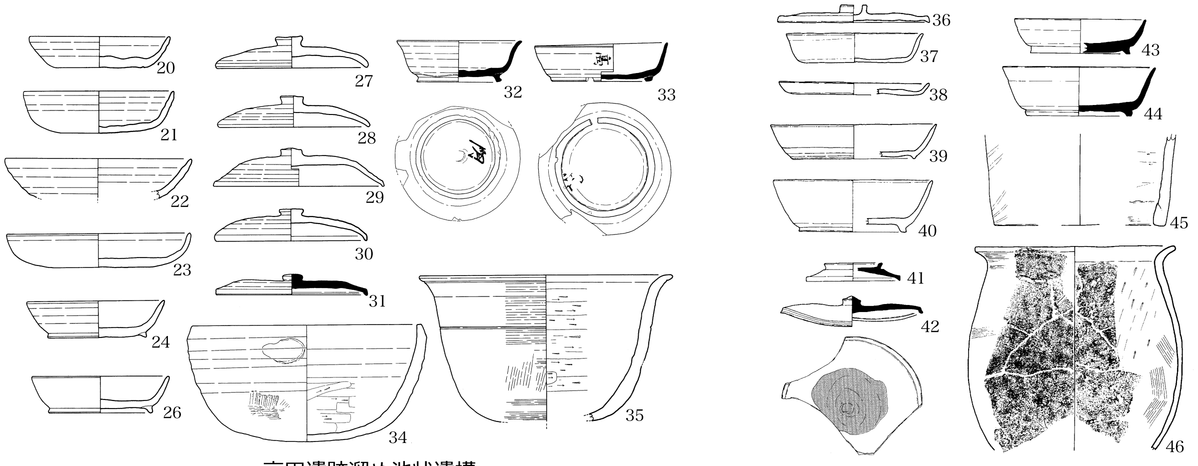


図15　深野編年２期の土器（８世紀中葉）

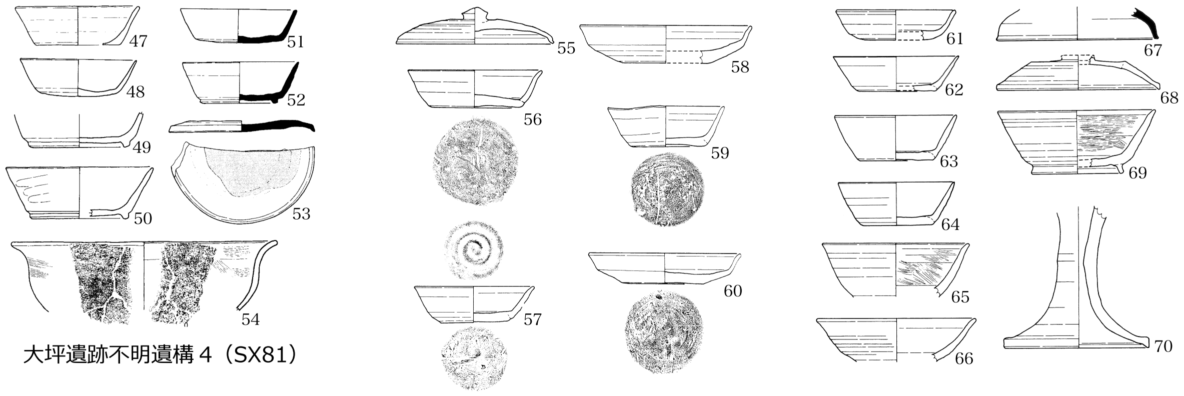
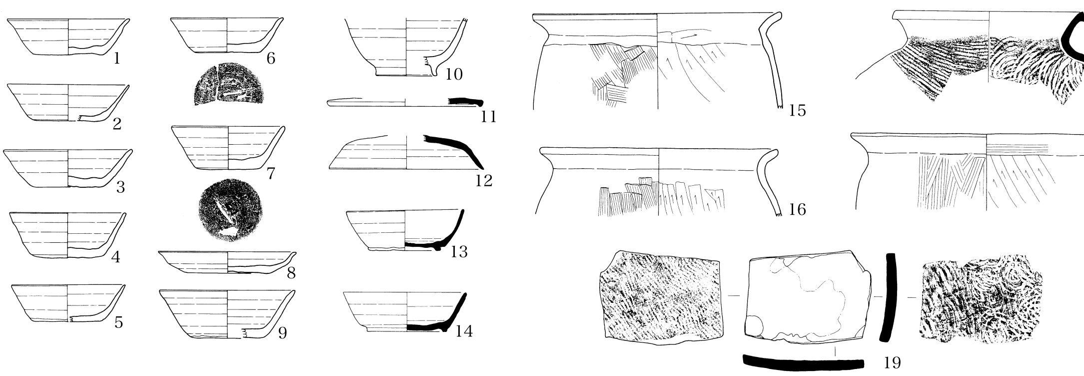


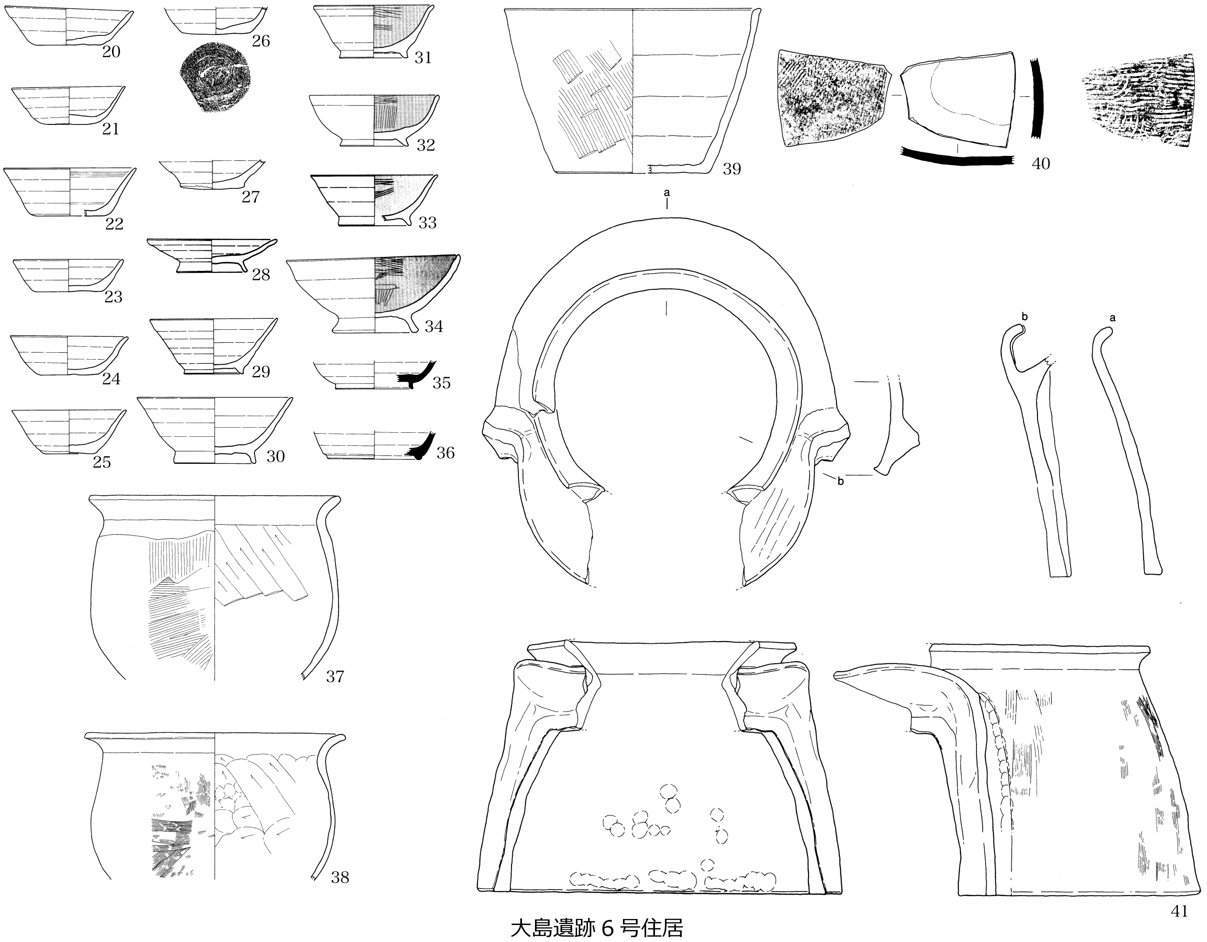
図16　深野編年３期の土器（８世紀後葉）

でも実施されている。薩摩国高城郡には、合志・飽田・鬱木・宇土・新多・託万の６郷があるが、このうち合志・飽田・宇土・託万の４郷の郷名が肥後国の郷名に一致していることから、肥後国からの移民が想定されている（永山2009）。大隅国桑原郡、薩摩国高城郡ともに国府所在郡であることが共通しており、国府設置を目的として他郡よりも重点的に律令化が推進されたと考えられている（深野2012）。

薩摩・大隅国の古代土師器については、中村和美の分類（中村1994，1997）や松田朝由の高篠遺跡の出土土器をもとにした編年（松田2004）が示されている。最近では、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う



大島遺跡３号住居



大島遺跡６号住居

図17　深野編年４期の土器（８世紀末～９世紀初頭）

調査により、薩摩川内市大島遺跡（宮田ほか編2005）、京田遺跡（川口ほか編2005）、出水市大坪遺跡（東ほか編2005）において８世紀代の良好な資料が報告されている。なかでも大島遺跡、大坪遺跡で鹿児島県初となる造り付けカマド住居が検出されたことは重要である。九州南部において造り付けカマドは古墳時代から存在しておらず、脚台をもつ成川式土器文化の中ではその受容は拒否されていると考えられてきた（杉井2004）。そのため、大島遺跡や大坪遺跡のカマド付住居の存在というものは、文献に記載のある移民政策を考古学的に裏付ける資料の一つと考えられている（宮田2005, 永山2009）。対して川口雅之は、大島遺跡において造り付けカマドが検出された住居跡が23基中２基と少ないこと、古墳時代後期と古代の土坑墓が近接して検出されており、古墳時代以来の墓域を継続していることから、この遺跡を形成

した集団の主体は在地の人々であった可能性も指摘している（川口2006）。

また、大隅国桑原郡内における発掘調査も進展しており、始良市柳ガ迫遺跡、城ヶ崎遺跡、外園遺跡を総称する春花地区遺跡群が確認されている（深野編2011・2012）。なかでも城ヶ崎遺跡では路面幅3.7～4.7m、道路幅5.9～6.6mの側溝を備えた道路上遺構を検出し、８世紀末～９世紀前半に位置づけられる土師器や越州窯系青磁碗や石製腰帯具、フイゴの羽口なども出土していることから、薩摩国府と大隅国府をつなぐ古代駅路の存在が推定されている。深野信之は柳ガ迫遺跡の出土土器をもとにして、薩摩国府周辺の資料も加味して分類･編年案を提示している(図13)。この編年が構築されたことによって薩摩･大隅国の８世紀代の土師器について、①薩摩・大隅国の土師器は８世紀前葉段階から回転台成形により製作されている、②８世紀代の杯・高台付杯・蓋には、回転台成形の後にヘラミガキが加えれるものが存在する、③杯の器形は、丸みを持つ深手のものから須恵器を模倣した箱形のものへ移行する、④杯の底部外面調整は、８世紀前葉は手持ちヘラケズリが主体で、中葉には回転ヘラケズリ・不定方向のナデが加わる。後葉には手持ちヘラケズリはなくなり、回転ヘラケズリ・不定方向のナデで調整される。８世紀末～９世紀初頭では調整の意識は継続するものの、ヘラ切り痕を完全に消せない資料が増える、といった特徴が整理された（深野2012）。

深野編年が構築されたことにより、薩摩・大隅国の国府が所在する郡において８世紀前半以降、律令制期の土師器へ転換していることが確認された。中村直子は、国府周辺における土器様式の変化について、地域的・時間的な差異を持ちながら、律令制がいち早く普及した薩摩・大隅国府周辺では、土器様式の変化が早かったと指摘している（中村2008）。この土器様式転換の背景には、移民政策や律令制によるヒト・モノ・情報の流入量に大きな地域差があったことが要因と考えられる。一方で、指宿地域では律令的な食膳具を様式中に取り込みながらも、煮炊具は土師器甕と成川式土器の甕が併用されている。この背景については、今後の課題としたい。

３．九州南部における須恵器生産

薩摩・大隅における須恵器窯跡は、薩摩川内市鶴峯窯跡、伊佐市岡野窯跡群、南さつま市中岳山麓窯跡群が知られている。本論では、近年発掘調査が進めらている九州南部最大の規模をもつ中岳山麓窯跡群について説明する。

中岳山麓窯跡群では、1984年に上村俊雄を団長とする鹿児島大学考古学研究室によって荒平第１支群の地形測量調査が実施された（上村1984）。この測量調査では、荒平第１支群において５基の窯跡が確認されている。本支群の特徴として、①半地下式構造の無段登窯であること、②スサ入り粘土塊を土器台として使用していること、③スサ入り粘土の支柱を用いていること、④特定の器種を生産していること、⑤重ね焼きを行っていること、⑥瓶形に近い広口形式の器形的特徴、叩きの種類などから９世紀代から10世紀はじめごろに比定できること、などが指摘された（上村ibid.：p.203）。

その後、荒平第２支群、嶽山第１･第２支群、テンド堀支群を含めた採集資料が報告されている（上村･坪根1985）。本論のなかでは、新出資料をふくめた中岳山麓窯跡群の生産品の内容や開窯の技術系譜が整理されている。その特徴として、①粘土焼台があること、②熊本県荒尾市内の窯跡に存在する穿孔須恵器がみられること、③壺の底部外面に同心円タタキがみられること、④胴部につまみを有する須恵器がみられること、⑥壺頸部に＋印の記号が線刻された須恵器がみられること、が示された。とくに、壺の底部同心円タタキや穿孔須恵器などの製作技法が、熊本県荒尾市に所在する荒尾窯跡群にみられる特徴と類似することから、中岳山麓窯跡群の工人達は肥後から連れてこられ、阿多郡衙の管理下で須恵器製作にあたったことが推定された（上村・坪根idid：p.173）。

中岳窯跡群は古代の地方窯として比較的規模も大きいことから発見当初から注目されてはいたが、ながらく発掘調査は行われこなかった。しかし、2014年２月に荒平第２支群において、中村直子を団長

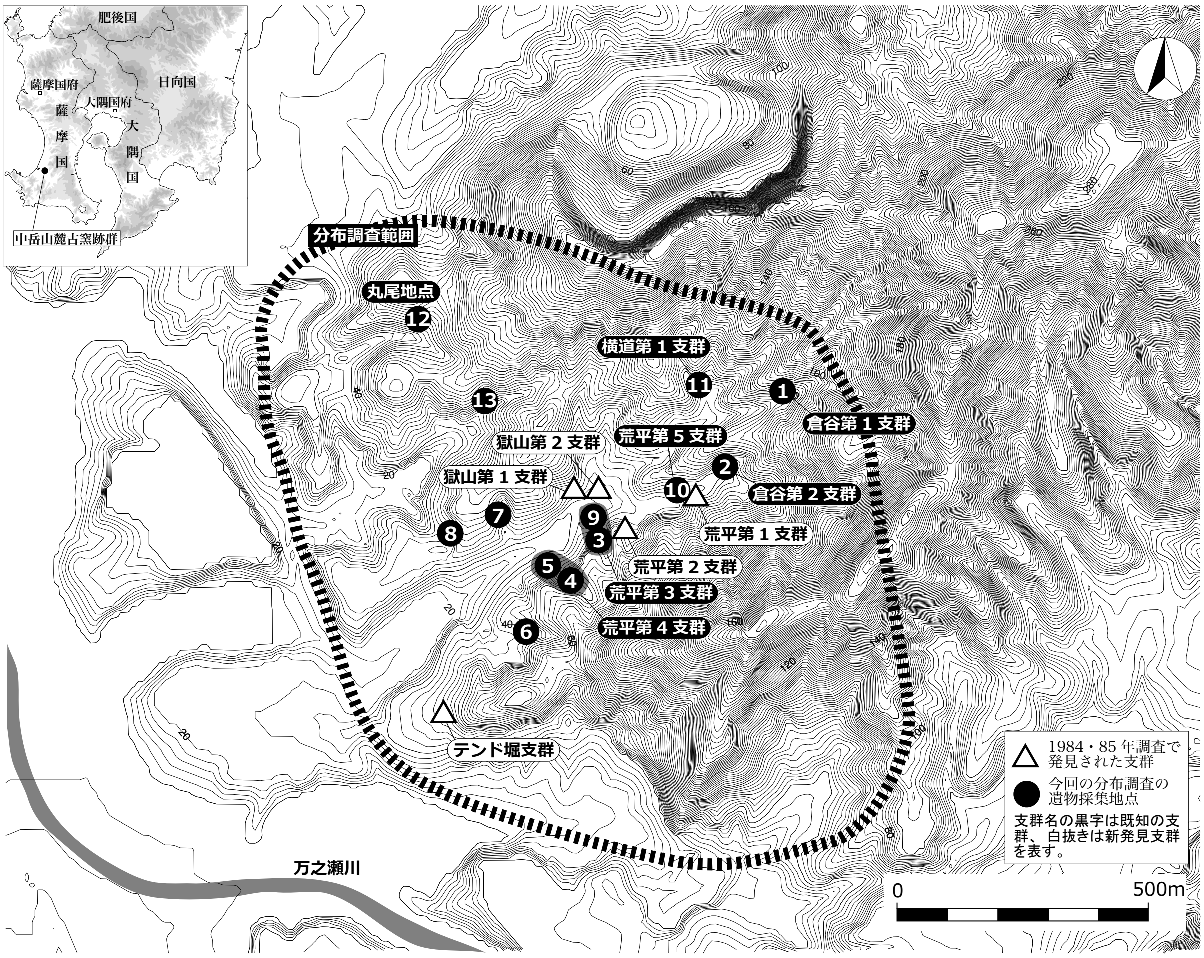


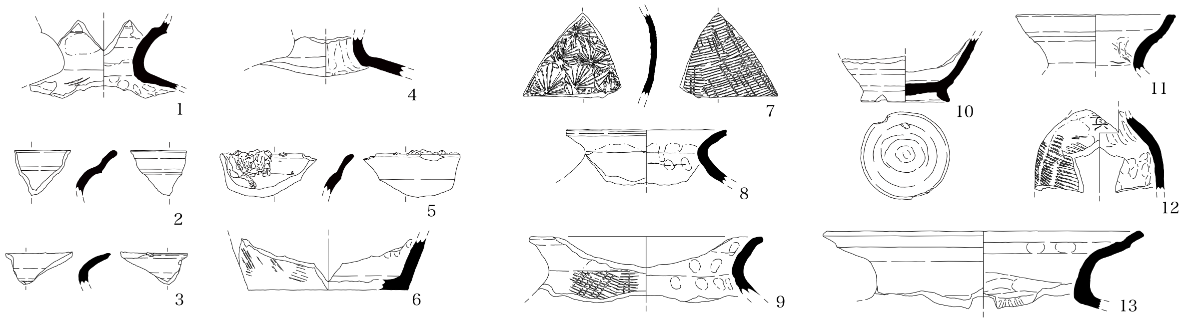
図18　中岳山麓窯跡群の位置と各支群の分布

とする調査チームによって発掘調査が実施された。この調査では荒平第2支群に8ヶ所のトレンチを設定し、西側斜面のFトレンチから窯体が確認された（中村・篠藤編2015）。地表面から岩盤を掘り込み天井を構築している点、天井を支えるための支柱が伴う点から半地下式構造の窯であることが想定されている（大西2015a・b）。

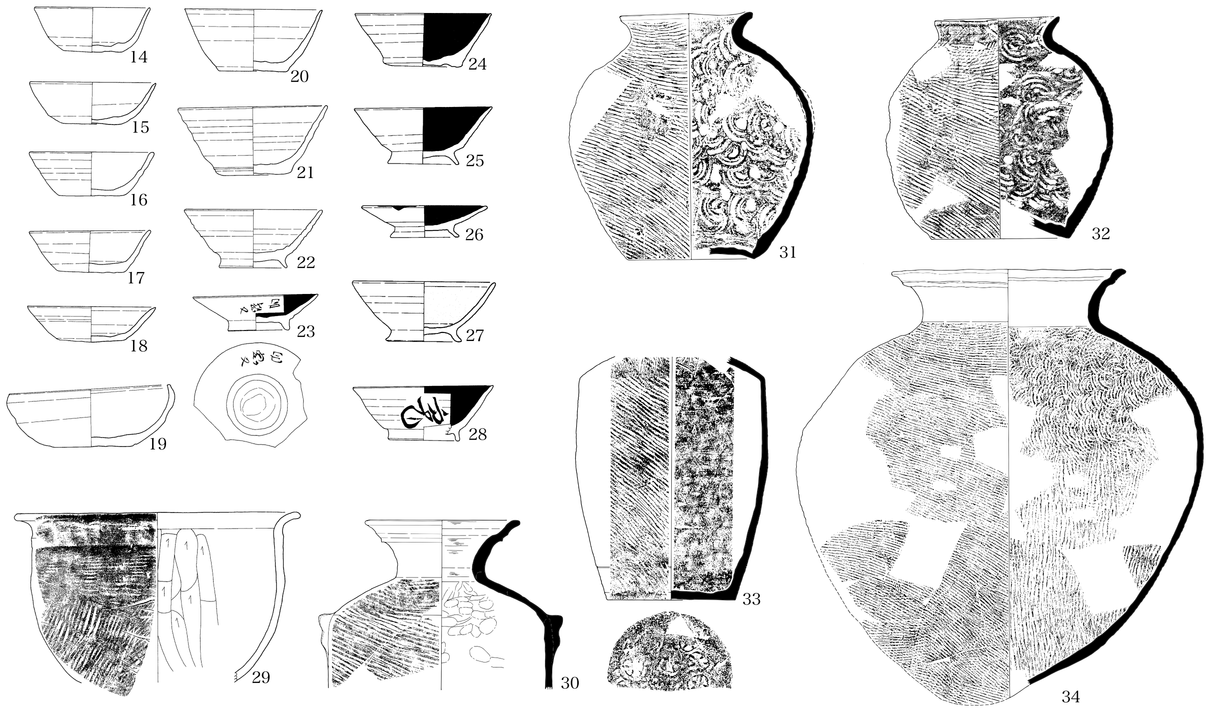
生産地に関する研究は始まったばかりだが、消費地・流通範囲については表採資料をもとに胎土分析が進められている。三辻利一は蛍光X線分析を用いて、中岳窯跡群（荒平支群、獄山支群）で採集された須恵器と霧島市妻山元遺跡、城山山頂遺跡から出土した須恵器、荒尾窯跡群の須恵器の比較を行っている（三辻1985）。結果、中岳窯跡群と荒尾窯跡群は元素レベルで完全に相互識別できることがあきらかとなった。また、妻山元遺跡の須恵器は中岳窯跡群の領域に、城山山頂遺跡の須恵器は荒尾窯跡群の領域に含まれることがわかった。

池畑耕一らによると、中岳窯跡群で生産された須恵器は、本土側だけで消費されたのではなく、奄美諸島まで供給されていることが指摘されている（池畑ほか2008）。同様に、中村直子・篠藤マリアによる中性子放射化分析（NAA）においても、大隅諸島、奄美諸島まで中岳産の須恵器が流通していることが明らかとなっている（中村ほか2014，篠藤ほか2015）。

南西諸島への流通が指摘される一方、鹿児島県域においても中岳産と考えられる資料が報告されている（中園ほか1987）。中岳山麓周辺では南さつま市芝原遺跡において中岳山麓産と考えられる須恵器が出土している（図18）。県内の流通範囲は、薩摩国府・国分寺遺跡、成岡・西ノ平遺跡、小瀬戸遺跡、妻山



荒平第２支群とその周辺遺物



芝原遺跡８号溝（西）

図19　荒平第２支群出土須恵器と芝原遺跡出土須恵器

元遺跡などであり、日向国の宮崎学園都市遺跡への流通も示唆されている（上村2005）。さらに、東九州・瀬戸内・近畿まで流通していた可能性も指摘されており（網田2003・2012）、その流通範囲の実態についてはさらなる検討が必要と考えられる。

おわりに

以上、九州南部の土器生産について概観してきた。九州南部の８世紀という時期は在地伝統的な成川式土器から古代土師器へ転換する過渡期にあたり、律令制の導入や移民政策など大きな社会変革が起きる時期でもある。また、９世紀に入ると中岳山麓窯跡群において大規模な須恵器生産が始まる。このような状況の中で土器様式が「転換」する国府周辺の地域、指宿地域のように「併存」する地域といった地域差が生まれる背景にはどのような要因が考えられるのか、今後の検討課題としたい。

謝辞

本論を執筆するにあたり、以下の方々にご指導・ご教授をいただきました。心より御礼申し上げます（五十音順、敬称略）。

石田智子、恵島瑛子、鎌田洋昭、鷹野光行、中摩浩太郎、中村直子、新田栄治、
本田道輝、松山初音、山元瞭平、横手伸太郎、與嶺友紀也、渡部徹也、渡辺芳郎

参考文献

網田龍生 2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ－考古学研究室創設30周年記念論文集』龍田考古会 357－386頁
網田龍生 2012「古代の須恵器生産」『荒尾市史通史編』荒尾市史編集委員会　131－142頁
池畑耕一 1980「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号　鹿児島県考古学会　１－41頁
池畑耕一・堂込秀人・森雄二・黒川忠広・上床真・三辻利一 2008「鹿児島県内遺跡出土の平安時代の須恵器の山地問題」『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会　286－287頁
上床真 2015「南部九州における古代のカマドに関する覚え書き」『縄文の森から』第８号　鹿児島県立埋蔵文化財センター　77－84頁
大西智和 2015a「鹿児島県南さつま市中岳山麓窯跡群の窯構造の把握に向けた試み」『Archaeology from the SouthⅢ－本田道輝先生退職記念論文集－』本田道輝先生退職記念事業会　269－278頁
大西智和 2015b「中岳山麓窯跡群の窯構造の推定」『中岳山麓窯跡群の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター　49－54頁
乙益重隆 1974「第二節 鉄器・鉄製品」『成川遺跡』吉川弘文館　70－108頁
鎌田浩平 2009「成川式土器の地域編年－薩摩半島側鹿児島湾沿岸とその周辺を対象域として－」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集－』南九州縄文研究会　129－151頁
鎌田浩平 2014「薩摩半島西海岸側の地域編年に向けての基礎作業－甕・壺形土器を対象として－」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会　191－204頁
上村俊雄 1984「鹿児島県荒平須恵器古窯址群発見の意義とその問題点について」『古文化談叢』第14集　九州古文化研究会　187－204頁
上村俊雄・坪根伸也 1985「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯跡群に関する一考察」『古文化談叢』第15集　九州古文化研究会　151－174頁
上村俊雄 2005「中岳山麓古窯跡群」鹿児島県教育委員会編『先史・古代の鹿児島資料編』鹿児島県教育委員会　246頁
河口貞徳 1952「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』第２号 鹿児島県考古学会　３－17頁
河口貞徳・河野治雄・重久十郎 1985「成川弥生式群集墓」『考古学雑誌』第43巻第４号　34－42頁
河口貞徳 1964「南九州地方」小林行雄・杉原壮介編『弥生式土器集成本編１』pp.25－29
川口雅之 2006「薩摩国府推定域とその周辺の様相－近年の調査成果から－」『条里制・古代都市研究』第22号　条里制・古代都市研究会　108－117頁
小林行雄 1938「南九州地方及び東九州地方」『彌生式土器集成図録正編解説』東京考古學會　23－33頁
相美伊久雄 2004「「成川式土器」の器種組成について（予察）－杯形土器の様相を中心に－」『縄文の森から』第２号　鹿児島県埋蔵文化財センター　29－36頁
相美伊久雄 2014「南九州東端域における７～８世紀の土器様相－志布志湾北岸域の甕形土器を中心に－」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会　221－238頁
篠藤マリア・鐘ヶ江賢二・中村直子 2015「中岳山麓窯跡群の調査に伴う生産と流通に関する自然科学的研究について」中村直子・篠藤マリア編『中岳山麓窯跡群の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター　58－66頁
下山覚 1990「鹿児島県指宿市橋牟礼川遺跡に見る火山災害史と文化変異」『日本考古学協会第56回総会研究会発表要旨』日本考古学協会　15－17頁
下山覚 1992「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第８号　人類史研究会 65－80頁
下山覚 1993「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年的考察－「日本三代実録」貞観16年７月29日条についての考古学的アプローチ－」『古文化談叢』第30集（下）　九州古文化研究会　1179－1193頁
下山覚 1995「考古学からみた隼人の生活－「隼人」問題と展望－」新川登亀男編『西海と南島の生活・文化』名著出版　169－199頁
杉井健 2004「前方後円墳分布圏とその周辺における生活様式伝播の多様性」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会　307－314頁

多々良友博 1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号　鹿児島県考古学会　89－116頁
坪根伸也 1986「成川式土器小考–甕型土器突帯における一試論－」『鹿大史学』第34号　鹿児島大学史学地理学教室　23－40頁
寺師見國 1950「鹿児島縣の彌生式土器」『考古学雑誌』第36巻第１号　40－49頁
寺師見國 1952「鹿児島県の彌生式土器」『鹿児島県考古学会紀要』第１号　鹿児島県考古学会　29－34頁
中園聡・中村直子 1987「鹿児島県隼人町弓削丘出土の須恵器壺について」『鹿大考古学会会報』第５号　鹿児島大学考古学会　6－８頁
中村和美 1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』第10号　149－171頁
中村和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号　鹿児島県考古学会　88－102頁
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号　鹿児島大学法文学部考古学研究室　57－76頁
中村直子 1999「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション－南九州の土器をメディアとして－」『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－』鹿児島大学　63－71頁
中村直子 2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めてコミュニケーションのかたち－ことば・もの・メディアー』鹿児島大学　47－62頁
中村直子 2009「７・８世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一還暦記念論文集－』中巻　南九州縄文研究会　119－128頁
中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究：５世紀から７世紀前半の沖縄伊江島』熊本大学　259－268頁
中村直子 2014「中岳山麓窯跡群に関する研究現状と課題」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会　279－287頁
中村直子 2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』 鹿児島大学総合研究博物館　25－30頁
中村直子 2016「遺跡から見た大隅国成立前後の社会とその変遷」『蘇る大隅国の実像－古代・中世の大隅半島部の歴史－』10－ 13頁
中村直子・Radegund HOFFBAUER・Johannes STERBA・Michael RAITH・篠藤マリア・鐘ヶ江賢二・大西智和 2014「中岳山麓窯跡産須恵器の生産過程と産地同定に関する鉱物学的研究」『日本文化財科学会第31回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 234－235頁
中村直子・篠藤マリア編 2015『中岳山麓窯跡群の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
永山修一 1992「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10） 501－510頁
永山修一 2009『隼人と古代日本』同成社
永山修一 2011「大隅国桑原郡に関する若干の考察－柳ガ迫遺跡の理解のために－」深野信之編『柳ガ迫遺跡』姶良市埋蔵文化財発掘調査報告書（１） 157－161頁
濱田耕作 1921「薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第6冊』臨川書店　29－48頁
平島勇夫 1977「成川式土器」『つくし』第７号　つくし文化研究所　７－８頁
平田信芳 1978「古墳時代の遺物」『萩原遺跡』姶良町教育委員会　42－94頁
平田信芳 1979「隼人が用いた土器－成川式土器－」『隼人文化』第５号　隼人文化研究会　37－44頁
深野信之 2012「薩摩・大隅国における８世紀の土師器－柳ガ迫遺跡出土土師器の位置づけをめぐって－」『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』菟原刊行会　607－618頁
深野信之 2015「大隅国の古代官道について－姶良市船津・城ヶ崎遺跡を中心に－」『浮かび上がる大隅国の実像－古代・中世の鹿児島湾奥部－』21－30頁
松﨑大嗣 2015「成川式土器と古代土師器の「折衷型」－敷領遺跡十町地点出土の資料を中心に－」『Archaeology from the SouthⅡ－新田栄治先生退職記念論文集－』新田栄治先生退職記念事業会　205－220頁
松田朝由 2004「土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　387－399頁
宮田栄二 2005「調査のまとめ」『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80） 313－324頁
吉本正典 2006「７世紀の列島南西域－村落の諸相－」『Archaeology from the South』鹿児島大学考古学研究室　161－177頁